

---

# クロス

ナオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロス

### 【Nコード】

N0395Z

### 【作者名】

ナオ

### 【あらすじ】

少女には、決して誰にも知られたくない秘密があった。首に掛かるクロスだけが知る、忌まわしい過去。癒すことのできない心の傷を抱えた愛美は、優しい実の兄に禁断の想いを寄せるようになる。

小説サイト『Berry's Cafe』に掲載、完結した作品と同じものです。

母から兄の名を久しぶりに聞いたのは、六年生の夏だった。

「だからね、あんたはそこに行っても一人じゃないのよ。施設には他にも親のいない子どもが沢山いるの。今の世の中、別に珍しいことじゃないでしょ？ 父親が違ってても兄さんがいるんだから他の子よりましだと思わなきゃ」

古びたアパートの部屋の畳に座り、ひんやりした壁に背をつけて膝を抱えた私の裸足のつま先を、ガラス窓から差し込む沈みかけた太陽の濃い朱色が染めている。

夏の太陽のその強すぎる赤は、鏡に向かう母がいつも指でさす口紅の色に似ていた。

「お母さんは迎えに来てくれる？」

朱色の光から逃れようと抱えた膝を引きつけたが、こここのところ急に膨らみを増した胸が邪魔をする。

この頃では同じクラスの男子だけではなく、もっと大きな学生や大人の男の人までが私の顔と胸に視線をとめるようになり、それが恥ずかしくて嫌でたまらなかった。

「それはね、あんた次第よ」

母は化粧を終えると、レースのついたスリップの上に花柄の薄いワンピースをはおり、ほっそりした身体に似合わないほど豊かな胸を強調するように、胸元の開きを両手でぐっと引き下げた。

鏡の中の自分を熱心に見つめたまま、明るい色の茶色い長い髪を少し乱暴に梳かす。

「あんたが母さんの幸せを願えるいい子になればね。嘘つきを直すいい機会よ」

母は手を止め、鏡の中から一瞬私を見つめた。

こんな時の母の目は、私をいつも落ち着かない気持ちにさせる。母の冷たい視線が耐え切れず、私は言葉もなくうつむいた。

狭い玄関で、手早に細くて高いヒールのサンダルを履いた母は、振り返らずに私に言った。

「いい？ 誰が来てもドアを開けちゃだめよ。お母さんは留守だからって言いなさい。わかったわね？」

「はい」

早く帰って来てねという言葉が無理やり飲み込む。

錆び付いたドアが閉まり、私は夕暮れの部屋にひとり取り残された。

幼い頃から繰り返された日常。

母が出て行った後、私は家の鍵を閉め、小さな折りたたみのテーブルに向かって算数の宿題を始めた。

窓の外からは、男女がお互いをからかう笑い声が聞こえている。

私は立ち上がり、人が行きかい始めた路地側のカーテンを閉めた。

私は夜のこの街が好きではない。

クラスの子の一部には大きな少女のように繁華街に遊びに出

る子もいたが、私はそうしたことはなかった。

暗闇に輝くネオンは、なぜか私を不安な気持ちにさせる。

母は私が遊び歩くことや、言葉遣いを乱暴にすることを好まないのも知っていた。

「私と同じになるんなら、ここから出て行きなさい。自分の最低な人生を繰り返し見せられるのはごめんよ」

こうして一人で計算問題を解いているのが好きだった。  
その時は何にも考えずにいられるから。

あたりがずいぶん暗くなってきたことに気付いたのは、それからしばらく経った頃だ。

台所に置いてある菓子パンを食べようと教科書を閉じた時、ドアをノックする音が聞こえた。

心臓が大きく鳴り、身体が強張る。

手が冷たくなっているのがわかった。

「愛美！」

ドアの外から男の声が聞こえる。

私は狭い部屋の隅に身体を屈めてうずくまり、両手で強く耳を塞いだ。

もっと早く明かりを消していればよかった。

眠っていたと言えたのに。

耳を塞いでいても聞こえるほど、ドアを叩く音が大きくなってくる。

隣の部屋の女の人が「うるさいから何とかしな！」と、壁に物を投げつけて怒鳴り声を上げた。

私はやっと立ち上がると、ドアの内側から母の恋人に言った。  
身体が震えている。

「母は仕事に行きました。だからまた明日来て下さい」

「酔っ払ってふらついてんだよ。水を一杯飲ませてくれたらすぐ帰るからさ」

「でも、お母さんが誰も入れちゃいけないって……」

「知らない奴をつてことだろ？ 俺とお前のお袋の仲なら、お前の親父みたいなもんじゃねえか。身内だぜ？ 身内」

言葉を返せずにいたら、男は急に声を荒立て、ドアを力任せに蹴り始めた。

「愛美！ 俺を邪険に扱ったってお前のお袋に言いつけるぞ！ いいんだな！」

これ以上ドアを開けることを拒んだら、何があつたか近所の人の口から母に知れてしまう。

私は震える手でドアを開けた。

「最初から素直に言うことを聞けよ」

母の若い恋人は、なだめたり怒鳴ったりするいつもの手段で部屋に上がり込んだ。

かすかに漂うアルコールの匂いで吐きそうになり、手で口を押さえる。

男は少し前からこうして母が留守の時に部屋に上がり込むようになった。

最初の頃は勉強する私の後ろから肩に触れたりする程度だったが、その行為は回を増すごとにエスカレートしていく。

この前は後ろから抱きつかれ、服の上から痛くなるほど胸を触られた。

たまたま気分が悪くなっていたよりも早く帰ってきた母がアパートのドアを開けた時、男の手は私のＴシャツとスカートの中を執拗に弄っていて、それを見つけて取り乱した母はヒステリックに泣いて私の頬を打ちつけた。

「こいつが誘ったんだ。ガキのくせに娼婦みたいな目で。末恐ろしい女だぜ」

母よりいくつも年若い恋人はそう言い、否定する私を嘘つきと母は罵った。

「その年で母親の男を寝取ろうとするなんて！ あんたは自分が綺麗だとも思ってるの？ あんたみたいな嘘つきは、その汚い心が全部顔に出てるのよ。いい？ あんたは誰よりも醜いってことを覚えておきなさい」

母が叫ぶ声が耳に木霊する。

母は付き合っている男達にいつも強く独占的な愛情を求めた。

相手の心を全て手にしないと不安に取りつかれ、眠れなくなってしまうのだ。

そして、相手に愛情がなくなったと知るや、その強い愛と同じ分だけ憎悪する。

夜一人で泣いている母の姿を何度も見た。

幼い私は、母のその震える細い背中が、ただ哀しくてたまらなかった。

「愛美。布団を敷けと言ってる。早くしろよ！」

立ちすくんだまま動けない私に強い口調で命令すると、男はデニムのポケットからライターを取り出して、イラついたように煙草に火をつけた。

体を屈めるようにライターを何度もカチカチといわせて。

黒いタンクトップから覗く胸に、蛇の絡まった銀の十字架が掛かっている。

私には、そのクロスが母の人生のように見えた。

私は男の目から逃れるように背を向け、押し入れから布団を出して色あせた畳の上に敷いた。

母の恋人が怒ってここから去ってしまったらという不安で頭が一杯だった。

すぐに男が私に抱きつき、身体をまさぐり始める。

男に服をはぎ取られているときも、薄い布団の上に押し倒された時も、私は声を上げなかった。



## 01 - 1 (後書き)

ラストまで、できるかぎり日々更新していくつもりです。よろしく  
お願いします。

顔をそらす私の顎を乱暴に掴み、男がまっすぐに目を見つめながら低く掠れた声で言った。

「瞼を閉じるな。最後まで俺を見てろ……。これからお前が俺にされることを、しっかりと記憶に刻みつけておけ」

まだ昼の暑さがけだるく残る部屋の中で、母の恋人は私を執拗に抱いた。

初めての痛みにさいなまれる時間がのろのろと過ぎていく。  
冷めない悪夢にいるのだと思うことすら許されなかった。

男が乱れる私の髪を掴み、この行為が現実であると知らしめる。

かなわぬ力で拘束されている間、私は一つ違いの優しい兄のことをぼんやりと考えていた。

最後に会ったのはいつのことだっただろう。

兄は今、どうしているのか。

私を思い出してくれることがあるだろうか。

兄と手を繋ぎ、二人で体を寄せ合って眠った小さな頃の記憶に心を預けた。

誰よりも私を愛してくれた兄。

兄と私は父親が違う。

兄の父は日本名を持つ混血の南米人で、母と知り合った時には有名なサッカークラブに所属する選手だった。

母は当時働いていたバーで来日していた兄の父と知り合い、後を追うようにかの地へ渡って兄を産んだ。

兄の父親と母は不思議な関係にある。

入れ替わり立ち代り男が出入りする中で、兄の父だけが母の人生に深く絡みついていた。

母もまた日本とフランスの混血で、早くに父を、そしてその後に母を亡くしていた。

貧しい環境に育だち、天涯孤独の身の上だったのは兄の父も同じだ。

同じ境遇の二人はお互いに共有しあえる特別な感情があったのかもしれない。

兄を産んだ一年後、母は日本から南米へ赴いていたジャーナリストとの間に子どもを身ごもり、日本に戻って私を産んだ。

母は肌色に父親の面影を残す小さな兄を施設に捨てたが、結局私の父とは一緒になることはなく、私の記憶に父親の姿はない。

母は兄の父親と時々縁りを戻してはしばらく一緒に暮らした。

傷害事件を起こして足に大きな怪我を負い、選手生命を失った兄の父が、仕事を探して日本に来ていたからだ。

移り気なマスコミから仕事をもらえたのは、ごく初期の頃だけだった。

もともと激しい気性で行動に問題があった兄の父は、成功していたときのプライドを捨てられず、荒れて暴力事件を起こしてはそのたびに追いつめられていった。

結局仕事にも日本にもとけ込めないまま都会の片隅で埋もれるように暮らし、自堕落な生活を送りながら母の稼ぎを当てにするようになる。

そして、二人が家庭のまねごとをする間だけ、兄は施設から呼び出され、家に引き取られるのだ。

兄の父親は大きくて怖い人だったという記憶しかない。

足を思つように動かせない苛立ちは、すべて母と小さな兄への暴力に変わる。

自分が置かれた状況への怒りが、母への猜疑心や嫉妬心になったのだ。

母の勤め先に押しかけ、客にすら暴力を振るう。

母だけに頼る生活は、そうしてますます苦しさを増した。

繰り返される暴力と二人の言い争い。

母は父との争いを、父親の血を濃く引いた兄を愛さないことで報復した。

それが、肉体への暴力以上に兄の心を傷つけた。

それでも兄は父と母を慕っていた。

機嫌のよい時は熱心にサッカーを教えしてくれる強く大きな父と、ふと母親らしい態度を見せる誰よりも美しい母。

気まぐれに愛と暴力を繰り返す事が子どもにとってどれほど残酷な仕打ちであることが。

いつそ暴力だけならいい。

兄には親を憎む逃げ道すら与えられなかったのだ。

誰にも見られないように布団の中で泣いていた兄の姿を思い出すと、今でも身を切られるように切なくなる。

兄を慰めてあげたかった。

けれど幼い私にできるのは、ただ背中を丸めて嗚咽している兄に寄り添って一緒に眠ることだけだった。

誰よりも心優しい兄を幸せにしてあげられたら。

まるで心を持たない人形を気まぐれにゴミ箱に投げ込むように、

実の親から何度も捨てられた兄。

いつか自分を愛してくれるのではと願う彼の気持ちは、その度無惨に打ち砕かれ、母は兄の存在を記憶のかなたに押しやった。

首に銀のクロスを掛けたこの独裁的な母の若い恋人は、私の中で兄の父と重なる。

「今日はこれでやめてやるよ。風呂場で身体を流して来い」

行為を終えると、母の恋人は私をまだ組み敷いたままそう言った。男の顎を伝った汗が私の目に落ち、その痛みに驚く。

男の汗は、私の目から涙のように頬に流れ落ちた。

男はようやく私を離し、そのまま身体をずらしてすぐに煙草に火をつけた。

「このシーツはあいつに見つからないように捨てておけ。いいな？」

「……はい」

白いシーツに残る鮮血の跡が何を意味するのかさえ、よくわかっていなかった。

身体を中心に焼け付くような痛みを感じながらやっと立ち上がり、歩き出そうとした途端、驚いて足を止めた。

身体の中から流れた何かがどろりと太ももを伝う。

男は布団にうつ伏せで腕をつき、震える私を肩越しに振り返って低く笑った。

「今度からはちゃんと気をつけてやるよ。それはお前に俺を刻み付けた証だ」

母の恋人の私への行為は、一晩では終わらなかった。

その夜からお腹の鈍い痛みがなかなか癒えず、私は母の恋人が来

る度にそう訴えたが、男は行為を何回も繰り返せば治っていくのだと言って一層執拗に求めてくる。

最初の言葉通り、行為中に私が目を閉じることを、男は決して許さなかった。

男が私の目を見つめ、低い声で言う。

「お前の目に、俺が映っている。汚されて憎いだろう？　俺を憎め、愛美……」

まるで、何か見えない影に追われているかのように、男は私を抱きたがった。

母が家から出るの見計らうと、夜も更けないうちから頻繁にドアを叩く。

母の留守を待ちきれず、学校の帰りに待ち伏せられて知らない場所に連れ込まれることもあった。

母と三人で家にいる時には息が詰まりそんな緊張で食事が一口も喉を通らない。

母が席を外したほんの数分の間すら、男は私に手を伸ばすのだった。

「あいつに言うんじゃないぞ。バレたらあいつは泣くし、俺は金が入らなくなる。お前のせいで皆を不幸にするのは嫌だろ？」

母に訴える事など、考えたこともなかった。

それどころか、知らなければいいと必死で願う。

母が私と恋人の関係を知ってしまえば、その時私は捨てられてしまうのがわかっていたからだ。

今の恋人ができてから、母は私を施設に入れることを頻繁に口に出すようになっていた。

始めて母が恋人をアパートに連れて来た時、男はいつまでも私を見るのをやめず、母とそのことで口論しているのを聞いたことがある。

「あの子に絶対に手を出さないで」

隣の部屋から母が恋人にそう言っているのが聞こえた。

「焼いてるのか。俺はガキなんか興味ねえよ。お前にそっくりでつい見とれただけさ」

「もし手を付けたら許さない」

「俺を？ それともお前の娘をか？」

男が低く笑ってそう言い、二人の会話が途切れていく。

「……俺と別れられるのか」

「施設に入れようと思ってるのよ……」

母が途切れ途切れに男に言う声が聞こえる。

「愛美はお前の娘だろ……。ここにおいて置けよ。な？ 俺はもうあいつを自分の娘みたいに思ってたんだよ……。俺が欲しい女はお前

ただだ。わかるだろ……」

私は布団をかぶり、隣の部屋から漏れる声から耳を塞いだ。幼い頃から繰り返し聞かされてきたその声は、どれだけたっても慣れることなどできなかった。

男の行動は日々大胆になっていき、私への行為は日常的になった。私は母に秘密を知られたらと怯え、学校では同じ年の少女達と無邪気に話すことができなくなっていた。

私は皆と違ってしまったのだ。

私が汚れていることを誰もが見透かしている気がして、顔を上げて目を合わせるのが怖い。

小さなクスクス笑いや内緒話が聞こえると、私の秘密を噂されているような気がして身体が凍りつく。

どこにいても不安で落ち着かず、自分の居場所がない気がした。自分に苦しみを与える男から逃げることにすら思いつかなかった。ただ自分を消し去ってしまいたいという想いだけが日々募っていく。

男はある日、いつものように私を抱いた後、自分の首にかけた銀色のクロスを取り、裸のままの私の首につけて言った。

「外すなよ。これはお前の烙印だ。どこにいてもこのクロスから逃れられない。お前はこの先もずっと俺を思い出し続けるんだ。たとえ俺が死んでもな……」

四カ月後、私は学校で高熱を出して倒れ、病院に運ばれた。

私は小さな頃から傷や風邪の治りが遅く、微熱が続いてはよく学校を休んだ。

免疫機能に少し問題があるとわかったのはその時だ。



身体のだこの傷から発生している熱なのかを医者が母に説明した時、母はベッドに横たわる私を冷ややかに燃える目で見つめていた。

「そのクロスはお前が私を裏切った証よ」

母はそう言い捨て、私から目を背けた。

退院後、母が施設の近くまで私を連れて行き、「ここからは一人で歩いていくのよ。母がもうずっと家に戻りませんって出てきた大人に言えばそれですむから」と言った時にも、私はただその言葉に頷いただけだった。

白いワンピースを纏った母の後姿の記憶は、実感のない幻のようだ。

これはただの夢で、いつか目を覚ますことができるのだと、そう信じていたかったのかも知れない。

施設の事務所の中で大人たちが眉をひそめて私の処遇を話し合っている間、廊下に出されて小さな窓から見える殺風景な外の景色を眺めていたら、背の高い浅黒い肌をした少年が歩いてきて、戸惑ったように私を見つめた。

「愛美……？」

記憶にあるよりずっと低い、優しいハスキーボイス。

「どうしてここに」

数年の時を経て、兄が私を見間違える事はなかった。

兄の聡明な黒い瞳を見た途端、安堵のあまり涙がどつと溢れ、私は声を上げて泣き出した。

「陸人……陸人……」

兄の名を繰り返し呼びながら、ほっそりした身体にしがみ付いて泣き続けた。

暗く冷たい施設の廊下にいることすら忘れるほど、陸人が私の身体に回してくれた手は暖かった。

それから数週間がたった時、男が刺されて死んだことを、誰かが見ていたテレビのニュースで知った。

大量の麻薬が関係した事件だということだった。

私の首にかかるクロスを外してくれる男はもうこの世にいない。

そして、死すらクロスから自分を解き放ってはくれないことを、

その時私ははつきりと知ったのだ。

施設は日向園といい、私や陸人と似たような境遇の子どもたちが集まっている、街外れの古く殺風景なコンクリートの建物だった。未就学児童から高校生までが全部で二十五人収容されている小さな施設だ。

錆びた鉄の門を通って中央玄関に入ると中央に管制室と食堂があり、その両側が女子寮と男子寮に分かれていた。

男子が十六人に対し女子が九人だったので、女子寮の方には少し余裕があり、一部屋が一人か二人に割り当てられている。

管制室からはそれぞれの棟へ細い廊下で繋がっており、監視が行き届いてさえいれば、男女は玄関での出入りと食事以外で顔を会わせることはないはずだった。

園長、副園長のほかに指導者が名目上は四人いるが、最年長の少年達の素行に恐れをなした職員の退職が相次いでいて、施設は常に手不足状態にある。

施設内は、世間での評判以上に荒れていた。

食堂には当たり前のように灰皿が置かれ、窓ガラスは常にどこかが割られている。

ほとんど面会者が訪れることのない施設で、子ども達の心は荒れ、行き場のない怒りに満ちていた。

年長の少年は不登校が多く、彼らの間には常に暴力行為を含む諍いが起こっていて、それを制止する力を持つものがいなかった。

他の施設がどのようなものなのかは知らない。

子ども達が心から安心できる環境の施設もあるのだろう。

けれど、私が知っているのはこの日向園だけで、ここではそれが日常だった。

おそらく、私が置かれていたのは誰が見ても劣悪な環境だったのだと思う。

それは、自分がどこに住んでいるかを話した時の回りの反応でもわかる。

そんな状態であつても、私は施設での暮らしを辛いと思うことはなかった。

毎日決まった時間に食事が摂れ、ベッドで眠れる。

もともと豊かな生活を知らなかったこともあるが、何日も一人になつたり、男がドアを叩く音に怯えずにいられるのが幸せですらあった。

そして何より、そこには陸人がいた。

日向園で暮らすようになってから四ヶ月が過ぎ、私はもうすぐ中学一年、陸人は二年になる春を迎えていた。

施設の狭い庭には細い桜の木がほんのりと色づいた花を咲かせている。

まだ少し風は冷たいが、日差しの暖かな日だった。

陸人がブロック塀に寄りかかるように立っている私の顔を覗き込むようにして聞いた。

「誰かお前に手を出してくる奴はいないよな？」

唇の端にはまた新しい傷ができている。

常に私の身边に気を配っている彼の身体から、この四ヶ月間生傷

が耐えたことはなかった。

力のある者がここでの権力を持つ。

私が施設に入ってしばらくしてから、下校の途中で施設の少年に待ち伏せされ、絡まれたことがあった。

陸人が初めて身体に争いの傷をつけて来たのは、その夜のことで。数日経つと、食事の時、他の少年が陸人の回りの席を遠慮がちに空けるようになった。

陸人より年長の少年達でさえ。

以来私は手出しをされるどころか、少年たちと目が合うことすら稀になった。

陸人は年長の少年に負けない程の体格と敏捷さを持っていたが、どうやって私を守っているのかは決して口に出さなかった。

私が来てから陸人は別人のように変わってしまったと、同い年の少女が口に出したことがある。

だが、優しく穏やかな兄の姿しか見たことがない私は、他の人が彼をそれほど恐れる理由を、どうしても納得することができなかった。

「大丈夫。全然怖いことはないわ」

他の少年たちに、部屋の鍵をかけずにいることを強要されている少女がいることも、陸人の庇護の下に置かれた私は知らないでいた。

「もし誰かに少しでも何かされたら隠さずに言うんだよ。いいね？」

「うん……」

陸人は厳しい表情を緩め、ようやくいつもの優しい笑顔を見せた。

「ごめん。怖がらせたね。そんな顔するなよ。愛美は可愛いんだから、もう少し笑ったほうがいい」

私を喜ばせようと、陸人がいつもの様にサッカーボールを手に持っている。

陸人がサッカーボールを使って遊んでいるのを見ているのが好きだった。

まるでマジックのようにボールを操り、いつも驚くような曲芸を見せてくれる。

「私、可愛くなんかない」

私は母の言葉を思い出し、小さな声でそう言った。

誰にも自分の顔を見られなくなかった。

私は嘘つきだ。

病院で母に、誰に抱かれていたのかと問い詰められた時も、最後まで母の知らない男だと答えた。

そうして私はいくつもの嘘を重ねる。

「違う。愛美は綺麗だよ。綺麗過ぎるんだ。それを知っていなきゃならない」

真剣な声で陸人は言った。

「愛美にはまだわからないことだけど、自分の外見が最低の奴らを卑劣な行動に駆り立たせることがあるって覚えておくんだ。ここにいるといつもその危険に晒されるし、これからはもっとそうになってく。愛美をあいっらの手で汚したくない」

私はその言葉に曖昧に頷いた。

陸人は私がもうどれほど汚れているかを知らない。

母の恋人に行為を繰り返されていくに連れ、最初に感じていた痛みは徐々になくなっていくた。

初めての時、男が言った通りに。

身体を支配する感覚は違うものになりかけていたのだ。

男が生きていてあの関係が続いていたら、私はどうなってしまったのだろう。

その記憶が今も私を苦しめる。

お前はもつと自分の身体が変わっていくのを知るんだ。そのうち心も身体に支配される。あいつの娘だから、その血が流れてるのさ。

男はそう言って皮肉に笑った。

私はどんどん穢れていくのだ。

こうしている間にも、何か恐ろしいものが身体を蝕んでいく気がする。

恐怖で身体が強張った。

ふと気がつくと陸人が私の顔を見つめていた。

「大丈夫だよ、愛美。俺が絶対に守ってやる」

力づけるように、陸人はそう言った。

それからいつものように指先で器用にボールをくるくる回すと、それをひょいと後ろに投げて踵で蹴り上げる。

「さて、ボールはどこでしょう」

陸人は悪戯っぽい表情で私を見ると両手を前に突き出した。  
ボールは影も形もない。

「すごい。どこ？」

驚いて見ている私にくるつと背を向けると、陸人は背中のＴシャツの中にぽっこり膨らんで収まっているボールを見せた。  
ボールで膨らんだＴシャツにはマジックでおかしな顔が描いてあって、陸人が動くとも顔も笑っているみたいに見える。

「やだ。おかしい」

思わず吹き出して笑ったら、そのまま腹話術みたいにボールがしゃべった。

「誕生日おめでとう。愛美」



それから陸人はこつちを振り返り、ポケットから熊みたいふわふわした白い犬の縫いぐるみを出して私に手渡した。

首に赤いリボンを結んでいる。

「ほら。欲しかったんだろ？」

「そうなの！ 可愛い……。けどこれ、ドーナツショップの景品でしょ？ どうやって」

「盗んだんじゃないぜ。学校の帰りに毎日店の前で落ちてるカードを探したんだよ。景品引き換えの期間が終わるまでに点数が集まるかひやひやした」

「そうだったの。ありがとう……」

涙が込み上げて、目の前の陸人が霞んで見える。

母と暮らしていた頃は、泣く事をいつも我慢していた。

私が泣くと母は途端に機嫌が悪くなり、ただでさえ疲れているのにこれ以上辛気臭い顔を見せられるのはうんざりだと声を張り上げる。

私は母の機嫌を損ねないように、迷惑をかけないように、感情を押し殺し、息をひそめて日々を過ごしていたのだ。

「今日の愛美の涙用のハンカチ。洗濯済み」

陸人はそう言って、いつものように私にハンカチを差し出した。

「アイロンまでかけてある」

「誕生日だから特別仕様だよ。家庭科の時間にしっかりかけといたんだ」

私が泣き笑いすると、陸人は笑ってそう言った。

陸人の前では泣くことに怯えずにすむから、私はいつの間にかすっかり泣き虫になってしまったようだ。

暖かく、優しい兄。

施設内での恐ろしい噂など、どうして信じられるだろう。

私は兄の聡明な黒い瞳を見つめていた。

春の風に、陸人の黒髪が揺れている。

「なんだよ。寝癖でもついてる？」

陸人にそう言われて、自分が知らずに兄の髪に手を伸ばして触れていたことに気がついた。

「桜の花びら」

私は動揺した心を押し隠すように、陸人の髪から桜の花びらを取って手のひらに乗せるとそれを見せた。

こうして一緒にいると、いつも不思議な感覚で胸が締め付けられる。

それがいったい何なのか、その時の私にはまだわからずにいた。

「綺麗ね」

「愛美に似合うよ。愛美ほど綺麗な子は、どこにもいない」

陸人は私を真っ直ぐに見つめてそう言った。

私の手から花びらをそっと取ると、それを私の頭に置いて微笑む。

陸人といると、自分の中にある汚れたものが全て流れ出して行くように思えるのだ。

この荒れた施設の中で一番の力を持つ少年は、私の前では小さな時から変わらぬ優しい兄だ。

もし幸せな家庭があつたなら、陸人はきっと穏やかで幸せな一生を送れたはずなのに。

陸人は少し高めのコンクリートの塀に簡単に登ると、私の手を引き上げて一緒に塀の上に乗せてくれた。

川原のずっと向こうの高台にある高校が、緑の木々の間から煉瓦の頭を覗かせているのが見える。

「あそこに見える高校のサッカー部は昔すごく強かったんだ。このボールはその部員の人達が寄せ書きしてくれたものなんだよ。もう何年も前だけどね」

陸人は私にそう言って懐かしそうに遠くを見つめた。

「高校はあそこに行くの？」

私が聞くと陸人は横に首を振った。

「たぶん華南だと思う。華南の中等部からサッカー部に入らないかって誘われてるから、そこに行こうと思うんだ……。この辺では最高レベルのサッカー部だからね」

「華南ってどこにあるの？」

「街の中心だよ」

「ずいぶん遠いね。通うの大変そう」

陸人は塀に腰掛け、私を横に座らせるとしばらく黙って考え込み、ようやく口を開いた。

「愛美。俺、四月から華南の寮に入るよ。サッカー部に入るにはそれが条件だって言われた」

「ここを出るってこと……？」

ショックですぐに言葉を返せなかった。

陸人と離れることなど考えられない。

「愛美。落ち着いて聞いて」

陸人は私の肩を抱いて、一言一言言い聞かせるように落ち着いた声でゆっくり話し出した。

「こんな所を早く出なくちゃいけない。愛美をここにいさせたくない。俺らみたいな育ちの奴がその先どんな暮らしをするようになるか、今までずっと見てきた。

サッカーで少しでも早く稼ぐようになりたいんだ。サッカーは実力が全ての世界だから、プロのスカウトも常に注目するような有名校で名を上げる必要があるんだよ」

確かに陸人が持っているサッカーの才能は稀有なものだ。

地元の中学へ通っている今ですら、その突出した才能が話題を集めていた。

何度か応援に行った試合でも、みんなが息を飲んで陸人を見つめていた。

誰よりも足が速く、楽々とボールを操り、大胆で正確なシュートを決める。

陸人は、間違いなく特別なものを持って生まれている。

それだけが、彼の父が陸人に与えた唯一の贈り物だった。

「陸人と離れるなんていや。このままでいいの。陸人と一緒にいれるならここがいい」

「何言ってるんだ。ここがどんな所だかわかってるだろ？ 俺だけならいい。でも、愛美はもつと幸せな家庭に暮らすべきなんだ。親がそれを与えてくれないなら俺がきつとここから救い出す」

「怖い。お願い。どこにも行かないで」

私は陸人にしがみ付いたまま言った。

身体の震えが止まらない。

陸人がこの小さな世界から飛び出し、私のもとに永遠に戻ってきてくれない気がした。

陸人を失ってしまったら、私にはもう何も残らない。

「心配しないでいい。玖出に話をつけてる。あいつが俺が出た後この施設を取り仕切る。誰にも手出しはさせない」

ただ涙が流れて言葉を上手くつなげなかった。

陸人は気付いていないが、サッカー選手だった父親を今でも慕っ

てその影を追い続けているのがわかっていた。  
陸人を止めてはいけないのだ。

「うん……」

私は頷いた。

「私、待つてる。陸人が迎えに来てくれるのを待つてるね……」

それからしばらくして陸人は華南に編入し、何年も暮らした日向園を後にした。

陸人が施設を出た後、玖出という陸人より一つ年上の少年が一番力を持つようになった。

この施設に入ってもうすぐ二年になろうとする彼は、まるで触れれば怪我をしてしまう、鋭利な刃物の様だ。

誰もが彼を恐れ、むやみに近寄るものはいなかったが、私は彼が嫌いではなかった。

玖出のほっそりした背の高い体つきは少し陸人に似ている。

陸人とは同じ部に所属していて、彼が陸人を認めていたのはその際立ったサッカーの才能によるところが大きかった。

不登校の少年が多い中、彼らが学校へ通い続けたのはそのためだ。彼らにとってサッカーは聖域で、それだけが救いのない彼らの人生の光だったのだ。

彼は陸人との約束通り、他の少年が私に手を出すことを決して許さなかった。

その当時施設の中で、私は一番安全な環境におかれていたと思う。

「今の中学には卒業までいるの？」

私は誰もいない施設の食堂で玖出の隣に座り、彼の横顔を見て言った。

金色に透けた長めの髪といくつかつけた銀のピアスが、驚くほど端正な顔によく似合っている。

玖出の髪や肌はもともと色素が薄い。

瞳の色も黒ではなく、透き通るグレーのガラスのようだ。

だが、彼が自分の美しい容姿を好まず、あえて髪を冷めた色に脱色しているのを知っていた。

自分の容姿を憎んでいるように感じることにすらある。

彼は私と同じように他国の血が混じっていて、そのせいか私達の顔立ちには不思議な程よく似ていた。

血の繋がった兄の陸人とはまったく似ていないと言われるのに、玖出という兄妹が双子に間違えられる。

彼の左腕には大きな十字架の刺青があった。

家を飛び出す前に養父につけられたのだと言っていた。

私達は二人とも、逃れることのできないクロスを持っている。

「もう少しで卒業だから、それまで今の学校のサッカー部をやめたくない。昨日華南のスカウトから誘われたよ。このまま大きな問題を起こさなければ、高校からは華南でやれそうだ」

誰ともほとんど話をしない玖出は、私にだけこうして自分のことを話す。

私も、彼と二人でいる時だけ、ここが荒れた施設の中だということをおぼえていた。

陸人がそうだったように、玖出もまた私の前では穏やかな表情しか見せたことがない。

「サッカーって楽しい？」

私が聞くと玖出は少し笑った。



「どうかな。生きてるって感じるよ。お前の兄貴もそうじゃないか？」

いつもは冷めた彼の顔に優しい笑顔が浮かぶ。

大人びて見える少年が、年相応に見える瞬間だ。

私は彼の笑顔を見ると心が温まり、陸人がいない寂しさを少しだけ紛らす事ができた。

「華南だと陸人と同じね。ずいぶん強いサッカー部だって聞いている」

「まあね。あそこに入ればプロへの道は近い。お前の兄貴は凄いや。あれ程の才能を持った奴を見た事がない。高校で一緒にやれたらいいと思うけど、あいつはもっと強いところに引き抜かれそうだ」

玖出はそう言いながら私を引き寄せ、ためらいがちにそっとキスをした。

そうされることは嫌ではなかった。

玖出のキスは母の恋人と明らかに違うものがあつたからだ。

陸人がいなくなつてから一年近く立っていたが、彼はいつもこうして遠慮がちに唇を重ねるだけで、それ以上のことを無理に強要してくることはない。

それは私を安心させていたが、玖出の心の奥に秘められたものが気になつてもいた。

彼の態度には、陸人との約束以上に何か深い理由がある気がしてならなかったのだ。

玖出はいつも私に対して自分の性的な欲望を見せないように距離を置こうとする。

まるでそうすることを恐れているように。

玖出のキスにそのまま身体を預けていたら、突然ドアを叩きつける大きな音がして、私達は驚いて顔を上げた。

副園長の大沼が燃えるような目で私達を睨み付けていた。彼だけがこの施設の中で、いつも必要以上の体罰を繰り返す。

男の引きつった表情には見覚えがあった。

まるであの時の母のような、冷たく燃える眼差し。

「ガキの癖に何やってるんだ！ お前ら！」

食堂につかつかと入ってくると、大沼は玖出を思い切り平手で殴りつけた。

「やめてください！」

必死で止めに入ったが、いきり立った大沼は玖出のシャツの胸倉をつかむと、さらに何度も情け容赦なく殴りつけた。

玖出の綺麗な形の唇から赤い血が一筋流れ落ち、彼の白いシャツに真紅の滲みをつけた。

どんな時にも恐れを知らず、不適な笑みさえ浮かべている少年が、何か凶器を持つわけでもないこの中年の男の前で身動きがとれずにいることに驚いた。

「目を逸らすな。俺を見る」

大沼はそう言いながら玖出の髪を引き掴み、自分に無理やり目を向けさせた。

玖出を見つめながら乾いた唇を舌で舐めている。  
まるで大きな禍々しい蛇のようだ。

大沼が唯一この施設で少年達ににらみをきかせられるのは、一番力のある玖出が彼に逆らわないからだ。

ようやく大沼を見返した玖出の目の中に恐怖が浮かんでいるのを見た瞬間、私は彼が心に抱えている大きな傷が何なのかを知った。

「やめて！」

大沼にしがみ付いたが、力の強い大きな男にかなう筈もなく、そのまま振り払われ、壁に打ち付けられた。

「愛美！」

「蔵木、お前はすぐに部屋に入れ。俺がいいと言つまで出てくるな」

彼が恐れている事が何であるのかすぐにわかった。  
私達は、同じだった。

胸が切り裂かれるように痛み、涙が溢れる。

「玖出さん……」

彼は血を吐くように、唇から恐怖を搾り出す。

「逃げようと思ってても身体が動かない。何もかもあいつの言いなりだ。それどころか、俺は今日、自分からあいつに続けてくれと懇願したんだ……」

玖出の目から涙が流れ、彼の端正な頬を濡らす。

私達に何ができるというのだろう。

胸の十字架が焼け付くように痛んだ。

玖出は中学の卒業式の日、傷害事件で補導された。

大沼の刺し傷は深く、何ヶ所にも渡っていて、命を取り留めたのは奇跡だった。

玖出に対して丸二年の間行われていた性的虐待が明るみになり、施設に移る前に養父が彼に繰り返し返していた同じ行為も警察に言及された。

大沼は玖出を支配するために薬まで使っていたという。

玖出は更正施設に送られて心の傷を癒すはずだった。

そこで何があったのかはわからない。

彼はそこを出た後、二度と私の前に姿を現さなかった。



玖出の事件の後、血なまぐさい事件に怯えた園長や職員は次々とやめてしまい、なかなか次の管理者が見つからない施設は以前にもまして殺伐としていた。

玖出というボスがいなくなった為に、少年達の暴力による権力争いは目を覆いたくなるばかりに酷くなり、そのためますます次の職員が決まらない。

高名なカウンセラーが何回か子ども達をカウンセリングしたが、自分の本音を話した子どもはほとんどいなかったと思う。

誰がどうしたところで結局日常は変わらない。

ならば、下手にかまわれて今よりもっと酷くなることを避けたいと思うのだろう。

ようやく決まった次の園長は児童心理学専門の平井という初老の男で、その世界では名前が通っている人物だったが、施設の子どもの達の生活よりも、定期的に催される会議や講演の方に強く興味があるようだった。

施設にいるときは園長室に籠りきりで、ほとんどの業務は副園長の寺田という中年の女が請け負っていた。

彼女もまた、児童心理学の本を書いているのだというが、施設内で厳しく子どもを叱責する姿には、愛情や理解はまったく感じられなかった。

他の無気力な大人たちは誰一人子どもに向き合おうとはせず、子ども達の酷い素行は黙認された。

こんな仕事で命を捨てることはないと言う職員の話を目にしたが、それも仕方がないと思う。

寺田ですら、年長の少年達には怯えた表情を見せる。

大人や世間に何かを期待するという事を、皆とつくに諦めていた。

施設の温度調節は以前にましておざなりで、薬箱には常備薬が切れている事が多くなり、私はちょっとした風邪や怪我が直りきらずに何日も高熱を出しては入退院を繰り返すようになっていた。

「あんな場所から早く愛美を出したい。俺が高校を辞めて働いて、なんとか基盤を作るようにすれば……」

玖出が施設にいなかった後、陸人はすぐにそう言った。

陸人や玖出が目を光らせていることができない以上、外部から、たとえ施設で一番の力を持つ少年を抑えたところで結果は目に見えていた。

ただでさえ、気での事件以来悪い意味で世間の注目を浴びているから、陸人が施設内の少年達と暴力事件を起こしたなどと表ざたになつたら大変なことになる。

陸人は華南中等部でサッカー選手として華々しく活躍し、さらに強い慶京高校へと引き抜かれていた。

この高校での実績は、そのまま彼の輝かしい未来へと繋がるはずだ。

もし事件でも起こせば、それは高校退学のみならず、サッカー選手としての未来を断たれるのと同じ意味を持っている。

たとえ独立しても未成年である陸人が私をすぐに施設から引き取ることとは不可能だから、私が義務教育を終えて自分で働けるようになるまでは施設で暮らすことを避ける道はなかった。

「大丈夫よ。陸人が思ってるほど弱くないもの。それに、あと半年の辛抱だから。そしたらどこか住み込みの仕事を探せばいいわ」

私は陸人を心配させないようにそう言った。

本当は、自分の将来のことなど考えたことはなかった。

自分に興味を持つことがまったくできなかったのだ。

今の生活を変えたいとか、もっと健康な身体が欲しいとか考えもしなかったし、高熱を出して意識を失い目が覚めたときも、ああ、まだ生きているんだなとぼんやり思うだけだった。

無彩色の毎日が同じように始まり、終わらない夢のように繰り返される。

「陸人は絶対に高校をやめちゃだめよ。せつかく名前が知られてきてるんだもの。このままサッカー選手を目指して欲しいの。お願い」

玖出が施設を去った後、私はいつもその時一番力のあるものに抱かれていた。

それしかあの施設で自分を守る方法を知らなかったし、力の強い男に求められて逆らうことが怖かった。

それは少年であったり、カウンセラーや学校の教師であったりした。

これはお前の烙印だと私にクロスをかけた母の恋人の体温を、私はつきり思い出す。

あの日、私の裸足のつま先を染めた濃い朱の色は、そうしていつしか身体中を染めていくのだ。

施設に入ってから三度目の秋を迎えていた。

そしてその頃、私は宏章に出会ったのだ。





「愛美、そろそろ回診の時間だぞ。あと十分位したら病室に行くから戻っていなさい。あまり外にいちやだめだぞ」

晴れ渡る九月の秋空の下、病院の中庭でピンク色の雲のように咲いた可憐なコスモスを見ていたら、白衣を着た若い医師が廊下の窓からいつもの快活な声で私に声をかけてきた。

ひと月ほど前に風邪を引いて高熱を出し、肺炎を起こして入院していた私は、そのままずっと退院できずにいたのだ。

「はい。結城先生。ごめんなさい。お花がすごく綺麗だったから」

そう答え、沢山のコスモスの花の向こうにいる医師を見ると、彼は人懐っこい笑顔を浮かべ、私だけに聞こえるように少し声をひそめた。

「後で病室に山ほど持って行ってあげるよ。うるさい看護婦の目を盗んでね」

後ろについたベテランの看護師さんがちらつと医師を見上げて咳払いしている。

三十代の結城医師は、この病院の老院長の孫だった。

院長の一人娘がお嫁に行つて、代わりに彼がこの歴史のある大きな総合病院を継ぐのだと、他の患者が噂しているのを聞いた。

陸人が華南にいた時、唯一の友人だった少年の兄だということもあつてか、医師は自分の妹のように私に親しく接してくれていた。

手を振って歩き去った医師を見送り、ふと渡り廊下を見ると、中庭に面した大きなガラス戸の向こうに、一人の背の高い黒髪の少年が病棟へ向かって廊下をうつむき加減に歩いているのが目に入った。長めの前髪と日に焼けて整った横顔を、どこかで見覚えがある気がする。

デニムにラフな白シャツを着、肩に大きな黒いスポーツバッグを提げていた。

右手で綺麗な花束をわし掴みしているのだが、持ち手の部分は力が入ってしまったせいか、すでに包装紙が切れそうだ。

大人びてはいるが、おそらく私服の高校生だろう。

バッグについた大きな校章は華南のものだ。

鮮やかなブルーで華南学院サッカー部と書かれている。

それを見て、陸人が華南にいた頃、一緒に部にいた少年だと思い出した。

キレのある動きで目立つ、能力の高い選手だ。

彼がボールを受けるたび、見学の少女達が歓声を上げていた。

少年は思いつめたような顔で足を進めては立ち止まり、元来た方向に引き返してはしばらくするとまた振り返る。

不思議に思っただけでいると、病棟の方を見ていた彼が急に慌てて廊下の隅に花束を置き、急ぎ足でその場を去って行くのが見えた。

彼が姿を消すのと入れ違いに、病院のガウンを着た中年の美しい女性がぼんやりした表情で歩いて来て、廊下においてある花束にゆっくりと目を留めた。

花束を拾い上げ、あどけない少女のように嬉しそうな笑顔を浮かべると、花の香りを嗅ぐように繊細に整った顔を花束にそっとうずめる。

通りかかった看護婦が女の人を見つけ、少し慌てたように肩を抱くと、小さな子どもに言い聞かせるような表情で話しかけた。

女性は看護婦の存在にも気がつかないようにずっと花を見たまま笑顔を浮かべ、そのまま病棟のほうへ手を引かれて行った。

私は急ぎ足で渡り廊下への入り口をくぐると、歩き去った少年の姿を追っていた。

廊下の角を曲がると、広い待合室のホールに溢れかえった患者たちの向こうに、ポケットに手を突っ込み、足早に歩く少年の後姿が見える。

なぜ彼の後を追ってしまったのかはわからない。

私は今までそんな行動を一度も取ったことがなかった。

少年は大きなガラスのドアをくぐると足を止め、ふとこちらを振り返った。

私達が見詰め合っていたのはほんの一瞬だったと思う。

すぐに目を逸らし、病院を後にした彼の黒髪を、秋の風がさらりと揺らした。

” K I R I S H I M A      H I R O A K I ”

花束を置いたその少年のバッグには、そう名前が押してあった。

「昨日またプロのスカウトに声をかけられた。このまま行けば卒業を待たずにプロ入りできるかもしれない。ユースの話はあるけど、できるだけ条件のいい所を選びたいんだ。愛美から遠くなりすぎるのも避けたいしね」

その夜、陸人は病室に入ってくると他の患者に迷惑をかけないように私のベッドの回りのカーテンを引き、枕もとの小さな明かりをつけるそう言った。

ベッドの横に椅子を引いて腰掛け、腕について起き上がった私を心配そうに見る。

「起きるなよ、愛美。遅くなってごめん。練習が遅くなった。慶京からここまでは遠いな。電車でちょうど二時間かかる」

「遠いところをありがとう。大丈夫よ。もう熱も下がったし。せつかく陸人が来てくれたんだもの、少しくらい」

「抗議は却下。もう消灯だから横になってなきゃだめだよ。子どもは寝る時間だ」

「一つしか変わらないのに」

四月生まれの陸人と三月生まれの私は、学年では一つだが二歳近く年が離れている。

私が文句を言うと陸人はわざと真面目な顔を作った。

「一つじゃないよ。十九センチも違う。俺と同じくらい大きくなったら大人だつて認めてやる」

「そんなに大きくなれるわけじゃないじゃない」

私が吹き出すと陸人も笑った。

まるで私を包み込んでくれているような、優しくゆったりとした陸人の笑い声の響きが好きだった。

陸人に触れられると、私は始めて自分の身体にも体温があるのだと感ずる。

「この間測ったら一八一センチあった。まだまだ伸びるよ。愛美なんか一抱えだ」

陸人は私の両肩を捕まえてそのままベッドに軽く押し倒し、間近から覗き込むと額に手を当てた。

「ほら。まだ微熱がある」

陸人のハスキーな囁き声が耳元で聞こえた途端、全身がカッと熱くなる。

私は陸人から眼をそらし、浅黒い長い指から逃げるように枕に顔をつけた。

陸人に対する特別な気持が何なのかを、この時私はすでにはつきりと知っていた。

「熱なんかない……」

声が震える。

兄が私の額に触れることなど当たり前だ。

それでも身体には甘美な熱がこもり、心臓がとくとくと早鐘のよ  
うに鳴っている。

私は息をひそめ、目を閉じた。

陸人は会うたびに大人っぽさを増し、今では昔のほっそりとした  
少年時代の面影を探すのが難しいほどだ。

高校一年の陸人は日本でも有数のサッカーの名門校、慶京の選手  
として華々しい活躍をしていた。

最近の大きな大会でも最優秀選手になり、天才児と大騒ぎされて  
新聞や週刊誌にまで名前が載っている。

けれど、その成功がどれ程の努力を伴うものかを知る人は少ない  
だろう。

華南のサッカー部での二年間、陸人はほとんど学校の話は口にせ  
ず、私が華南を訪ねることも許さなかった。

南米の激戦地で代表まで勤めたことがある父親の血を引く陸人の  
実力は、回りの少年に比べ、あまりにも際立ちすぎていた。

眩いばかりの才能と恵まれた身体。

それ以上に特筆すべきは惜しみなく努力する彼の前向きな姿勢だ  
った。

一人遅くまで練習を繰り返すのは虚栄や自己満足のためではない  
ことを他の部員が知るはずもなく、嫉妬が彼を孤独に追いやった。

華南は名のある家柄の子ども達が通う事で有名な学校だったから、  
特待生でサッカーを続ける施設出の陸人がどんな想いをしていたか  
は想像に余りある。

それでも陸人は自分の辛さを口に出すことは決してなかった。

内緒で華南のコートを何度も訪れなければ、私は兄がそんな状況  
にあることを知らないまままで終わっただろう。

陸人は私を幸せにしたいといつも言う。  
でも、本当に幸せにならなくてはいけないのは彼のほうなのだ。  
私は陸人にそう思われる資格などない。

「いつも愛美の事を考えてるよ。もう少しの辛抱だ。お前の為に必ずサッカーで名を上げる。いつか必ず一緒に暮らそう」

そう言うて、陸人は私の手を取り、握り締めた。

その夜はいつまでも眠る事ができなかった。

私はベッドから起き上がると病院の静かな廊下を歩き、手洗い場で水道の蛇口をひねった。

流れ落ちる水が指先を濡らしていく。

冷たい水が指先から感覚を奪っていくまで、私は手を浸し続けた。  
私の中の罪深いものを洗い流す事ができたら。

病室を後にするときの陸人の後姿を思い出していた。  
あのしなやかな背中にそっと身体を寄せ、滑らかな肌に口付けたらどんな気持ちだろう。

胸を締め付ける強い想いに耐え切れず、顔を伏せた。

私は実の兄を愛していた。

あの腕で抱かれたいのだ。

けれど、私は陸人を妹の顔で送り出す。

鏡に映る自分の顔を見ることができなかった。

そこにはきつと、母が言った通りの醜い顔が映っているに違いない。



私は嘘つきなのだから。

暗い病棟にともる蛍光灯の明かりの下で、私の涙がいくつもいくつも頬を伝い落ち、指を濡らす水の流れに押し流されていった。

私の微熱はなかなか引かず、結城先生は少し難しい顔をして聴診しながら「胸のレントゲンを取ってみよう」と言った。

「このままカルテを持ってレントゲン室へ行つて。写真を撮り終えたらそのままベッドに戻っていいよ。病室を出るときは何か暖かいものを羽織っていくこと。気分が悪くなったら誰でもいいから看護師を捕まえてそう言いなさい」

「はい」

私は頷くとベッドから起き上がり、はだけたガウンを直して医師に言った。

「先生、コスモスありがとうございます。すごく綺麗」

私のベッドの横には、満開のコスモスの大きな花束が花瓶に挿してある。

医師はにっこり笑って私に小声で囁いた。

「俺が花泥棒だなんてばらしちゃだめだよ。病院を首になったら路頭に迷うからね」

その表情がおかしくて、私もくすつと笑いを漏らした。

医師が私のベッドの周りを囲んだカーテンを開けると、優しい目をした快活そうな少年が壁に寄りかかってベッドの脇に立っていた。穿き込んだデニムと身体にフィットしたネイビーのパーカー。

日に焼けた肌と明るい色の髪をして、若い医師とよく似た顔立ちをしている。

「愛美、今日はどう？」

「結城さん」

少年は真っ赤な瑞々しい苺が入った白い紙の手提げ袋を差し出した。

「また何にも食べてないんじゃないかって陸人が心配してた。ってことで忙しいあいつに代わって俺がお見舞い。悪徳医師の魔の手からも守らないとね」

「わあ。嬉しい。いつもありがとうございます。季節外れなのに、大きな苺」

私は小さな子どものように大喜びして、結城から苺を受け取った。苺は私の一番好きな食べ物だと彼は知っていて、いつもこうしてお見舞いに持ってきてくれる。

「悪徳……。相変わらず口の減らない奴だな、伶。もう高二なんだから、そろそろ大人になって生意気を卒業したらどうだ」

少年の兄は嫌そうに顔をしかめてそう言ったが、口調とは裏腹に、その目は年の離れた弟への優しい愛情に満ちていた。

「兄貴が思ってるより、子どもにも苦勞が多いんだよ」

結城は大げさにため息をつき、それから私を見て微笑んだ。

「レントゲン室、俺が付き添うよ。こんなに可愛い子が一人で歩いてて、誘拐でもされたらどうするんだよな？」

肩にかけた黒いスポーツバッグをベッドの横に置いて、結城が責めるように兄を見上げた。

バッグにはこの間見た少年と同じ、鮮やかなブルーで華南の校章が付いている。

結城は実力のある華南サッカー部の中でも指折りの選手で、陸人とは随分親しくしていたらしい。

プライドの高い華南の生徒達の中で、施設育ちだと知っていながらまったく気にせず今も兄と付き合っている結城は、私にとっても親しみの持てる、頼りがいのある兄のような少年だった。

彼は陸人が慶京に移ってから、こうしてよく私を見舞ってくれる。

「どこかの誘拐犯よりお前が一番危なそうだ。いいか、ちゃんと行つてまっすぐ帰って来いよ」

「兄貴も看護師さんどっかに連れ込んで悪い事してないで、まっすぐ診察室帰れよ」

「お前……」

いつもながらの兄弟のやり取りがおかしくてしょうがない。同室の他の患者もくすくす笑っている。

この二人は人の気持ちを和ませる雰囲気を持っていた。重い病気の患者も結城医師と話す時には笑顔になる。

器用そうな指をした聡明な弟も、おそらく兄と同じ天性の医師の素質を持っているのだろう。

医師は外科医だったが、執刀がない日は外来患者も診察してくれる。

いったいいつ眠っているのかと思う程熱心な仕事振りには患者の信頼も厚く、評判も高かった。

私が施設の近くの小さな病院からここに移ることができたのも、結城が自分の兄に話をしてくれたからだ。

診察料は陸人の出世払いだから心配しないでいいよと医師は私に言った。

「間違いなく、三倍にはなって返って来るね。俺の投資だから愛美が心配する事は何もない」

レントゲン室に向かう病院の廊下を、私の歩調に合わせてゆっくり歩きながら結城が言った。

「陸人は今日も試合だよ。スカウトの見学も凄い数だ。たいした奴だよ。おかげで俺はきっぱりサッカーをやめられる」

「結城さん、サッカーは続けないの？」

「高校卒業まではやるよ。あと一年と少し、全力でね。でも、残念ながら俺は自分の限界が見えてるからね。陸人を見ると、そこに俺がサッカーに望むものが全てあるんだ。」

諦めじゃないよ。あいつの存在が俺を満たしてくれてるというか」

結城はそこでしばらく言葉を切って、それから言った。

「医者になって患者を助けたいと思うようになった。兄貴も爺さんもそれを望んでるし、レールが敷かれてるみたいで嫌だったんだけど、ここまで病院に出入りしてるというんなことを見るからね」

私は頷いた。

結城はきつと彼の目指す医師になり、沢山の人の命を救うのだから。

その姿が見える様だった。

いくつかあるレントゲン室のドアの前で順番を待つ患者達の中に、看護師に付き沿われた女性がぼんやりした表情で車椅子に座っているのに気がついた。

この間の少年が置いた花束を拾ったあの。

透き通るような青白い肌と重い病気の患者に特有のやつれた顔立ち。

頭に被っている柔らかなスカーフが、この女性の病気がどんな種類のものであるかを物語っていた。

細い腕に射した点滴の管が痛々しい。

「こんにちは。あとで病室に伺おうと思ってました」

声を掛けられた相手が認識できずに虚ろな目を向けたその女性に、

結城は優しく声を掛けた。顔見知りの様だった。

「いつも綺麗ですね」

その言葉を聞いた女性の顔に、少女のようにあどけない微笑みがゆつくりと広がった。

小さな子どものような心に戻ってしまっているこの女性は、綺麗だと言われたことが嬉しいのだ。

その言葉はきつと、彼女の心の何かに優しく触れるのだろう。

「一ノ瀬さん、中へどうぞ」

レントゲン室が開き、技師が声を掛けた。

看護師が幸せそうな笑みを浮かべたままの女性にいたわるように声をかけ、車椅子を押してレントゲン室に入って行く。

一ノ瀬。

あの少年の苗字と一緒にではないのが意外だった。

病気の母親を見舞っていたのだと思っていた。

今の女性の顔立ちには、どこかあの少年の面影がある気がしたからだ。

「結城さん、あの女の人を知ってるの？」

黒髪の少年のことが、何故だかずっと気にかかっていた。

「この間、結城さんと同じサッカー部のバッグを持った人が花束を持って渡り廊下を通るのを見たの。その人はあの女の人姿を見ると、花束を置いて慌てて帰って行ってしまった」

結城は少し驚いた顔で私を見た。

「花束？ あいつ、見舞いに来てたんだ」

「きりしまひろあきってバッグに名前が押してあった」

「そいつは俺の幼馴染で、あの人は奴の叔母だよ。俺らは昔、よくあの人の家に遊びにいったんだ。当時は結婚してて子どももいたんだけど、二人とも一年半前に事故で亡くして。優しい人で、子どもが見てもうつとりするような美人だったよ」

「ずいぶん悪いの？」

結城はしばらく黙ってから静かに言った。

「脳に取り除けない大きな腫瘍があって、今では昔の事がほとんど思い出せない。痛み止めの薬を大量に投与してるから、あの通りだよ。なんとか命をつないでる」

すぐに言葉を返せなかった。

迫りくる死を待ち受ける恐怖を知らずにすむのは幸せなのだろうか。

あの少年の叔母。

花束の包装紙が切れそうなほど強く握り締めていた、彼のあの思いつめた表情。

「蔵木さん、中へどうぞ」

技師がドアから顔を覗かせた。



「ほら、愛美の番だよ」結城が私にそう言つと、安心させるように背中をそつと叩いた。

私はまた軽い肺炎をぶり返していることがわかり、少し退院が長引いた。

入院している時が私にとって一番よい環境にある事を陸人は複雑な表情で認めていて、とにかく治りきるまでお願いしますといつも結城先生に頭を下げていた。

それから何日か経ち、点滴が外れてベッドから起き上がれるようになる、私は自分の棚に置いてあるスケッチブックを取り出して窓から見える中庭に揺れるコスモスを白い紙に写し始めた。

絵を描くことが好きだった。

言葉で自分の心を表すのは昔から苦手だ。

母が何日も家に帰ってこない時は、紙と鉛筆を持っていろいろなことを想像して過ごした。

美しいドレスやお城、沢山の花の中に陸人と私が手を繋いでいるところ。

けれど、今まで父母の絵を描いたことは一度もない。

小さな頃、学校で家族と自分の絵を描きなさいといわれた時、どうしても描くことができずに、私は白い画用紙に白いうさぎの絵を描いた。

昔、母が陸人と私を一度だけ移動動物園に連れて行ってくれたことがある。

その日の母は穏やかで、優しかった。

柵で仕切られたふれあいコーナーの中に小さな白いうさぎを見つ

け、陸人が捕まえて私にそつと手渡してくれた。

柔らかく、ふわふわしたうさぎは逃げようとせず、私の腕の中で小さく震えている。

「うさぎさん、どうして震えてるの？」

珍しく、私たちが遊ぶ姿を椅子に座ってずっと見ていた母がしばらくして答えた。

「人間が怖いだよ」

暗い小さな檻に入れられた動物達はとても悲しそうに見えて目を合わせるのが怖く、私はずっと陸人の後ろに隠れ覗き見ていた。

檻の中をただ行きつ戻りつしている毛艶の悪い鹿は、柵に身体を何度もこすり付けているところの毛が剥げ落ちている。

鉄の柵を掴んだままずつとこちらを睨み付けている大きな黒いゴリラ。

死んだように寝そべっているかと思うといきなり起き上がって恐ろしい咆哮を上げるライオン。

「威嚇してるんだよ。誰にも傷つけられないように。そうするのは、本当は弱いからなんだって……」

陸人は言った。

怒っているのは悲しい気持ちで一杯だからなんだ。

動物は泣けないからああして怒るのだと、ぼんやり考えた記憶がある。

ある時期から、陸人は私にも涙を見せなくなった。

傷ついた心は彼の身体の奥深くに封印され、それすらわからないように傷の周りを覆ってしまった。

誰もその傷に触れ、癒すことはできないのだ。

泣くことができない動物達の姿を思い出すと、私は今でも胸を締め付けられる。

悲しみを怒りに変えることすらしなければ、その想いはいつたどこへ行くのだろう。

それはいつか全てを脆く崩してしまうのではないだろうか。

ふと気がつくと、あの日見た少年の横顔を描いていた。

陸人以外の人を描いたのは初めてだった。

「愛美は本当にいい絵を描くなあ」

結城先生がいつの間にかベッドの傍に立っていたのに気が付き、私は真っ赤になって慌ててスケッチブックを閉じた。

「絵を描ける才能に憧れるよ。俺は全然だめだ。どうも描きたいことが紙に収まりきらなくて、机にまではみ出してしまう。子どもの頃は仕方ないから画板ごと提出したよ」

「そっいうの、素敵な絵だと思います」

画板ごと絵を出されて戸惑っている教師の顔が思い浮かんで吹き出した。

「愛美の絵には対象の背景が見える。そこに描いてある彼の想いかね」

「私、この人を知らないんです。何度か見かけただけ」

なぜか頬が赤くなった。

医師はしばらく私を見てからさりげなく言った。

「その絵の彼にそっくりな子がその面会室に座ってるよ。俺が呼んだ時間より随分早くから来てるんだが中々仕事のきりがつかない。もう少し待ってくれるように誰かが言ってくれと助かるな」

待合室は珍しくほとんど人がいなかった。

平日の午後のせいだろうか。

この病院は病棟が七階まであり、フロアーごとにこうして明るく清潔な面会室があるので、見舞いに来る人が後をたたない。

入り口からそつと覗くとあの少年が椅子にもたれて長い足を投げ出している後姿が見える。

私は胸の動悸を深呼吸で抑えてから中に入り、彼に近づくと後ろから声をかけた。

「あの……」

その後、どうやって言葉を繋いだらいいのかわからず沈黙していると、少年が振り返って私を椅子から見上げた。

伸びかけた黒髪が、端正な顔立ちを引き立てている。

日に焼けた肌に洗いざらしたチェックの綿のシャツと、デニムがよく似合っていた。

私が何も言わずに立ったままでいたら、表情を変えないまますぐに目を逸らしてしまう。

意外な反応に戸惑っていた。

男の人に自分から声をかけたのは生まれて初めてだったが、こんな態度を取られたのも初めてだ。

いつも緊張するほど見つめられてしまうから、知らない男の人が苦手だった。

特に母の恋人と関係してからは、男の人たちが私を見る目が明らかに変わっていた。

仕事に出かける時の母を見る男の人達のように、独特の熱を帯びた目で舐めるように見つめる。

私がどんなことをしているのか見透かされているようで怖かった。

少年の態度でふっと身体力が抜けた。

私はもう一度少年に話しかけた。

「すいません。結城先生から伝言を預かってきました。あと三十分くらいかかるそうです」

少年はもう一度私を見て、「どうも」と一言言った。

そしてまた沈黙。

彼は私を無視したまま手にした本を読み始めた。

「隣に座ってもいいですか？」

自分の言葉にも驚いた。

これは私が言っているのだろうか。

微かに頷いた気がしたので、私は少年の横に腰を下ろした。

気持ちのよい秋晴れの日で、少し開けた窓から時々静かに吹き込む風が少年と私の髪を揺らす。

私達はただ黙って座っていた。  
部屋の向こうで、穏やかに話している他の患者と家族の声が聞こえる。

熱心に本を見ている少年に私は聞いた。

「その本面白いですか？」

少年はちらつと私を見た。

「まあね」

「もし私がここにいるとお邪魔なら……」

最後まで言い切らないうちに、うつむいて本を読んだままの少年がぶつきらばうに言った。

「別に。邪魔じゃない」

私達はそれきり言葉を交わさず、二人で並んで座っていた少年が手にしてる本は、ずっと逆さのままだった。

自然と笑みが浮かんでくるのは窓から差し込む午後の柔らかい日差しのせいだろうか。

本を読む少年の隣で、ほんのりと幸せな気持ちに満たされたまま、窓の外に見える中庭のコスモスに目を向けた。

少年にはそれきり会うことはなかった。

退院の日、面会室の前を通りがかり、ふと彼が座っていた椅子に目をやった。

彼は花束をあ的女性に渡すことができただろうか。

あの後、あの女性のことになって一ノ瀬という名前を頼りに最上階にある特別室を探しあてたが、そこには数日前から面会謝絶の札がかかっていた。

「二週間後にもう一度様子を見せて。薬は忘れずに飲むこと」

最後の診察の時に結城医師はそう言って看護師に予約日の指示をすると、回転する椅子をこちらに向け、大きな机に肘を突いて真面目な顔で私を見た。

「施設に戻っても無理は厳禁だよ。愛美はもつと自分に興味を持たなくちゃだめだ」

看護師が書き込んだカルテを持って出て行き、柔らかい白と薄いベージュで統一された診察室には二人きりだ。

「俺は悪徳医師だから、自分がそうしたい時には患者に個人的な情を持って、妹のように思うのも平気なんだ。まだこんなに若い可愛い女の子が明日の話をまったくしないことがやりきれないんだよ。傷ついた小さな子ども達をさらにいたぶるような世の中に反吐がで



る。

もし、愛美があそこを出て違う所で暮らしたければ、いつでも力になる。遠慮しないで言って欲しい」

私は診察室の椅子に座ったまま、首を振った。

「いいえ。私はあそこにいます。母が……」

なぜ母という言葉が出てきたのだろう。

「母が迎えに来てくれた時、私がいないと悲しいと思うから……」

言葉が空虚に響いているのはわかっていた。

母が私を迎えに来ることなどありえない。

あの施設の子どもは皆それがわかっていた。

それでも小さな希望を捨てることができず、施設でその日を待ち続けるのだ。

父や母が自分を迎えに来て、これは全部間違いだった、本当はお前を愛しているのだと抱きしめてくれる日がくることを。

医師は小さくため息をついた後、真剣な口調で私に言った。

「もし何かあったら、必ず俺に言うんだよ。自分でどうにかしようとは絶対に思わないこと。わかったね？」

「はい」

私は答えて立ち上がった。

「ありがとうございました。結城先生」

頭を下げて診察室のドアを押す。

医師が心配していることが何なのかわかっていた。

私が望まない妊娠をすることを恐れているのだ。

その時の私にとって妊娠は漠然としたものでしかなかった。

自分が新しい命を宿すことができる身体だと思うことが難しくもあつたし、子どもが私を母親として選ぶことなどありえない気がした。

だが、私はいつも誰かに身体を求められていて、相手が私をそんなに扱うことも多いのだ。

おそらく、私が誰にも心を開かないからだろう。

何をされようと反応せず、黙って横たわったままの私に、男達は強く苛立つ。

施設に戻ったその夜、自分の部屋に入ろうとした私に一人の少年が近づいて来て腕を強く掴んだ。

赤く燃え立つ髪の色は、彼の性格そのもののようだ。

耳のピアスと顔に残る細い傷跡が、年よりも大人びた雰囲気さえに強調している。

陸人がいた頃から、気の荒さと言動で何度も警察の手を煩わせていた一つ年上の少年だった。

何度も施設を飛び出していたが、暴力団に目をつけられて身辺が危なくなつたため、ほとぼりが冷めるまで施設に身を隠しているという噂を聞いた。

「愛美、随分長い入院だったな。お前の帰りを首を長くして待ってたんだぜ」

川崎颯という名前のこの少年の顔立ちと雰囲気は、母の恋人を思いう出させる。

「離して」

私は手を振り払い、身体を離れた。

川崎がいつも私を目で追っていることは知っていたが、会話すら、ほとんど交わしたことがなかったのだ。

施設の少年たちの間ではまた争いがあったらしく、男子寮の一番広い一部屋を実質的に独占している川崎が、今のリーダーであることは明らかだった。

すなわち、川崎が私を手にする権利を手にしたということでもある。自分を拒んだ私に怒りの目を向けると、少年は言った。

「玖出ならよくて俺はだめかよ！」

まるで世の中の全てを憎んでいるようなその眼差しが、母の恋人を思いう出させるのだと気がついた。

「玖出さんは何もしなかったわ。あなたとは違う」

私は川崎をきつく見返してそう言った。

あの夜私を抱きしめて泣いた彼の姿を思い出す。

「嘘をつくな！ 俺が騙されると思うなよ！ お前は選べる立場じゃねえんだよ。お前を欲しいと思った奴がこのボスになる。ただ黙って従ってればいいんだ」

川崎は私を壁に強く押し付け、腕で押さえつけると身体を触りだした。

施設の他の少年が廊下を通りがかったが、すぐにうつむいて足早に通り過ぎていく。

「やめて！」

私は壁に身を寄せる様に身体を捻り、はだけた服を掻き合わせて自分の身体を隠した。

「抵抗すんなって言ってんだろ！ お前みたいな女が今さらなんだよ。お前がやって来たことを兄貴にしゃべってもいいんだな！」

川崎はついに恐れていた言葉を口に出した。

いつかは言われると覚悟をしていたのに、動揺を押さえられない。

言葉を一つも言い返せないまま、私は川崎から眼を逸らした。

陸人が施設を去ってから私がして来たことを、絶対に知られたくない。

川崎は、私がそれを恐れていると感じている。

男子寮の廊下では、指導員にすらすれ違わなかった。

身体から力が抜けた私を無理やり部屋に連れ込むと、川崎はベッドに座って背もたれに身体を預け、煙草に火をつけながら目を上げて言った。

「脱げよ。あいつには見せてたんだろ？」

玖出に対して特別な感情があるようだった。

玖出が去った後、他の少年達が私にして来たことを知らないはずがないのに、川崎は玖出だけを意識している。

「お前がいない間に学校の担任からは充分金をいただいといた。出世コースまっしぐらの教師の癖に、教え子に無理やり手を出すなんてふざけた奴だぜ。この不景気の中に淫行教師の烙印押されて教職失ったらどうにもなんねえもんなあ。自分の女房がくたびれ果てた大ブスのババアじゃお前見て狂っちまうのもしかたねえけどよ」

私が教師に関係を強要されていることを、なぜ知っているのだろう。

それを強請のねたにしている。

回りの少年から社会人にまで、川崎は恐喝の手を広げていたのだろうか。

果然と川崎を見返した。

川崎は大きく吸い込んだ煙をゆっくり吐き出しながら、私を威嚇するように目を眇め、低い声で言った。

「お前を使つて稼ぐこともできるんだぜ？ その辺の腹の出た油くせえ親父にとつかえひつかえ犯られるのは嫌だろ。お前が俺を飽きさせなかったら小遣い稼ぎの道具にはしないでやるよ」

窓の外では、雨が強く振り出していた。

私は川崎の目の前で、言われた通りに身にまとっていた服を全て脱いだ。

そのまま川崎を真っ直ぐに見つめる。

しばらく動きを止めて私を見ていたことに気がついた川崎が、少し動揺したように視線を逸らした。

燃え尽きそうになっていた煙草を空き缶に捨て、彼はそのまま咳くように言った。

「来いよ」

裸の私を抱きしめた時、大人の男のように振舞っていた少年の身体が少し震えているのに気がついた。

彼が私に触れたのはこの時が始めてだった。

素肌が触れあうと、川崎は自分を抑えきれないように私を組み敷いた。

屋根を打ち付ける雨の音が、暗い部屋でギシギシと鳴るベッドの軋みを押し流していく。

壊れた雨どいを伝ってコンクリートを打つ水滴の音が、アパートの水道からいつまでも漏れ落ちる水の音を思い出させた。

「もつと嬉しそうな顔しろよ。全然感じねえのかよ。あいつにはどんな顔を見せたんだ」

川崎は私を抱きながら途切れ途切れに言った。  
汗が身体を伝う。

「あいつが今でも好きなのか。あいつだけが特別なのかよ！」

その言葉で、彼が私と玖出の間にあつた感情に嫉妬しているのだと知った。

確かに、他の少年達にはない気持ちを、玖出にはほのかに持っていたかもしれない。

川崎は、私が玖出に恋愛感情を持っていると思っているのだ。

私が施設に入った時、一番最初に会ったのが川崎だったことを思い出した。

私を驚いたような目で見つめ、まだ顔に幼さの残る少年は言った。  
ここはお前みたいな奴が来るとこじゃねえよ。早く親のところへ帰れ。

「……お前はあばずれだ。誰にでも抱かれるあばずれ女だ。これが当然の仕打ちなんだ」

川崎が苦しげに囁き、両腕で私を強く抱きしめた。

言葉とは裏腹に、少しでも私を離したくないかのように。

…… 威嚇してるんだよ。誰にも傷つけられないように。  
そうするのは、本当は弱いからなんだって ……。

一人でも生きていけると虚勢を張りながら、私達はこの施設の屋根の下で身体を寄せ合っている。

お互いに触れないように、目を合わせないように距離を置きながら。

誰かに愛して欲しくとも、その方法を知らない。

思いを遂げた後、私の身体に押し掛かったままいつまでも顔を上げない川崎にそっと腕を回すと、彼は傷口に触れられた様に、ビクッと身体を震わせた。

傷つけることでしか相手に触れられない少年。

「お前が悪いんだ。お前が……」

小さく呟く少年が泣いているように見えた。



自分の部屋のドアをそつと開けた時、部屋はすでに明かりが消えていた。

静まり返った施設の中に、どこかの部屋から子どもの泣き声と職員含んだ声が聞こえる。

あなただけが寂しいわけじゃないのよ。皆同じ想いをしてるの。ますます泣き止まない子どもの声を無情に打ち消す叱責。

足音を忍ばせて部屋に入り、軋まないようにドアを閉めたと、廊下の向こうで壁に打ち付けるようにドアを開けた音が聞こえた。すぐにドアがボタンと閉まる。

急いで二段ベッドの下段に潜りこみ息を潜めていると、ドアを開ける音がして見回りの職員が中を覗く気配がした。

私のベッドの傍まで来るとわざわざ懐中電灯を照らし、本当に私なのか満足するまで寝顔の確認をする。

職員が部屋から出てドアを閉め、廊下に響く足音が小さくなっていくと、ようやく緊張していた体から力が抜け、私は小さく安堵のため息をついた。

危ない所だった。

今夜は副園長が見回っている。

寺田は、私の行動を怪しみ、常に監視の目を向けていた。

寺田は独身で、四十代後半の地味な女だ。

派手な服を好まず、化粧をしたのも見たことがない。

彼女は施設の子どもの達の恋愛や、性に関することに神経質だった。

口に出したりふざけたりすることも許さず、テレビで少しでもそんな話題が出ると即座に消してしまう。

特に私に対しての監視は徹底的で、食事の席で他の少年が私に目を向けると必ず夜には私を呼び出し、挑発するような態度はやめなさいと叱責する。

三ヶ月ほど前、私より一つ年上の少女が妊娠しているとわかった時の剣幕は凄まじかった。

あらゆる言葉で少女を罵り、ヒステリックに体罰すら与えそうになって、振り上げた手から少女を庇った私は変わりに何度も叩かれた。

あまりの激高ぶりに、この中年の女が狂ってしまったのかと見ていた全員が驚き、部屋の中が静まり返った。

「汚らしい！ 相手がわからないだなんて、あんたは盛りの付いた牝犬と一緒によ！」

食堂の床にうずくまり、ただ泣くことしかできない少女に寺田は吐き捨てるように言った。

鍵を外しておけと強要されていた少女だ。

父親はきつとこの施設の少年の誰かに違いなかったが、彼女は報復を恐れて最後まで少年達の名前を口に出さずにいた。

一晩中泣き明かした少女は身重の身体で施設を抜け出し、そのまま帰ってくることはなかった。

少女のことがどのように処理されたのかは知らない。

ただ、この事件があった後も寺田は変わらずこの施設で副園長を続けている。

もう、この程度では誰も驚かないほど、感覚は麻痺していた。

寺田は私を副園長室に呼び出しては、他の少年と性的関係があるかを問い詰めた。

「正直に言えば私は怒らないのよ。こんなことを聞くのはあなたを心配しているからだってわかるわね？」

児童心理学の書籍が山ほど詰められた大きなテーブルに置いたコーヒークップを両手でおさえ、ぐつと身体を前に乗り出す。

眼鏡の奥の目が好奇心に輝いた。

無関心を装った言葉の裏に隠されている、女をあくなき詮索心。こんな時の寺田の目には、取り付かれたような光がある。

「あなたはずいぶん奔放だという噂を耳にはさんでるわ」

そこで言葉が途切れ、男のような目線で私の身体を眺める。

寺田はコーヒークップを口元に運ぶと舌で薄い唇を舐めた。

「あなた、大人しそうな振りして施設内で何度も嫌らしい行為を繰り返してるんじゃない？」

嫌らしい行為。

自分の行動が綺麗だと思ったことはもちろんなかったが、女の言葉はそれ以上に下世話な響きを帯びていた。

「何も」

頷いたらそれで終わると知っていた。

寺田の歪んだ興味を満足させるまで詳しく聞かれ、そのあと全て

は資料にされて性格形成の不安というもつともな理由の添え書きと共に、私はここよりももっと厳しい更生施設に送られる。すでに一人、少女がその処分を受けていた。

「何もしていません」

私は寺田の目を見て言った。

「そう」

忌々しそうに引きつった顔で寺田は言った。

それ以上私からは何も聞き出せないと思ったのか、寺田は急に興味が失せた顔で机の上のメモ書きをばらばらと確認した。

「学校の保険の先生からも電話が入ってるわ。用件を聞いたけど、あなたが元気なようなら連絡は結構です、ということよ。」

時間があれば保健室に顔を見せてくれるように伝えて下さい、ですって。ただでさえ、施設の子どもは待遇が悪いと世間から誤解されるのだから、理由もなく辛そうな顔をするのはやめなさい。

保険の先生に心配されるような態度を取るのは感心できませんね。あなたが自分で明るくなるように努力しなければ、決して幸せにはなれないですよ」

「はい。気をつけます」

保険の教師は去年赴任してきた佐久間という若い女性で、保健室で過ごす時間が多い私を気に掛けてくれているようだった。

入院中も何回か、何かのついでだと顔を見せてくれた。私が唯一緊張しないで側にいることのできる教師だったが、話をし過ぎて自分の過去を知られてしまうのが怖かった。

だから親しさが増すに連れ、保健室には近寄りがたくなっていたのだ。

もつずっと顔を見せていない私を心配して電話をくれたのだろう。

寺田が、私を一瞥して聞いた。

「ところであなた、今月もちゃんと生理はあったんでしょうね」

「はい」

私は答える。

「証拠が必要ですか？」

副園長室を出た後、身体が震えていた。

私は壁に寄りかかってきつく眼を閉じた。

すっかりしなくては。

私を迎えに来るために必死に頑張ってくれている陸人に心配をかけてはならない。

見回りの寺田が私の部屋から歩き去る足音が完全に消えた後、真つ暗な部屋のベッドの中で静かに身体を起こし、服を着替えようとそつとベッドの外に起き出した。

ボタンに手をかけると、小さく囁く声が聞こえる。

「愛美姉ちゃん」

二段ベッドの上で小さな女の子の影が動いた。

「優花ちゃん、まだ起きてたの？」

施設では年長者は年齢の低い子どもと同室になることが決まっている。

私は少女達の中では一番の年長で、優花は四ヶ月ほど前に施設に入ってきた、まだ六歳の一番小さな少女だった。

「うん。遅かったね、お姉ちゃん」

暗闇に目が慣れてきて、女の子の切りそろえた髪と利発そうな可愛らしい顔が見える。

「眠れないの？」

私がベッドの上段を覗き込むと女の子は布団の上に起き上がって、しょんぼりとうつぶいたままこくと頷いた。

「じゃあ、お姉ちゃんと一緒に寝ようか」

私がそう言うと、少女の顔が嬉しそうにぱつと輝いた。

狭いベッドの中で、年よりも随分小さく華奢な少女の身体を背中から抱きしめる。

「愛美姉ちゃん、まだ病気なの？」

小さな子特有のストレートさで、優花が不安そうに私に聞いた。

「ずつつと病院から帰って来なかったから、もう戻って来ないかと思って、優花泣いちゃった」

そう言う声も涙声になっている。

優花は施設の中では一言も口をきかず、いつも私の隣に座ってずっと服の端を握り締めていて、私と二人になった時だけこうして小さな声で話をする。

優花の母親は、育児ノイローゼを理由に娘に虐待を繰り返した。

母親がアパートに戻っていないのを児童相談所が知ったのは、少女が置き去りにされてから二週間を過ぎた時だった。

少女は母が家に帰って来ないことを誰にも言わず、残された少ないお金でパンを買い、夜は鍵を閉めて眠っていたのだという。

小さな手には、タバコを押し付けられた火傷の跡がいくつもあつた。それでも少女は母親との数少ない楽しい思い出だけを何度も何度も

も私に語るのだった。

生まれた小さな子どもに優しい花と名づけた時、母親はどんな気持ちだったのだろう。

幼い少女のまだ柔らかな髪を撫でながら私は言った。

「大丈夫よ。病気もすっかり治ったの。それに、ここには優花ちゃんがいるものね」

私がそう言うと、少女は嬉しそうに身体をもぞもぞさせた。小さな優香の仕草は、いつも私の心を愛しさで一杯にする。

「王子様が迎えに来てくれるまでここにいろの？」

優花は私の手を取り、自分の頬にそっと押し当てて言った。

「そうね。王子様が来てくれるまで」

私は微笑んだ。

優花は私が囚われのお姫様なのだという空想が好きだ。大好きな絵本の挿絵と私がよく似ているらしい。

お姫様は暗く日の差さない塔の部屋で、王子の迎えを待っているのだ。

そしていつまでも幸せに暮らす二人。

優花は私の小さな頃と同じ様に、物語や空想で現実の辛さを補う。それは厳しい現実の中を生きて行くための本能なのかも知れない。

「お姉ちゃん、優花のママは迎えに来てくれるかな」



しばらくして、優花がぽつんと呟いた。

「……どうしたらいい子になれるの？」

「優花ちゃん……」

「いい子になりなさいってママはいつも言ってた。私が悪い子だから、ママは迎えに来てくれないの？」

「そんな事ない」

声を立てずに泣き始めた少女を私は強く抱きしめた。

「優花ちゃんはいいい子だもの。お母さんは忙しくて心が疲れていたの。優花ちゃんは何も悪くない……」

子どもをただ愛することがそれほど難しいのだろうか。

泣きながら眠ってしまった優花の身体が、冷たく冷えた私の身体を温めていく。

その体温を腕の中に感じながらいつの間にか眠りに付いた。

「経過は良好。顔色が少し悪いのはしかたないか。このままちゃんと身体を大事にしてくれよ」

二週間後の検診の時、結城医師がそう言って私に微笑んだ。生理が終わったばかりで、身体はだるかったが苦にはならなかった。

自分の中に溜め込んだものを定期的に押し流してくれている気がするからだ。

「今日はこのまま学校に行けるよ。あ、そうそう愛美に預かりものだ」

医師は診察室の大きな机の引き出しから一冊の本を取り出して私に手渡した。

それはベストセラーの恋愛小説だった。少年と、夫のいる年上の女性の恋。

「この間、愛美に伝言を頼んだあの男の子から。興味を持ってみたいだから渡して欲しいって」

「私に？」

「そう。俺を通してとはいえ、あいつが女の子にそんなことを言うのを見たのは初めてだ。まだ産着を着てベッドの上で虫みたいにごめいてる頃から知ってるんだけどね」

結城医師はそう言って笑った。

「俺の実家の二件隣の家の子なんだ。伶と同年で宏章っていう。華南サッカー部のキャプテンだよ」

「彼の事は弟さんから聞いてました。あの華南でキャプテンだなんてすごいですね。あの時、先生が来るまで私、ずっとあの人の隣に座っていたんです。気を使わせてしまったかなって思ってたんですけど」

「そうか。愛美みたいに可愛い子が隣に座ってちゃあ、あいつも本なんて読んでいられなかっただろうな。随分印象が深かったらしくて、愛美のことが気になってる様子だった」

私がその言葉に赤くなると、医師はわざと真面目な顔で言った。

「あいつの身内のことで、今日はここにいるんだ。愛美が診察でここに来るから自分で渡せてあいつに言っただけだね。」

愛美の診察が終わる予定時間をさりげなく言っただけだ。待合室で熊みたいにつろつろしてる奴がいたら、それは間違いなく宏章だよ」

優しい目がいたずらっぽく笑っていた。

大勢の患者が座っている広い待合室に向かうと、結城医師の言った通り、中庭に面した側の大きな窓の前で、背の高い少年が落ち着かない表情でうつろうつろしているのを見つけた。

いつものように黒いスポーツバッグを持っている。

私は浮かんだ笑みを押し殺しながら少年に近づき、声をかけた。

「こんにちは。霧島さん」

少年は硬い表情で振り返ると私の姿を認め、驚いて動きを止めた。それから、すぐに視線を逸らす。頬に少し赤みが差している。

「本、ありがとうございます。読んでみたいと思ってたんです。しばらくお借りしてもいいですか？」

「返さなくていい。俺はもう読んだから、やるよ」

少年はそれだけ言った。もうここから逃げ出したいような表情だ。

「今日は学校はお休みなんですか？」

「いや。ここの病棟の患者に用があつて」

「この間の花束、女性が病室に持ち帰りました」

そう言うと、少年は驚いたように顔を上げて私を見た。警戒するように表情が強張る。

「何で知ってる？」

「あなたが花束を持ってその渡り廊下にいるのを見たんです。あなたが置いた花束は、綺麗な女性が拾いました。とても幸せそうな顔をして、花に顔を寄せて微笑んでましたよ」

しばらくして、少年は「そうか」と言った。

前髪が落ち、横から見ていると表情がよく見えないが、彼は少し

だけ身体の力を抜いたように見えた。

「花が好きな人なんだ。あんなふうになる前は、家の庭にいつも溢れるように花を咲かせてた。日に焼けるのも気にしないで、いつも庭に……」

少年は話し過ぎたと思ったのか、急にそこで言葉をつぐんだ。

「俺の名前をどうして知ってる？ 結城先生から聞いて？」

ようやく少年は私の顔を見た。

日に焼けた彼の顔は端整に整っていて、すっきりした二重の目が印象的だ。

やはり、どこかあの女性にいていると思う。

「いいえ。先生の弟さんの方から」

「怜？」

少年が怪訝そうに眉を寄せる。

「はい。あなたのバッグについていた名前を覚えていたので聞いたんです。結城さんは兄の友人で、兄の名前は蔵木陸人と言います。もしかして、華南中等部の時のサッカー部で一緒にしたか？」

「陸人の妹！ 全然似てないな。本当に？」

少年は驚いてそう言い、まじまじと私を見た。

少年の目には賞賛がはつきりと現れていて、私は赤くなって小さく頷いた。

「まさか、あいつの妹がこんなに……」

そう言いかけて、少年がはっとしたように口をつぐむ。  
その目にだんだんと皮肉な光が帯びてきた。

「あいつの妹か。じゃあ日向だろ」

軽蔑したように少年が言った途端、ショックで胸がズキンと痛んだ。

少年の反応は特別ではない。

今までも見慣れているものだ。

結城が優しく接してくれていたから自分の立場を忘れていた。

華南に通っているような家柄の少年に、私が話しかけるなんて身の程知らずだ。

「……そうです」

そう言うのがやっとだった。

「話かけてしまつてごめんなさい。お礼を言いたかったものだから」

少年のたったこれだけの言葉で泣きそうになっている自分に驚き、すぐに身体を翻すと、私は顔を見られないようにうつむいて出口の方向へ歩きだした。

「待ってくれ」

すぐに少年が後を追ってきて、足早に歩く私の横に並ぶと慌てたように言った。

「ごめん。変な言い方だったな。条件反射で……」

「条件反射であんな表情が出るほど軽蔑してるってことですね」

涙をすばやく指先で拭う。

今まで何度も同じように蔑まれてきたのに、私は今さら何を気にしているのだろう。

どんなことを言われても、誰かにこんなふうに言い返したことは今までまったくなかったのだ。

「違うよ。お前の兄貴の名前に対しての条件反射だ」

もつと腹が立った。

涙が溢れてきてどうにもならなくなり、私は立ち止まって両手で顔を覆うとそのまま泣き出した。

こんなたわいのないことで泣くなんて。

今まで私が我慢してきたことはいったい何だったというのだろう。

「というか、お前の兄貴を軽蔑してるってことじゃなくて……。ああ、つまり、やっかんでいるんだよ、お前の兄貴のサッカーの才能を。陸人を見ていると自分の限界を嫌という程思い知らされるから」

少年はそこまで一気に言った後、しばらく言葉を切ってから、心底すまなそうに言葉をつないだ。

「最低だな、俺。あいつに敵わないからいつもあんな言葉で溜飲を下げようとしてた。負け犬なんだよ。素直に認めるから許してくれないか」

謝ることに慣れていないのか、言葉を懸命に探し出しているのがわかる。



「俺はどうも言葉の選び方を知らないんだ。言うべきことが言えないのに、言わないでいいことだけ口から出ては後悔する」

ハンカチを取り出して涙を拭き、少年を見上げると、彼はまるでしかられた犬のようにしょんぼりとしていた。

私達の回りを通っていく人が何事かと興味本位に振り返っているが、彼は肩に下げたバッグに入っている自分のネームさえ隠そうとしない。

確かに考えないうちから言葉だけが先に出てきてしまうタイプなのかもしれない。

少しずつ気持が治まって来て、ようやく最後の涙を拭き終えた。

「私こそ突然泣き出して驚かせてごめんなさい。いつもはこんなことで泣かないんです。だからもう気にしないで」

少年がなんだか可哀想になり、私は彼を見てそう言った。

「あなたは華南のサッカー部のキャプテンだって結城先生から聞きました。それだけの力がある人が負け犬のはずありません。兄はいつも華南の選手の凄さに感心していました」

少年はそれを聞いて少しほっとした顔で私を見た。

「いや、正直な気持だよ。どうもあいつに関しては必要以上にむきになってしまう。けど俺、初めて話した子に何言ってるんだろうなこんなこと今まで絶対に口に出さなかったのに」

「私も陸人以外の人の前で泣いたのは初めてです」

「お互い随分意地っ張りなんだな」

少年はそう言って少し笑った。

とたんに、近寄りがたいところのある彼の雰囲気が和らぐ。

「お前、名前は？」

「愛美。蔵木愛美です。エミ。愛する、美しい」

「ふーん。似合ってるかもな。その名前」

少年は私の名前を口の中で小さく呟いた後、照れたようにぼそつとそう言った。

私たちはその後、病院の前にあるバス停のベンチに腰かけ、二人ですっとバスを待っていた。

宏章はベンチの背もたれに身体を預けて足を投げ出していて、私も白い雲がゆったりとよぎる青い空を見上げていた。

何本も何本もバスが止まり、発車していくのに宏章は席を立つとしない。

「どこへ行くバスを待ってるんですか？」

私が聞くと宏章は言った。

「華南学院前」

「学院前。もう二回くらい通りましたけど」

「まあな。お前はどこ行くんだよ？」

「……今西」

「今行ったバスがそうだよな」

私は赤面して頷いた。

しばらくしてから宏章は言った。

「天気もいいし。このまま学校フケるか。近くに陸上競技場がある。」

そこの芝生で昼寝でもしようぜ」

初めて入った広い陸上競技場はきちんと整備されていて、階段状になっている応援席の反対側には大きな時計台があり、その回りはなだらかな傾斜のある手入れの行き届いた芝生になっていた。

後ろの道路を挟んだ所にある大きな公園の噴水の回りでは、小さな子どもたちとのんびり遊んでいる母親の姿が見える。

まだお昼まで少し間があるこの時間帯は、母子の姿が多いようだ。風船を売っている出店の前では、子どもがねだった風船を手にした途端に空へ飛ばしてしまい、泣き出した子どもを母親がなだめている。

泣き止んだ子どもはじきに風船を忘れて元気に走り出した。

この公園一帯には春になると見事な桜が咲く。

今年の春、初めて陸人に連れてきてもらった時にはあまりの美しさに息を呑んだ。

もう花びらが散る頃だったが、春特有の強い風が吹くたびに花吹雪が一斉に舞う様子が今でもはっきり目に浮かぶ。

上を見上げて、道を見ても、そこは一面に桜の花びらで埋め尽くされていた。

「ここは幼稚舎の頃入っていたサッカークラブの練習でよく来たんだ」

宏章は芝生に腰を下ろして着ていたジャケットを脱ぐと、芝生の上に引いて、私にそこに座れと指差した。

「お前、芝生に直接座るだけで風邪引きそうな顔してるもんな」

陸上競技場の中央の芝生のフィールドの上では、何人かの学生が

思い思いにストレッチをしたり、槍投げの練習をしている。

私はまだ宏章の身体のぬくもりが残るジャケットの上に腰を下ろし、足を伸ばした。

すこしひんやりとした芝生が素足に触れて気持ちがいい。

「ここの競技場に入るのは初めてだけど、後ろの公園にはこの春陸人と一緒に来たんです。桜の花が散る頃だったけど、本当に綺麗だった……」

「確かにここの桜並木は凄いいよな。あの公園のベンチに座ってずっと降って来る花びらを見上げてると、空だか地面だかわからなくなる。子どもの頃はそれをしてよく目を回したよ」

クスツと笑って私は言った。

「それ、やってみたいな。花びらに囲まれてふんわり浮いてる感じになるのね……」

「浮いてると言うか、変な感じだよ。一度試してみろよ。そういやお前、陸人を兄さんって呼ばないんだな。兄妹ってそうなのか？俺は一人っ子だからわからないけど」

宏章の言葉にドキツとして身体が強張った。

「小さい時にあまり一緒にいなかったから」

私はそう言って、平静を装おうと制服のスカートの襷を直した。

「父が違うんです。私は六年生まで母と暮らしてて、陸人は小さな

頃からずっと施設に」

「あいつ、自分のことは何も話さないからそんなに昔から施設にいたなんて知らなかった。まあ、あのサッカー部の雰囲気じゃ、自分のことを話そうなんて思えなかっただろうけど……。わざわざ突っかかってく奴もいるし、俺みたいに意地でも口をきかない奴もいるから。」

際立ちすぎてたんだよ。他の部員が努力で補える範囲をはるかに突き抜けてた。ねたみを持たずにいるのは至難の業だよ。多分、あいつが普通に口を利いていたのは伶だけじゃないかな」

宏章は考え込むように言った。

「もちろん、妹がいるなんて口に出したことはなかったけど、正直お前を見て

たら理由の一つはわかる気がするよ。華南のサッカー部なんてナンパ野郎ばかりだからな。お前みたいな妹連れてきた日には心配で練習どころじゃないだろう。まさかあいつにこんな美人の妹がいるなんて」

「華南の人が私に興味を持つなんてありえませんか」

私は足の上に腕を伸ばしながら言った。

学校をサボったのは初めてだった。

中学では施設から通っているという事情もあつて親しい友達を作ることはできなかったし、母の恋人とのことが会って以来、小学校の頃の友達とも疎遠になり、たまにくれる手紙にも返事を出さなくなった。

教室ではいつも孤独だったが、それでも体調を崩していない時には毎日学校に通っている。

規則を守らずにいると不安で落ち着かなくなるのだ。  
だが、今は開放感で満たされている。

「さつきは本当にごめん」

宏章が少し慌てている。

一見プライドが高そうで近寄りがたいが、こうして離してみるとなんだか可愛い人だなと思った。

育ちがよいのだろう。

施設にいる少年達のようなヒリつきは、彼からは感じられない。

「そんなつもりじゃないんです。それはもう気にしてません。それより霧島さん、小さな頃からずっとサッカー続けてきたの？」

「もう十二年だな」

「好きなんですネ、サッカー」

「どうかな。そんなこと考えなかった。何かスポーツで一番になる必要があったから」

宏章は少し皮肉っぽい口調で言った。

「スポーツに限らず、何でも一番にならないと許さないんだよ。俺の親は。子どもの頃から、俺には親が他人に見栄を張るための道具以外の意味があつたためしがない」

「そんなことないと思います。それに、御両親が揃つてるだけでも幸せでしょう」

「いつそいないほうがましな親もいるんだよ。世間体を取り繕うためだけの仮面夫婦。一緒にいるのになんであんなに憎みあつてるのか俺には理解不能だね。物心ついた時からうちの親はお互いに目を見て話したことがない。」

俺は家の中では透明人間のように親から無視され続けてた。母親が、俺がいるのを思い出すのは痛烈に言葉の暴力を振るいたい時だけ」

宏章は淡々とそう言うと、芝生を千切ってぱらぱらと手から零した。

優しく吹く風が緑の葉先の切れ端をふわりと散らす。陸人と同じ、かすかな芝生の匂い。

「子どもの頃は毎晩父親の怒鳴り声と母親の泣き声が聞こえてた。あいつらの望み通り、俺がなんでも一番になれば少しは夫婦仲がよくなるんじゃないかって、馬鹿な俺は必死に努力したさ。」

でも、俺が何をどうしようがあいつらにはまったく関係ない。お袋は理由をつけては朝から晩まで外出しっぱなし。親父がこないだ数ヶ月ぶりに俺に話しかけた言葉は、宏章、お前スポーツは今何やつてるんだ？ サッカーは続けてるのか？ 何にせよ、将来のため



に記録に残る成績だけは上げておけ。俺は相変わらずの透明人間だよ」

「華南のキャプテンだってことも知らないなんて……」

両親が揃っていれば幸せなのだと漠然と考えていた私は、驚いて言った。

華南に通うような家柄の子どもが不幸せなはずがないのに。

「今更何も親に期待なんかしてないのに、俺の将来だけはレールを敷きたがる。大学は政経学部で、その後は政治家を目指せとさ。」

俺は高校も理数科だし、大学も理工を目指してる。俺の希望なんか聞かれもしないけどな。あんな偽善者の政治家の後を継ぐなんてふざけ過ぎて笑えもしない」

ポーカーフエイスを崩さないまま宏章は話した。

華南のサッカー部は強いことでも有名だが、ハードな練習と徹底した管理でも有名だった。

あの華南のサッカー部でキャプテンまで勤めながら、レベルの高い理数科でトップクラスの成績を保つために勉強し続けるのは並大抵ではないだろう。

けれど彼は、おそらく今でもそれを投げ出していないのだ。

「面白くもない話だよな。本当に俺、さっきからいったい何をお前に話してるんだろうな。会ったばかりなのに。」

普段は何にも話さないからつまらない男で有名だよ。伶とは正反対だ」

「いいの。聞いているの嫌じゃない。私も話すの苦手だから霧島さんと一緒に。結城さんは相手の気持を察して話しかけてくれるもの

ね」

何故彼といることを自分が好むのかわかる気がした。

この少年は陸人に似ているのだ。

彼も陸人のように、悲しみや辛い思いを口に出さず、胸に閉じ込めてしまったのかもしれない。

私達はそれからずっと、黙ってフィールドの上で練習をする人達を見ていた。

遠くに見えるカラフルなジャージを着た選手は、身体を慣らしているだけなのか、談笑しながらのんびりと練習している。

宏章は芝生の中に紛れ込んだように咲いている小さな花を摘むと、私が芝生に突いている手の近くにそつと落とした。

私が小さな白い花を取り上げ、それを耳の後ろに挿すと、宏章は後ろに深く肘をついて足を伸ばした姿勢でずっと私の横顔を見ていた。

「花が好きか？ さつきも桜の話を嬉しそうにしてた」

「大好き。お花は綺麗なもの。囲まれていると自分も少し綺麗になったように思える」

宏章の叔母も花が好きだと言っていたっけ。

けれどあの人が私と同じ理由で花が好きな訳はない。

私は汚れているから、綺麗なものに触れていると、その時だけでも自分が浄化された様に思えるのだ。

「お前、自分を鏡で見たことない訳じゃないよな」

宏章が少し驚いて言った。

「鏡は嫌い……」

玖出も、鏡を見ることを好まなかったとぼんやり思い出す。

私は膝を見ながら小さな声でそう言つと、顔を上げて宏章に目を向けた。

あの人の病室には面会謝絶の札がかかっていたはずだ。

「ねえ、霧島さん、今日はあの人に出会ってきたの？」

宏章は表情を曇らせた。

「いや。どうしても顔を合わせる勇気がない」

「でも、あの人は……」

顔を合わせても宏章だとわかるだろうか。

最後に見かけたときでさえ、現実のことはもう何もわからないように見えた。

「ああなる前に酷い言葉であの人を傷つけた。痛み止めが切れた時には時々ふと正氣に戻るんだよ。昔のできごとを少し口にしたりする。俺を見てその時のことを思い出してしまったらと思うと……」

それから彼は起き上がり、足を腕で抱えると、病院の渡り廊下で初めて彼を見た時と同じ、あの苦しい表情でうつむいた。

「何を言ってしまったの？」

宏章はしばらく黙っていたが、ようやく言葉を口にした。

「売女つて。お前は汚い女だつて罵ったんだよ……」

私はただ宏章を見つめていた。

人は苦しみを口に出すことで少しでも救われるのを知っている。

「あの人が好きだった。子どもの頃からあの人だけが俺に心から優しく接してくれたんだ。」

年の差なんかどうでもよかった。血の繋がった叔母だつてわかつていても、気持が抑えられなくて……。

あの人の家族が事故にあつて亡くなった時、葬式の夜に男と抱き合っている姿を見てしまった。頭に血が上つて、何も考えられなくなつて。

あの人を引きずつて無理やりベッドに押し倒した。今まであれほど優しく接してくれていたのに、俺を激しく拒絶する。

俺には甥という立場を越えた、特別な気持ちを持つてくれているような気がしてた。実の叔母だから、俺はこの先もあの人を抱くことができないって当たり前前の事実を突きつけられて、嫉妬で心が荒れ狂つた。他の男には許してるんだ。

泣きながら抵抗されたショックで、気がついたら思いつく限りの酷い言葉で罵つてた。お前は どうせ誰にでもやらせる女だろ。家族の葬式の夜に男と抱き合つてくるくらいの汚い女だからなつて……」

宏章は膝の上で組んだ両手に顔を伏せた。

「あの時の表情が忘れられない。あれほど傷ついた表情を見たことがない。あれからすぐに発病したんだ。きっと俺があんなことを言つたから……」

「霧島さん……」

思わず宏章の背に手を触れていた。

家族に見放された絶望の中で、実の叔母を愛してしまった少年。

思い切つて伸ばした手を振り払われた苦しみ、私には誰よりもわかる。

自分が傷つけてしまった最愛の人が病魔に苦しむ姿を見、命を終えようとする姿を見ていなければならぬ辛さはどれ程のものだろう。

宏章を抱きしめることしかできなかった。  
頬を伝わる私の涙が宏章の肩に落ち、彼のシャツを濡らした。

「蔵木さん、さっきあなたにまたいつもの男の人から電話があったけど、取り次がなくてよかったのよね？ どちらにせよ、七時以降の私用電話は緊急の用以外は受け取らない決まりだから」

夕食の時、ほとんど会話もなく静まった食堂で、少女と小さな子ども達が座る方のテーブルにいた寺田がコーヒーを飲みながら言った。

今日は男性職員が休みで、園長は研究会に出席といういつもの理由で不在だった。

寺田がこの手の話を持ち出すのは、あまり自分の意見を言わない新人の職員しかいない時だけだ。

職員の間でも、常に何か派閥や抗争があるようだった。

寺田の言葉に、隣のテーブルにいる川崎が顔を上げ、私を見たのがわかる。

他の年長者達は、川崎と目を合わせて言いがかりをつけられないように、下を向いてひたすら食事を取っていた。

川崎がここに帰ってきたのは久々だ。何をしているのかはわからなかったが、あれ程私にしつこくまつわりついてきていた学校の教師が、まったく言い寄ってこなくなったのはありがたかった。

執拗に恐喝を繰り返しているのかもしれないが、あの教師の酷い行為を考えるととても同情はできない。

私はその頃高校進学を完全に諦めていたので、卑劣なやり方で脅されさえしなければ、教師が私の成績評価をどのように付けようと関係はなかったのだ。

「言うまでもないけど、あなたたち皆にもういちど念を押しておくわね」

彼女は胃腸の不良を理由に私達と同じ食事は取らず、いつも別室で他の食事を食べるので、この時間にはこうして特別に入れた香りの強いコーヒーを飲むのが習慣だ。

「ここには六歳から十七歳まで、全部で二十五人が暮らしていますから、当然、団体生活のルールがあります。年長者は年少者のお手本になる生活態度を示す必要があるのです。

自分の年齢で、今一番何が必要かを考えなさい。あなた達が浅はかな考えで今欲しがっているものは、大人になれば嫌でも手に入るのです」

寺田は暗記している文章を朗読するように一息でそう言った後、刺すような視線を真っ直ぐ私に投げかけた。

「特に年齢不相応の男女交際は感心しません。規律の乱れはほとんどそこからくるのですからね。他の子ども達の風紀を乱す行動を取った場合は、きちんと将来を話し合う場を設けます。わかっていますね？ 蔵木さん」

「はい」

私はそう答え、痛いほど感じている川崎の視線から逃れるように食事の皿に目を落とした。

あの日、私と宏章は彼の家で午後を過ごした。



宏章の家は高級住宅街の広い敷地に立つ、風格のある家だった。まるで一部屋かと思うほど広い玄関に足を踏み入れた時は、豪華さに圧倒されてしまい、宏章に手を引かれなければ逃げ出してしまったかもしれないと思うほどだった。

年代ものの見事な細工の家具や高価な調度品も素晴らしく、渡り廊下から見える美しい庭も完璧に手入れが行き届いていた。

いくら華南に通う生徒でも、これ程の家に住んでいる人はそうそういるとは思えない。

彼はおそらく、特に選ばれた家柄の少年なのだろう。

家には午前中に家政婦が来るだけで、多忙な両親はいつもほとんどいないのだと宏章は言った。

広いダイニングで家政婦が夕食用に作り置いてくれるのだという食事で昼食をとった。

「テーブルが広すぎてメガホン使わないとお話ができないくらいね」

複雑な細工が施され、顔が映るほど磨きこまれた大きなテーブルを挟んで前に座る宏章に、私はそう冗談を言って笑った。

「なんだか落ち着かない。隣の部屋にあった小さなテーブルで食べるのではだめ？」

さっき見た隣の部屋は家政婦さんが休む場所で、こじんまりとしたオークの丸テーブルに椅子が二つ付いていた。

「ああ、人がいないのに広すぎるだろ？ この家」

宏章がそう言ってうんざりしたように肩をすくめ、皿を持って立ち上がった。

「その案、いいな。移動しよう」

小さなテーブルを挟み、私達は隠れ家で遊ぶ子どものように楽しみながらおいしい料理をほおばった。

少し手を伸ばせば触れることができる程近くに宏章がいる。

少年とこんなに近くにいても緊張しないのが不思議だった。

宏章はテーブルの上に行儀悪く片肘を突き、手に顎を乗せてさつきからずっと私を見ている。

「お前さ……」

宏章があたしを見ながら独り言のように言う。

「お前みたいに綺麗な顔、華南でも見たことがない。年下だけど、すぐく、なんていうか。俺、一学年下の女子でもガキくさくて今まで興味なかったんだけど。ほんとに、マジでお前って」

宏章はそこで口をつぐんだ。

何度顔を上げてても目が合うから、しまいにおかしくて笑い出してしまった。

「霧島さん、食べないとまた冷めちゃうわ。温めなおしたばかりなのに」

宏章は少し照れたように笑った。

「これが旨いなんて気がつかなかったよ。温める事さえどうでもよくなってて、いつも冷たい料理を適当に食べてたから」

宏章の言葉に私も笑って答えた。

「贅沢よ。私、こんなに手の込んだお料理今まで食べたことがないわ」

「こっちでこうして食べるのはいいな。こうして誰かと食べるとう

まいもんなんだって驚いてるよ。子どもの頃から飯はいつもほとんど一人だったから。お前、料理は得意？」

「全然だめ。最低だと思うわ」

私は少し赤くなった。

「ちゃんとした食事を作る機会がなかったの。こういうの、特別な学校で習うの？　こんなふうに上手に作れるようになりたいな」

たわいのないことだったが、自分がこの先何かをしてみたいと思い、口に出したことに驚いていた。

そう、いつかちゃんと料理を習えたらどんなに楽しいだろう。

「学校なんか行かなくなつてすぐに上手くなりそうだけだな。なんかそんな気がする。もし何か作れるようになったら俺に食わせてくれよ」

宏章はそう言つて私を見た。

今の彼は厳しい表情の時とは別人のように見える。

彼が私から目を離す様子がないので、私は顔を赤くしたまま頷いた。

「できたらお礼にそうしたいけど、たぶんだめかも。練習する場所がないのよ。施設には食堂があるだけで、私達が台所に立つことはないから」

「ここに来て練習したらいい。多分、何でもそろってるよ。クリスマスはどう？　ここで」

言ってから宏章は言葉を区切った。

「ごめん。勝手に話を進めてるな。俺の悪い癖だ。お前はその、何か予定がある？　というか、誰かと」

最後の言葉を言う時、少しだけ緊張した顔をした。  
何か甘酸っぱい感情が胸に湧き上がる。

「ううん。予定はないわ。今まで一緒にクリスマスを過ごしたことがあるのは陸人だけよ。でも、今年は陸人も試合が入っているし、合宿もあるから」

「今まで誰とも？　じゃあ」

宏章の顔がぱつと輝いた。

「ごめんなさい。施設から出られないの。平日だもの。たとえ休日でも、許可がないとお休みも外には出られないのよ。特に女子には厳しい寮なの」

「でも、事前の許可があればいいんだろ？　俺と」

「だめなの」

宏章が勢い込んで言いかけた言葉を押しとどめた。  
これ以上彼に近づいてはいけない。  
肩を落とした宏章を見て言った。

「でもいつか料理が上手になったら、きっと霧島さんに食べてもらうわ。約束する」

「別に、上手じゃなくてもいい」

宏章が呟いた。

日当たりのいい居間の低い出窓にクッションをたくさん置いて二人で埋もれるように座り、私達はたわいない話をしながら午後そこで過ごした。

日差しがどんどん傾いていき、差し込む光の色がオレンジ色に変わる頃、私は立ち上がると言った。

「楽しかった。食事までいただいてしまっただけありがとうございました。そろそろ帰らないと」

私の前に立ってしばらく黙っていた彼が、思い切ったように私を見た。

「愛美、これからまた二人で会わないか？ お前といるとなんか落ちつくんだ」

私は彼を見上げ、横に首を振った。

「いいえ。もうお会いすることはできません。霧島さんも理由はわかるはずですよ」

反論しかけた宏章の言葉を最後まで聞かないうちにもう一度首を振って、鞆を手取る。

送るといった宏章の申し出を断り、私はその大きな家を後にした。宏章といると心が落ち着いたが、住む世界が違いすぎる。

私と一緒にいるだけでも、彼の世界に属する人達は眉をひそめるだろう。

夕暮れの血のような朱は、いつも私に自分が何なのかということ  
を思い出させた。

その夜、施設に電話をかけて来た宏章の事を寺田に問い詰められた時、彼が誰であるかを始めて知った。

「衆院議員の霧島宏之の息子じゃないの」

沈黙した後で寺田は言った。

声がヒステリックに震えている。

「あなた、彼が有名な旧家の息子だって知ってるの？ 議員の中でもトップクラスの資産家じゃない。あちらのおうちの方はあなたのことを御存知なの？」

「いいえ」

私は驚いて言った。

宏章は代々続く有名な政治家一族の一人息子だった。

その家柄と際立った容姿のためにマスコミが注目し、何度も週刊誌が写真を掲載していたらしく、寺田は彼の顔をはつきり知っていた。

ほとんどテレビを見たことも、まして週刊誌を立ち読みしたこともない私が知るはずもない。

「彼の家のことは知りませんでした。でも、ご心配いただくような関係ではありませんし、もうお会いすることもあります」

「そう。では電話も一切取り次ぎませんよ。いいわね」



まだ怒りの目を向けながら、勝ち誇ったように寺田が言った。

そのまま十日が過ぎている。

寺田が「いつもの男の人」と言ったところを見ると、宏章はあれからも何回か電話をくれていたのだろうか。

コーヒーを飲み干した寺田が席を立ち、食事の時間が終わると、川崎が私に近寄ってきて肩に触れると低い声で言った。

「後で部屋に来いよ。あれ以来御無沙汰だからな」

他の少年や少女が押し黙ったまま横を通り過ぎてそれぞれの棟へと出て行き、殺風景な食堂は二人を残して空っぽになった。

「無理よ。今日も見回りは寺田先生なの。自分のベッドにいないと大変なことになる」

私は目を合わせないまま小声で囁いた。

「俺に抱かれないのは男ができたからだなんて言わねえよな。俺の女に手を出したらたとえ誰だろうと探し出して落とし前はきっちりつけるぜ」

川崎が、威嚇するようにゆっくりと言う。

私は顔を上げ、真っ直ぐに川崎を見た。

「彼は全然関係ない。言いがかりで手を出すには相手の家が強すぎるってことだけ忠告しておくわ。試す勇気があるならどうぞ」

そのまま横を通り過ぎようとした時、川崎が言った。

「お前の部屋を見せてもらったぜ」

驚いて振り返る。川崎が手に持っているのは、私が施設に入る前からずっと綴っている日記だった。

「返して！」

川崎から日記をとろうと手を伸ばしたが、そのまま腕を掴んで強引に引き寄せられた。

「お前、陸人が好きなんだな」

全身が硬直し、心臓がドクドクと激しく鳴り出す。

何か言い返そうとしたが言葉が出ない。

日記には、誰にも言えない陸人への想いを書いていた。

そして、クロスのあの秘密も。

人に知られてはならない苦しさを、日記に綴ることで紛らそうと  
していたのだ。

「ずっとおかしいと思ってたんだ。お前がなぜ玖出に抱かれなかつたのか、なんで陸人に知られるのをそんなに恐れてるのか。」

これを読んでやっとわかったよ。お前がやってきたことを知らないたくないのは、兄貴に対しての妹の気持ちじゃない。好きでたまらない男に自分がどれだけ汚れてるか知られるのが怖いからだ。

お前は陸人を男として見てる。あいつに抱かれないから他の男を拒むんだ」

「違う……!!」

私はやっとそれだけ言った。

身体が震えるのを抑えられない。

私は日記に陸人の名をはっきり記述していなかった。

川崎は張ったりで言っているのだ。

この男は恐喝のプロなのだから。

川崎は私を押さえつけたままニットを乱暴に捲くり上げ、胸元のクロスを引きずり出した。

残酷な笑みを浮かべながら私を見る。

「お前を初めて犯った男が掛けたのか。何度犯られた？ 数え切れないほか？ 憎い男に抱かれながら、感じ始めてたんだろ？ だから、他の男に抱かれてもわざと反応しなかったんだ。」

本当のお前の姿を、このクロスが全部見てきたんだよな。お前が今まで何をしてきたか。お前がどんな女だか」

私の目の前で鎖を引き掴み、クロスを舌でゆっくり舐めあげた。口から悲鳴が漏れそうになる。

これはお前の烙印だ。

母の恋人に犯されていた時の記憶が蘇り、身体が大きく震え始めた。

あれから何人も男に同じ卑劣な行為を繰り返されてきたのに、その最初の記憶はいつまでも恐怖の系で私を呪縛し続ける。

私を逃がさないように片腕で抱きながら身体を触り始めた川崎から逃げることもすらできない。

「俺に抱かれないと言え」

川崎が耳元で囁く。

私は必死で首を横に振った。

「嫌」

頬に焼け付くような痛みを感じた。

「言えよ！」

川崎が力づくで胸に指を食い込ませる。

彼の燃える目に焼き尽くされてしまいそうだ。

「あなたになんか抱かれたくない」

逆上した川崎が何度も私を殴りつけた。

口の中に血の味がし、目の前が暗くなる。  
助けて……誰か……。陸人……！

「畜生！」

言葉もなく震えているだけの私を、川崎は突然乱暴に突き放した。

「妹の目であいつを見ているんならこれは平気だよな？」

川崎は怒りで息を乱したまま床にうずくまる私を見た。

髪を掴んで顔を上向かせ、服の中に隠し持っていた写真を目の前に突き出す。

「調べたら随分いいところのお嬢様だ。華南のサッカー部のマネージャーだもんな。親が施設出の男との付き合いをどう思つか知りたいよな」

川崎の手にした写真には陸人が美しい少女と一緒に写っていた。

陸人の浅黒い肌と、少女の白い肌。

何をしているかは一目でわかる。

私はぎゅっと眼を閉じた。

「もっといい写りのもあるぜ」

「やめて！」

私はよろけながら立ち上がり、笑い始めた川崎から逃げるように自分の部屋に逃げ込んだ。

ドアを閉めて寄りかかるとそのまま崩れるようにずると床に座り込む。

「やめて……」

陸人と少女の写真が払っても払っても脳裏に蘇り、私は震える両手で顔を抑えた。

悲鳴を上げてしまわないように息を殺す。

陸人が誰かを好きになるのは当然のことだ。

ああして誰かを抱くのも。

それでも知りたくはなかった。

陸人はあの腕で、私ではない他の少女を、他の……。

自分でも押さえられないほどの強烈な嫉妬が炎のように燃え上がり、私の身体を焼き焦がした。

私は誰よりも陸人を愛している。

あの少女よりも、他の誰よりも。

それなのにこの想いを伝えることはできない。

陸人の肌に手を触れることすらできないのだ。

「愛美姉ちゃん……」

二段ベッドの上から優花がかぼそい声で私を呼んだ。

優花は昨日から少し微熱があり、夕食は少しおかゆを食べただけです。ずっとこの部屋のベッドに休んでいたのだ。

「愛美姉ちゃん、お腹が痛い」

答えるべきなのはわかっていた。

優花は私以外と口をきくことができないのだから。

「お姉ちゃん……」

優花の声を背中に聞きながら、私は放心したように部屋を出た。冷たい廊下を歩き、玄関の鍵を開ける。

陸人に会いたかった。

遠くからでも一目姿を見ることができれば。

ただ、それだけが心を支配していた。  
陸人に会いたい。

どうやってここまで来たのかはわからない。

私は夜のグラウンドに辿り着くと、フェンスにつかまり、部屋の窓から漏れる明かりでぼんやりと照らし出された無人のコートを見つめた。

堪えていた涙が頬を伝わる。

苦しさで、心が引きちぎれてしまいそうだった。

一番近くにいながら、決して手を触れることができない兄。

想いを口にすることすらかなわない相手。

私がこれほどに欲し、この先も決して見るこのできない陸人を、あの少女はやすやすと手に入れているのだ。

押し殺しても喉から声が漏れ、私は冷たいフェンスに額を付けたまま泣き出した。

「愛美……？　こんな時間にどうしてここに……」

後ろから声が聞こえる。

暗闇の中を振り返ると、涙で霞む目に背の高い少年の姿が見えた。

陸人……！

私は抱きつき、声を上げて泣き始めた。

おずおずと私に回した少年の手に、次第に力が籠って来るのがわかる。

「会いたかったの。せめて姿を見たくて……」

涙で言葉が続けられなかった。

少年はついに私を強く抱きしめ、頬を寄せた。  
微かに震えるため息を漏らす。

まるで私を抱くのを堪えているように。

「抱いて……」

私は少年の胸に顔をうずめ、シャツにしがみ付いて泣きじゃくりながら言った。

「抱いて欲しいの。お願い。一度でいい。どれだけ軽蔑されてもかまわない」

胸を焼き焦がす想いが、堰を切って溢れた。

私は汚れ切っているのだ。

これ以上落ちたところで何もなくなすものなどない。

「愛美。何があった？」

少年がうつむいていた私の顔を指で撫で、上を向かせる。



端正な顔立ちと印象的な目。

「霧島さん……！」

それは宏章だった。

私は知らずに華南のグラウンドに来ていたのだ。

陸人がここにいた頃、何度も様子を遠くから眺めに来ていた華南学院のコート。

驚いて身体を離そうとしたが、宏章の力強い腕から逃れることはできなかった。

「誰に抱かれないんだ。何をそれほど苦しんで……」

何も答えることができず、無力感でただ声もなく泣いていた。

「愛美」

宏章が反応のない私の頬に手を触れた。

顔を俯け、そつと唇を重ねる。

「俺じゃだめか？」

立ちつくしたまま、ただ宏章の腕に抱かれていた。

「あれからずっと再会を願ってた。本当の愛がどんなものだとか、正直言つて俺にはまだわからない。だけどあの日みたいに、お前と

近くにいられたらいいと思う。

もっと笑っているところを見たいんだ。こんなに辛そうな表情じゃないく」

宏章の目を見上げると、彼は私を強く抱きしめた。

「俺はお前を泣かせないから……」

そう言つと宏章は、もう一度私に唇を重ねた。

今度は、深く。

それは少しずつ激しさを増していく。

彼の暖かな舌が私の唇を辛抱強く押し開き、舌を絡め取った時、私の身体の中に不思議な情熱の炎がともった。

今まで感じたことのない押し流されるような強い激情。

気がつくと夢中で舌を絡めていた。

息を切らしてようやく唇を離すと、上向いた私の頬から首筋を宏章のキスが伝う。

私を抱きしめる宏章の背中に強く腕を回した。

明かりを消した広い部室の大きなソファの上で、わたしと宏章は貪るように愛し合った。

目で見えるものではなく、身体で全てを知りたかった。

素肌で抱きしめあう感覚。

まるで今までの餓えを充たそうとでもするように、激しくお互いを求め合う。

わたしはその夜、自分が恐れから封印していたものを解きはなつた。

宏章の熱を帯びた身体に自分を預け、支配する感覚に身を任せる。

抑えきれず、喉から漏れる息。

熱く溶け合いながら、お互いに腕を回し、キスを交わす。  
汗ばむ肌と、押し寄せる波に振り返る身体。

宏章が私の身体を押さえ、より深く身体を沈めてくる。

高まりを堪えることはなかった。

私は宏章の腕の中で、初めて自分の身体を振るわせるほどの快感を知った。

幼い頃から見ていた母の姿が脳裏によぎる。

あいつの娘だから、その血が流れてるのさ。

母もこうして、自分の生を確認していたのだろうか。

私が今生きてここにいることを教えてくれる、宏章の身体。  
強い快感は、生と死の間にあるような気がした。

暗闇の中で私を抱く腕は宏章であり、口には出せない想いを持つ相手でもあった。

そして、宏章も。

彼は私を抱き、愛しい人を抱いたのだ。

「……あの人は亡くなったよ。昨日が葬儀だった」

夜の闇が白々と明けていく頃、私は宏章の腕に抱かれたまま、あの女性がまだ若い命を終えたことを知った。



部室の窓から差し込む微かな朝の光が私達を照らし始めた時、寝そべったまま片肘を突いて私をずっと見ていた宏章が聞いた。

「これは、お守り？」

その目が私の胸にかかるクロスを見ている。

早朝の空気は驚くほど冷たかったが、薄いブランケット一枚でも震えずにすむのは宏章の身体の熱さのせいだ。

あの華南のサッカー部の主力選手なのだから当然なのだろうが、背の高い彼の身体はすでに青年と違っていいほど完成されていて、激しいスポーツを続けているために傍にいただけで熱を感じる程暖かい。

「どうしてそう思うの……？」

その言葉にドキツとして、私を覗き込んでいる宏章の顔を見上げる。

宏章は片手で私の肌に触れ、そのまま指先をクロスに移すとゆっくりと撫でた。

「男物の重くて大きなシルバーのクロスは愛美に似合わない。つけている理由がお守りだったらいいと思ったからさ」

宏章がクロスを指で掴んだまま、私の反応を確認するように顔を見つめている。

聡明な黒い瞳が私の心に隠し持ったものを探り出してしまう気が

する。

「抱いてる間中ずっと気になってた。これをつけている愛美は他の誰かのもののように見える」

そんなことを言われたのは初めてだった。

まるでこのクロスの秘密を知られているようで、知らずに身体が緊張する。

「俺が外していい？」

宏章が私の目を間近から見つめて言った。

自分では決して外せないクロスを彼が今外してくれると言っているのだ。

「もう行かないと」

私は長い髪で自分の表情を隠すように起き上がると、宏章の腕を外した。

クロスを外すことが恐ろしかった。

外してはいけないとあの男は言った。

宏章から離れた途端に冷たい空気が私の身体を取り巻く。

宏章は同じ姿勢で寝転んだまましばらく黙っていたが、やがて起き上がると言った。

「ロッカーから俺のジャンパー持ってくるよ。愛美が着ていた服じゃあ寒そうだ」

薄いニットとスカートだけで出て来ていた私に、身支度を終えた

宏章が華南の紋章が付いた大きな白いジャンパーを着せ掛けてくれた。

「きっちり閉めたほうが暖かいだろ」

宏章は胸まで私が上げたジッパーを、さらに首元まで引き上げた。クロスは宏章のジャンパーに覆われて姿を消した。

夜が明けたばかりの華南学院の敷地内には人影がなく、辺りはひっそりと静まっている。

グレーのトーンの朝の光が並木の紅葉を照らす中を、宏章と手を繋いで歩いた。

「グラウンドが気になる？」

宏章に言われて自分がグラウンドの中に目をやっていた事に気がついた。

陸人はいつもここでボールを蹴っていた。

「うっん」

私は慌てて首を振り、上手く言葉を繋げなくなって沈黙した。私を見つめていた宏章が、硬い表情で唇を結び、私の手を強く握る。

彼は足を速め、私達はそのまま無言でコート横を通り過ぎた。

広い構内の周りを張り巡らした高い煉瓦の塀に通用門がある。それを押して出たところにバス停があった。

コートの横からここに着くまで無言だった宏章が急に足を止め、

私をいきなり抱きしめると強くキスをした。

いつまでも終わらない長いキス。

私たちの横を犬の散歩をしている人が歩調を緩めて通り過ぎて行くのがわかる。

「……このまま二人でどこかへ行こうか。誰も俺達を知らない遠いところに」

ようやく私の唇を開放して宏章がそう言い、答えるまもなくすぐにキスを繰り返す。

私は宏章に抱きしめられながら、それもいいかもしれないとぼんやり考えた。

誰も知らないところへ行ったら、何もかも忘れてもう一度新しい気持ちでやり直せるだろうか。

朝まで愛し合った余韻で身体も頭もまだだるく、現実と思うほど辛いのだとすら思っていた。

一人では逃れられないものからも、二人なら立ち向かっていける気がした。

宏章の身体は温かく、キスをしながら彼が頬に触れるその指先から、彼の体温が私の身体に流れてくるようだ。

そこで何も起こらなければ、おそらく私達は行く先のわからないバスを乗り継ぎ、自分達を縛りつけているものから逃げ出していたのかもしれない。

車が止まった気配は感じていた。

連続でカメラのシャッターを切る音で、初めて自分たちが撮られている事に気がついた。



驚いて顔を上げると、目の前の道端に止めた車の前に、無精ひげで目つきの悪い中年男が二人立っていた。

眼鏡を掛けたもう片方の男はまださかんにシャッターを切っている。

何が起こったのか理解できず、宏章の横顔を見上げた。

怒りで顔色を変えた宏章が私を離して立ち上がり、男達の前につかかと歩み寄る。

「何の権利があつて写真を撮った」

二人の男よりもずっと背の高い宏章は、怒りに燃える目で二人を見下ろした。

「カメラをよこせ」

「何の権利つて、君が霧島家の大切な御曹司だから、興味がある人たちに情報を提供する仕事をしているだけさ。こんな朝早くから、俺達だつてお邪魔はしたくないんだけどね。フリーのライターやカメラマンには厳しい御時世だね。」

君の親父さん絡みのニュースはこの不景気の中、そこそこの値段で売れるんだよ。特に大人気の容姿端麗な息子の自堕落な生活はスキャンダル好きの主婦に歓迎される」

それから男は私を見て言った。

「おやおや。これはまた特別に可愛らしいお嬢さんだ。御曹司の嫁さん候補かただの慰み者か。どちらにせよ、美少女って肩書きは世

間が大好きな言葉なんだよ。評判のよくない施設にいる奔放な女の子だって、その子の後を追って情報をくれた若者は言っただけだね」

川崎が情報を買ったのだ。

止める間もなく宏章は男に掴みかかっていた。

「今の言葉を取り消せ！」

宏章が力任せに男の胸倉を掴んだ。

「怒るってことは、本当なんだね。君もほんのさっきまでいいことしてたんだろ？ 羨ましいよ。俺にもその子を紹介してもらえるかな」

「ふざけるな！ 糞野郎！」

「やめて！ 宏章さん！」

男に殴りかかりそんな宏章に駆け寄り、必死で身体を押さえた。もう一人がさらにシャッターを切っている。わざと挑発したのだ。

「なぜ俺をつけ回す！ どれだけ撮ったら気が済むんだ！」

乱闘が起こりそんな気配に、犬の散歩で通りがかった老婦人が怯えて悲鳴を上げた。

チワワがけたたましく吠える。

「通報されるぞ、霧島くん」

その声で一瞬力を抜いた宏章の拘束から男は身をよじって逃れ、すでにエンジンをかけて待っているカメラマンの車に乗り込んだ。

「カメラをよこせて言ってるだろ！」

男を追いかけて、ドアから引きずり下ろそうとしている宏章に私は哀願した。

「もうやめて、宏章さん！　お願い」

車が走り去った後、怒りが収まらず、まだ肩で息をしている宏章の腕を取った。

「落ち着いて。ね？」

「絶対何かある。ここずっとこんな写真を撮られてるんだ。なのにどこにも奴らが取った写真も記事も出ない」

宏章はイラついたように車が走り去った方向を見た。

「未成年だもの。そんなに酷い載せ方をされるはずがない。私が言われたことなら平気。もし写真が出てご両親に問い詰められたら、名前も知らない子に誘われたって言えばいいわ」

「愛美」

宏章が強い視線で私を見た。

「俺をそこまでの屑野郎にしないでくれ。それじゃまるで遊びみたいだ。愛美のことをこれからも親に隠す気はないよ。俺が誰と付き

合おうとあいつらに何の関係があるんだ」

「関係あるに決まってる。付き合うなんて無理よ。だって私は」

「関係ない。まさか二度と俺と会わないって言うつもりはないよね？」

宏章は黙ったままの私を見て、強い口調で続けた。

「それとも俺は一晩だけの誰かの身代わりで終わりかよ！」

宏章はそこで沈黙し、何も言えずに立っている私から目を逸らしてようやく言った。

「大通りでタクシーを拾って、それで帰ろう。日向園まで送ってくよ」

タクシーの後部座席に身体を持たせた宏章は、厳しい表情で前を見つめたまま一言も話さなかった。

私は宏章に触れないよう窓側に身体をつけるように座り、窓の外を流れる街の景色をずっと見ていた。

宏章は一時的な情熱に流されているのだ。

私達が付き合うことなどできるわけがない。

二人で遠くに行けるはずはなかったのだ。

私がいなくなっても誰も気にはしないが、宏章が姿を消すなどということは不可能だ。

誰もが彼を見ている。

彼はそういう世界に生まれている特別な人なのだ。

施設の近くの道に車が止まると、私に続いて宏章がタクシーを降りてきたので驚いた。

「宏章さん」

「俺が何度電話しても取り次がなかった意地悪ババアに朝帰りの理由を説明する奴が必要だろ」

「でも」

「何か文句を言い出すようなら親父の名前をちらつかせるよ。クソ親父だけど教育関係に力がある」

宏章は私の手を取り、そのまま歩き出した。

「手を繋いで入るなんてだめよ。お願い。離して、宏章さん……」

だが私の怯えは、もっと恐ろしい事態で全て吹き飛ばされた。

道の角を曲がると施設の前に救急車が止まり、施設の子どもたちが遠巻きに集まっているのが見えた。

胸騒ぎで全身が栗立つ。

優花。

優花はあれからどうしただろう。

私は施設へと走り出した。

「優花ちゃん！」

悪い予感はあるが当たっていた。

担架に乗せられた小さな少女の姿を見、恐怖で息を飲み込む。

優花の小さな顔は青黒く変色していて、息すらしていないように見えた。

「蔵木さん！ あなたどこ行ってたの！ ほんのさっきこんな状態だったってわかったのよ。この子が誰にも痛みを訴えないから」

寺田が真つ青な顔で取り乱している。

「どうしたの。優花ちゃん！」

動揺して何も考えられず、私は担架に取り縋った。

「愛美姉ちゃん」

優花が泣きながら私に囁いた。

「お腹が痛いよ。痛いよ……」

激痛のためか、優花はそう言ったきり眉をひそめ、きつく目を閉じた。

「ほら！ どいて！ 一刻を争うんだ！」

救命士が無線で連絡を取り合っている。

「急患です。年齢は六歳。強い腹痛と嘔吐。濃い茶色の吐しゃ物です」

日曜日の早朝に受け付けてくれる病院を探すのが困難な様子だった。

なかなか了承を得られない。

宏章がふらつきそうになった私を支えながら結城医師の病院の名前を言う。

「急患は必ず受けていますよね？」

救命士が頷き、すぐに連絡が取られた。

「少し遠いが、その辺の医者をつらい回しされるよりあそこへ行つたほうが確実だ」

宏章が私にそう言う声が遠く聞こえた。

不安に高鳴る心臓が、鼓膜に響く。

優花が私にお腹が痛いと言ったのは何時だっただろう。時間を数えてぞっとした。

私は何という浅はかだったのか。

苦しむ優花を放置してしまった。

私の他には誰にも話かけることができないこの子を。

「私も一緒に行きます。この子は私にしか口が聞けないんです」

寺田が頭を抱えてぶつぶつ言っている。

「だからこんな仕事は嫌だったのよ！ 評判が悪くても給料は変わらないし、園長は当直もしないし。断ればよかった。この子がもし死んでしまったら、管理責任はいつたい誰が」

「今、口に出す言葉じゃないでしょう」

宏章が寺田をきつく睨みつけた。

こういうときの彼の表情はぞっとするほど冷たい。

「あなたの事情は後回しにしてください。本音をわざわざここで晒すつもりですか？ どんな発言をしたか全部俺が覚えておきますよ」

氷のような目で自分を見ている端整な顔の少年が誰かに気が付き、



寺田は沈黙した。

「連絡がきました。病院に向かいますから付き添いの方は乗って下さい」

「愛美、乗って」

宏章に背中を押されて救急車に乗り込んだ。

「結城先生に連絡しておく。あとで追うよ。しっかりしろ。この子が話せるのはお前だけなんだろう？」

私は震えながら、宏章の顔を見て頷いた。

ドアが閉まり、サイレンを鳴らして車が走り出す。

まるで時間が止まってしまったかのように救急車がのろのろ進んでいる気がした。

毛布の中の優花の小さな手を取り、必死で祈り続けた。

この子は何も悪いことはしていません。

どうか助けて下さい。どうか……。

病院の急患用の出入り口から、優花を乗せた担架が運び込まれる。

急患用の診療室に、まだ私服のままの結城医師が急いでドアを押して入ってきた。

真っ直ぐ優花に歩み寄ると、顔を見るなり厳しい表情で眉をひそめる。

看護師が優花の着ているトレーナーを手際よく押し上げると、すぐに触診をした。

「いつから腹痛を訴えてる？」

優花の傍で立ちすくんでいる私を見て医師が真剣な声で聞いた。

「昨日、夜の八時頃にはお腹が痛いと言っていました。二日くらい前から微熱があつて、食欲がないのも風邪のせいだと思っていたんです。一晚中私、出かけていて……。救急車が来ているのを見つけたのが今朝の六時前です」

「十時間以上か」

「我慢強い子なんです。もしかして、もっと前から状態がよくなかったのかもしれない」

医師が少しお腹に触れただけで優花は痛がつて泣き声をあげた。素人目にもはつきりわかるほど、お腹は異様な膨れ方をしている。

「優花ちゃん、ごめんね。痛いでしょう」

あまりの痛々しさと自責の念で涙が込み上げ、目の前が霞む。  
代われるものなら代わりたかった。  
この痛みは私が受けるべきものだ。

「すぐにオペの準備をしろ」

時計を確かめながら看護師に指示を出す。

「その間にこの子のCTを取ってくれ。すぐだ」

「わかりました」

看護師が優花の乗った移動ベッドを押して大急ぎで急患の診察室を出て行った。

「先生、優花ちゃんは……」

医師は私を見ると急いで言った。

「決していい状態とは言えないが、全力を尽くすよ。知らせないといけない身内の方にすぐ連絡してください」

後の言葉は私の隣で立ち尽くしたままの寺田に向けたものだが、  
肝心の寺田酷く取り乱したままだ。

「まさか死んだりしませんよね？ 先生。園長不在の留守を預かっていたんです。もしこの子が死ぬ事にでもなったら私は」

寺田の言葉に無言のまま厳しい一瞥をくれると、医師は入ってきて

た入り口のドアを押し、すぐに歩いて出て行った。

「優花ちゃんのお母さんに連絡は取れますか？」

私は待合室側の入り口の傍の丸椅子に、脱力して腰を下ろした寺田に聞いた。

「多分無理だと思うわ」

寺田が投げやりな様子で答える。

「登録してある連絡先にはいくら連絡しても通じないのよ。携帯だったから、新しい番号に代えたまま放つてあるのね」

「住んでいる所が変わらなければ、連絡はつきますよね？」

「帰って調べてみるわ。園長からすぐに戻ると連絡があったから、それまで私はここに来れないかも知れないけど。当直の職員が今日は一人しかいないのよ。他の職員が出勤できるか連絡取らなくちゃならないし」

「お願いします」

手術はすぐに始まり、寺田は優花の母に連絡を取るために施設に引き返した。

私は手術室の前の長椅子に腰掛け、赤くともる手術中のランプを見ながら必死で祈っていた。

結城医師の緊迫した表情が頭をかすめ、恐ろしさに身体が強張る。優花の苦しみは相当のものだったに違いない。

なのに私は現実の辛さから逃れるために、その間ずっとああして宏章に抱かれていたのだ。

服を握り締め、うつむいた。

「愛美……」

どのくらい時間がたったのか、顔を上げると真剣な表情をした宏章がいた。

「あの子の容態は？」

「よくないの」

私は隣に座った宏章によやくそれだけ言った。  
痛みに顔をゆがめて泣いていた優花を思い出し、涙が滲む。

「あの子は私と同室だったの。施設を出る前にお腹が痛いって訴えられていたのに、自分のことで頭が一杯で、様子を見てあげずに部屋を一晚空けてしまった。あんなに苦しい思いをさせて、その上もし……」

恐ろしくてその先を続けることができない。

「それ程重い病気だなんて判断できなくてもしかたないだろ。体調を崩し始めているのがわかっていながら、様子を見ずに放っておいた職員がまず攻められるべきだ。お前にしか話ができない子だったらなおさらだよ」

宏章が私の肩を抱いた途端に、身体がビクツと震える。

その腕から逃れるように身体を離れた。

宏章の手ですら、今の私には怖かった。

私の身体には、何か恐ろしいものが潜んでいるような気がした。

「俺達のこととあの子の病気は関係ない。たまたまあの子に不運が重なったんだ。お前のせいじゃない」

「昨日の夜、部屋を空けてたことだけじゃないの」

私は震える両手で顔を覆った。

「あの子が痛みを訴えられなかった原因は私なのよ。他の誰かと話ができるように接してあげてれば……。あの子の味方は施設の中で私だけなんだって、そう思ってるのがわかってて否定しなかった。優花ちゃんが私にしか話ができないのを、そのままにしておきたかったの。誰かに特別に必要とされているのが嬉しかった。私が生まれてきたことにも意味があるんだって思えたから……」

後悔で涙が止まらなかった。

拒絶されずに愛することが出来る相手をこんなに欲していたのだと、初めて気がついた。

優花は愛に飢えていて、私は誰かを愛したかったのだ。

「愛美。責めるなら俺を責めろよ。俺がお前を帰さなかったんだ。たとえどんなに抵抗しても、絶対に朝まで帰さなかった。だからお前に落ち度はない」

何度も手術中のライトを見上げている私を、ついに抱き寄せて宏章は言った。

「そんなに思いつめたらお前のほうがどうにかなくなってしまふ。結城先生を信用しろよ。きっと上手くいくよ」

抱かれていると身体から力が抜けていく。

宏章は私の髪を撫で、囁いた。

「愛情を自分に向けたいと願うのは当たり前前の感情だろ。あの子だつてきつとお前に対してそう思ってたはずだ。

みんな同じなんだよ。誰にも無視され続けたら生きていけない。生まれたての赤ん坊ですら何もわからないのに笑ってみせるだろ？愛されるための本能がそうさせるんだって、叔母が生前そう言ってたことを覚えてる」

私は小さく頷くと、宏章にそのまま身体を預けた。

優花の母親の姿が見えないまま、手術は長時間に及んだ。

ようやく赤いランプが消え、手術室のドアが開く。

「優花ちゃん！」

はじかれるように立ち上がり、看護師が押すストレッチャーに乗せられて運び出された優花の小さな顔を覗き込む。

まるで息をしていないかのように、血の気がない肌色。

取り付けられたままの酸素マスクと細い腕に刺された点滴がなければ、生きていることすら信じられないほど痛々しい姿だった。

「先生……」

不安に駆られ、結城医師の顔を見ると、その表情は厳しいままだった。

思わしくない結果だったのだろうか。

優花はどうなってしまふのだろう。



動揺が激しく、握り締めた自分の手に爪が食い込んでいることに  
も気がつかないほどだった。

「あの子の身内はまだ来ないのか？」

「はい。寺田先生がおうちの方に連絡してくださると施設に帰った  
まま。お母さんの電話番号が変わっているんだそうです」

「そうか……」

「優花ちゃんの容態は悪いんですか？ 教えて下さい、先生」

医師は私のほうに向き直ると、真剣だが落ち着いた口調で言った。

「手術は成功してるよ。ただ、腸重積で壊死を起こしていた部分以  
外にも、いくつかポリープがあってね。

あの年頃の子の腸重積には他の病気が潜んでいることが多いんだ  
よ。切除しなくてはならない部分が予想以上に多かった。回復はあ  
の子の体力次第だ」

私は言葉を失った。

「そんなに酷かったなんて……」

「今見つからなければ、もっと酷いことになってたよ。だから自分  
を責めるんじゃない。わかったね？」

あの子はしばらく眠っているから、愛美はゆっくり身体を休ませ  
なさい。今にも倒れそうな顔色をしてるぞ」

「でも、優花ちゃんが目を覚ます時にいてあげたいんです」

「ここで今気を揉んでいてもどうにかなるわけじゃない。それより、また一人緊急の患者が増えたら俺が持たないよ。」

ああ、宏章、そんな目で見るな。俺はお前の大事な愛美を虐めてるんじゃないぞ」

「そんなつもりじゃ」

赤くなつた宏章を見ると、医師はようやく力を抜いた笑顔を見せた。

「まるで凶暴な用心棒だな。愛美を泣かせたら噛み付かれそうだな。心配なら愛美を送ってやってやれ。いいか？ まっすぐ送るんだぞ」

「施設にですか？」

宏章が私の手に指を絡ませ、きつく握っているのを見て、医師が頭を振って小さく笑う。

「主語を省いてるのにわざわざ聞き返すな。愛美が着てるお前のジヤンパーがよく似合うのは認めるが、未成年を前にいろいろ建前を言わなきゃならん大人の立場なんだよ。お前達がもう三年大人だったら喜んでからかってやりたいところだが、今の歳では二人で外泊には厳重注意だ。」

まあ、今日は二人とも疲れてる様だから目をつぶってやる。お前も帰ったらとにかく寝とけよ、宏章」

宏章のネームが入ったジャンパーを着ていたことを思い出し、赤面した。

繋いでる手を離すタイミングがつかめない。

宏章は私の手を離す様子もなかった。

「俺は全然大丈夫です」

「自分の体力を過信するな。ここずっとろくに寝てないのに部活に出てたろ。そんなに酷い顔を見たのはお前が生まれてから初めてだ。あの子が目覚めたら誰かに連絡させるから、心配しないでいいよ、愛美。じゃあ、あとで」

医師が歩き去ったあと宏章の顔を改めて見ると、目の下につつすら影がある。

あの女性の葬儀は一昨日だったと言っていた。

ほんの数日前にこの病院で息を引き取ったのだ。

あのひとの最期に向き合って、毎日眠れずにいたのだろう。

辛い思いにずっと苦しんでいたのは宏章のほうだ。

結城先生に言われなければ、また優花の時と同じ過ちを繰り返すところだった。

宏章も陸人のように、自分の苦しみを人に見せることを嫌うのだ。

「大丈夫？　ここずっと眠ってないって……。それなのに、朝まで

一緒にいてくれたのね。ごめんなさい。私、自分のことばかり」

思わず宏章の頬に手を触れる。

「別に。寝不足くらいどうでもいい。俺の家に行こう。施設には戻せない」

「でも」

宏章がそう言って私の手を引いたまま歩き始めたとき、前方から聞きなれた声がした。

「愛美」

「陸人！」

廊下の向こうからこちらへ向かって歩いてくる背の高い影は陸人だった。

どうしてここに陸人がいるのだろう。

頭の中が一瞬真っ白になり、必死で自分を取り戻す。

私が一晩施設に戻らなかったことを知っているのだろうか。

宏章と朝まで過ごしていたことも？

「心配したよ、愛美。夜、副園長からお前が無断で出て行つたと電話が来て、一晩中探した」

陸人は私の着ているジャンパーを見、霧島と私が繋いでいる手に視線を走らせた。

「俺の妹から手を離せ、霧島」

陸人の声が強い怒りを含んでいる。

驚いて見上げると、陸人は燃えるような目で真っ直ぐに宏章を見据えていた。

いつも穏やかな陸人のこんな表情を見たことは、今までに一度もなかった。

「何でお前に指図されなきゃならない？」

宏章はそう言うと、陸人に挑戦するように私の肩を抱いた。

恐ろしくて陸人の表情を確かめることができない。

今の陸人は、触れた者を即座に焼き切ってしまうように見える。

兄の中にこれほど激しい気性が潜んでいたのだと始めて知り、衝撃を受けた。

「お前が連れ出したんだろう、霧島。愛美は今まで一度も無断で外泊したことはない。そうだな、愛美？」

落ちて着いた声は今まで聞いたことがないほど恐ろしく、私ですら身体が震えてしまう。

これは本当に陸人なのだろうか。

「違うの、陸人。私が……。私が華南のグラウンドに……」

どうやって説明したらいいのだろう。

陸人を狂おしく求め、さまよってたどり着いたのだ。

真実を知られてはならない。

いつものように兄を慕う妹の振りをしなければ。

「ただ、グラウンドに行ってみたくて……」

遮るように宏章が言った。

「お前の妹だろうが、付き合いを指図される理由はない。愛美にだって自分の意思で行動する権利はあるはずだ。それとも、愛美はお前のものだともいうのか」

「俺のものじゃない。だが、俺の妹がお前にもて遊ばれる理由もない。愛美、来いよ。俺と一緒に帰ろう」

陸人が私の腕を強く掴む。焼け付いてしまいそうな程強く。途端に宏章が私の肩に回した腕にも力が籠った。

「離せよ、蔵木。結城先生から愛美を送って行けと言われてる」

「お前に愛美を預けるつもりはない。愛美、俺と帰るな？」

「どこへ返すつもりだ。施設に行くのか」

「お前と二人きりにするくらいなら、施設の方がましだ」

陸人と言い争う宏章の表情がどんどん冷たくなって来るのがわかる。

今の彼はさっきまでの宏章と別人のようだ。

氷のように詰めたい表情で、端整な顔に薄く笑いすら浮かべながら、宏章はわざとゆっくり陸人に言った。

「いまさら二人きりになるのを止めてどうするんだ。ほんの数時間前まで一緒にいたんだぜ。一晩中抱き合って」

「ふざけるな！」

あつという間に陸人が宏章に掴みかかり、胸ぐら引き掴んで強く壁に押し付ける。

挑発するように宏章が続けた。

「お前もよく知ってる部屋のあのソファだ。俺が求めるのと同じくらい、愛美も俺を求めてた」

「嘘をつけ！ 愛美がそんなことをするはずがない！」

燃える目で睨みつける陸人を、宏章は真っ直ぐに見返した。

「自分の妹は男を好きにならないとでも思ってるのか。誰かを好きになって苦しまないでも？ 自分の理想を愛美に押し付けるのはやめろ！」

「お前に愛美の何がわかる！」

「お前こそ、何もわかってないだろ！」

「やめて、陸人！ 宏章さん、お願い、もうそれ以上言わないで……」

殴り合いになりそうになった二人に取りすがった私の頬を、陸人が振り上げた手が擦った。

激痛で思わず手で頬を押さえる。

「愛美……」

陸人が驚いて私を見た。

「それでも施設に戻す気か」



宏章が力を落とした陸人の手を振り払って言った。

「愛美はずっと髪で頬を隠してた。結城先生もわかってたからあえて施設に戻せと言わなかったんだ。施設の誰かにやられたんだろ？  
愛美」

言葉をなくしてただ立ち尽くす。

川崎に殴られた痕だった。

陸人が怒りで自分の手をきつく握り締めるのが見えた。

「愛美、誰にやられた？」

陸人の言葉に、私はただ首を振った。

「たいしたことじゃないの。ちょっとした諍いに巻き込まれたのよ。報復しようなんて考えないで、陸人。もう少しの辛抱だもの。今何か事件を起こしたら、せつかく今まで耐えてきたものまで無になってしまう」

陸人のサッカーを絶対に犠牲にはしたくない。

宏章は黙ったままの陸人に言った。

「もて遊んでいるつもりはない。お前の妹だからってわざと手を出したわけでもない。愛美と、本気で付き合いたいと思ってる」

陸人が、宏章の真っ直ぐな視線から目をそらした。

自分を懸命に抑えようとしているのがわかる。

誰もいない病院の廊下に、宏章の声だけが静かに響いた。

「さつき施設を始めて見たよ。今日は職員が手薄なのだと聞いた。また同じことに巻き込まれるかも知れない。」

俺の家はここから近い。別の部屋で寝ると約束するから、愛美を早く休ませてやってくれ。酷い心労で疲れきってる。心配なら、お前もついて来ればいい」

陸人はしばらく黙っていたが、ようやく顔を上げて私に言った。

「愛美、お前は霧島と行きたいんだな？」

私の目を見つめる。

感情の波に激しく揺さぶられ、自分の気持ちがわからなかった。宏章に対する気持ちがいっただい何なのかも。

ただ、今は彼と一緒にいなければならぬ気がする。

私は頷いた。

「宏章さんと行くわ。ごめんなさい。陸人」

陸人の顔に浮かんだその表情。

この目を知っている。

母が陸人に施設に戻れと告げた、あの時の……。

宏章がいなければ、私は陸人に取りすがり、抱きしめていただろう。

私の肩に回された宏章の手が、まるで熱を持っているかのように熱く感じる。

「愛美」

宏章が低く囁いた。

「俺といてくれ」

見上げた宏章の横顔に胸を突かれた。

陸人と宏章は同じ傷で苦しんでいる。

彼らの孤独な魂はまるで合わせ鏡のようだった。

陸人が静かに言う。

「連れて行けよ。俺は戻らないとならないから。理由を言わずに寮を一晚抜けてきた。今日の練習には参加しないと特待生の立場が危うい」

霧島に頭を下げる。

「愛美を頼む。お前が本気なら、どうか愛美を守ってやってくれ」

「陸人……」

陸人は私のために一人になろうとしている。

「頭を上げろよ。別にお前のためにやるんじゃない。俺が持っているものを全部使って必ず愛美を守る」

宏章はそう言って私の手をしっかりと握った。

私が陸人に寄せる想いを宏章は知らないのだ。

そして、陸人も……。

「これだけは覚えておいてくれ。愛美を傷つけるようなことがあつ

たら絶対に許さない。絶対にだ」

陸人は去り際に、宏章を見つめてそう言った。  
それは脳裏に焼きつく程、強い眼差しだった。

母と陸人の父が言い争っている。

私と陸人はいつもの様に突然始まった諍いに所在をなくし、うつむいたまま砂を噛む様な食事を続けている。

不思議なことに目の前の陸人は成長した今の姿で、私は母が陸人に施設へ帰れと言い出さないと恐ろしさに身を竦めていた。

きつと彼らには私達の姿が見えないのだ。  
私達はここにいるのに。

誰かが言い争う声で目を覚ました。

宏章の家の客室に眠っていたのだと思い出し、身体を起こすと辺りはすでに暗い。

もう夜になったのではないかと驚き、サイドテーブルに置かれたライトをつけて時計を見ると五時半だった。

重厚な織りのカーテンが夕暮れの日差しを遮っているのだろう。

言い争う声は隣の部屋から聞こえているのだと気がついた。

女と男の声。

高くなったり、低くなったりするその独特な声の調子が、幼い頃から聞いていた母と男達の諍いの声に重なった

家人が帰って来ていたのだ。

私は慌ててベッドから降り、着ていた部屋着を脱いで自分の服に着替え始めた。

こんな姿でいるところを宏章の家の人に見つかる訳にはいかない。起きたら内線で二階にある自分の部屋に連絡してくれと宏章は言っていたが、このまますぐに家を出たほうがいいだろう。

宏章には後で結城先生から連絡してもらえばいい。

だんだん声が大きくなる隣の部屋を気にしながら身支度を終え、ベッド回りを元通りに直して静かにドアを押す。

廊下に足を踏み出すと、隣の部屋のお開いたドアから男の怒鳴り声が聞こえ、驚きに思わず足が止まる。

「いい加減にしろ！お前に愛人がいるとメディアが騒ぎ出してるぞ！揉み消しにも限度があるということを忘れるな。実の妹の葬儀にも顔を出さずに男と遊び歩いているとは、いったいどういいうつもりだ！」

「あなたの世間体を悪くして申し訳ないことね。私はあなたほど上手く隠し遂せないのよ。さすがにやり手の政治家ね。とても真似ができないわ」

宏章の父と母だった。

開け放った部屋の前を通らなくては玄関へ行けない。

どうしたらいいのか立ち竦んでいる私の耳に、二人が言い争う声が次々と飛び込んで来る。

「……どういう意味だ」

あの人の事を言っているのだ。

一昨日亡くなつた宏章の叔母。

胸騒ぎがした。

動悸が激しくなる。

「どつという意味かですつて？ あなたが一番御存知のはずよ」

背筋がぞつとするほど冷たい声。

宏章の父親が沈黙している。

「隠し通して来たとても思っているの？ 宏章はあなたがあの子に産ませた子どもだと、私が知らなかったとても？ 妹とあなたの関係は、十四年前からわかつていたのよ！」

「何を言つてるんだ！ 狂つたのか！」

「狂つてるのはあなたの方よ！」

まだ十八歳の妹に未婚のまま妊娠した子どもを養子に出すつもりだと打ち明けられた時、神様がもたらしてくれた子どもだと思つたわ。あなたも私が妊娠できない苦しみを見かねて実子として向かえることを承知してくれたのだと思つた。あんなにこの家の血を絶やさないことにこだわっていたあなたが私の妹の子どもを喜んで引き取ってくれたのは、あなたの、私への愛情からだと思ひもした。つた。

すぐに承知するはずよ。あなたの子どもだったんだもの。私は生まれて来た宏章を実の子の様に思つて丸三年育てたのよ。その間もあなた達の関係が続いていたとは知らずに」

「どこにそんな証拠がある」

「証拠？ どこにもないわ。あなたと妹がベッドの中で話している

のを聞いただけよ。ちょうどこの部屋の外で、小さい宏章を腕に抱いたまま」

「お前の作り話だ。馬鹿馬鹿しくて聞いてられない」

「私がどんな思いで宏章を見てきたかわかる？ 政治家として認められ始めたばかりだからまだ妻とは離婚はできないと、あなたは妹に言い聞かせてた。もともとスキャンダルを恐れて離婚しようと思ってもいなかった癖に、さすがに口が上手いわね。女性や子どもの擁護で票を集める政治家だけあるわ」

宏章の母親はヒステリックにくすくす笑い出した。

「妹があなたを愛しているならなおのこと、絶対に離婚はしないと決意したのよ。あの子が不治の病に掛かった時、どれ程溜飲が下がったことか」

自分が耳にしている言葉が信じられなかった。

宏章がどれ程愛情を求めても与えられなかった理由。



「お前がそう思い込んでいるならそれでいい。証拠はないんだ。あいつが死んだからと言って、これから離婚には応じないぞ。」

たとえお前が狂っていても、世間に対して俺の妻の役割だけは果たせ。お前も政治家の娘に生まれたのなら、その位はわかるだろう。お前の父親もそう望んでるはずだ」

知らずに後ずさりしていた。

陸上競技場で宏章が私に話したことを思い出す。

愛のない両親。

空気のような自分の存在。

母親から浴びせられる言葉の暴力。

彼が幼い頃から味わってきた苦しみは、あの時語った言葉以上のものだったに違いない。

沈黙の後、宏章の父親が廊下に足を踏み出し、半分開けたドアに手をかけたまま部屋の中を振り返った。

「子どもひとり産めない女が何を言っている。この家の血を絶やすのがどういふことかわかってるのか。」

一つだけ教えてやろう。お前の妹を俺に会わせたのはお前の父親だ。お前の実家は今でも安泰だ。お前の父親が年端もいかない妹を使って何を画策したのか、狂った頭でよく考えてみるんだな」

壁に何か固いものがぶつかり、大きな音を立てて飛び散った。

「あなたは人間の皮を被った獣よ！」

宏章の父親は力づくでドアを閉めると、壁に身を寄せていた私に気付かないまま廊下の反対側へ歩いていった。

宏章の面影のある後姿。閉じたドアから、宏章の母親の泣き声が聞こえる。

悲しみと、絶望。

父親が廊下の向こうに消えるとすぐに、車庫のシャッターを開ける音と、車のエンジン音が聞こえた。

私は身体を振るわせたまま、閉まったドアの前を通り過ぎた。そのまま階段を上り、宏章に教えられた部屋のドアを押す。

宏章は自分の部屋のベッドの上で、ぐっすりと眠っていた。

横向きで少し身体を丸め、自分を包み込む様に毛布を巻きつけた姿が幼い日の陸人と重なる。

静かにベッドに座り、宏章の寝顔にそっと手を触れた。そうせずにいられなかったのだ。

宏章が寝返りをうち、私の手を掴んだ。それからゆっくり目を開ける。

「愛美？」

「ごめんなさい。起こしてしまって」

宏章はベッドに身体を起こし、照れたように微笑んだ。

「いや。起こしてくれて嬉しいよ。起きたらいなくなってるんじゃないかって不安だった」

私はたまらずに宏章を抱きしめた。

「ゆっくり眠れた？ 宏章さん」

宏章が小さく笑って私の身体に腕を回す。

「ああ。久々に。何日ぶりかな」

「お母さんが帰ってみえたわ」

「お袋が？ こんな時間に珍しいな。気づかれた？」

「いいえ。閉じたドアから少し話し声が聞こえただけだったから」

私が知ったことは、宏章に絶対に話さずにいようと決心していた。

「じきに出てくよ。夜、家にいたためしがない。どうせ車庫から出入りするから、玄関にある愛美の靴にも気付かずじまいだろうな。しばらくこの部屋にいればそれで済む」

私は何も言うことができず、ただ黙って宏章を抱きしめていた。宏章は実の母親を愛していたのだ。

彼は何も知らされず、病に伏したあの人を看取った。

「愛美、そんなに抱きつかれたら陸人との約束を守れなくなる」

宏章が私を抱いたまま、少し恥ずかしそうに囁いた。

「いいの。私がこうしていたいから」

私はそう言って宏章の頬に手を触れ、自分から唇を重ねた。

ずっと俺の側にいてくれる……？

私を抱く宏章が、何度も繰り返しそう聞いた。

一緒にいるわ。

本当に？

本当よ。

私は頷いて、腕の中の少年をきつく抱きしめた。

優花の眠る病室のドアには、面会謝絶の札が掛かったままだった。

「一度目を覚ましたんだけど、すぐにまた眠ってしまったの。顔を見ていく？ ああ、その前に二人とも消毒をお願いね」

病室の前を通りかかった顔見知りの小児科の看護師に聞くと、彼女は廊下の手摺りに置かれた消毒液を指差してからドアを開け、私と宏章を招き入れた。

ベッドの上に眠る優花はいつにもまして弱々しく小さく見えて、その姿が切ない。

「誰か、身内の方は見えましたが？」

看護師は首を振った。

「いいえ。どなたもお見えにならないわ。先ほど施設の先生がお二人見えて、いろいろ手続きをされて帰られた所よ」

「優花ちゃんの容態はどうですか？」

まだ透き通るように白いままの優花の顔色を見ると不安になる。

優花は少し眉をひそめたまま眠っていた。

「可哀想だけど、そろそろ麻酔が切れてくるからしばらくは辛いわ

ね。でも今の所、特に酷い発熱はしていないし、結城先生は腕の確かな方だから、回復が遅くなるということはないと思うわ」

帰り際、私たちはナースセンターに結城医師を見つけ、声を掛けた。

「先生。まだいらしたんですか？」

机に向かって何か熱心に書いていた医師が振り返って私たちを見つめ、椅子から立ち上がった。

「もうこんな時間か。要領が悪いせいで次から次へと仕事が増える。あの子はまだ眠っていたろう？」

「はい。でも、そろそろ麻酔が切れて痛みが出るって……」

「ある程度はね。でも、できるだけ軽く済むように指示はしてある。もう今日は帰って休みなさい。明日学校の帰りに顔を見せてあげれば安心するだろう。看護はしっかりするから心配しすぎないこと」

「わかりました。明日優花ちゃんが目を覚ましたら、必ず放課後に来るからって伝えてください。それから、優花ちゃん自分からは話せないけれど、優しく聞かれれば答えます。よろしく願いします」

「わかった。小児科の看護師は愛美も知っての通り、子どもへの接し方には定評があるから大丈夫」

頷く私に笑顔を見せて医師は言った。

「二人とも朝よりずっと顔色がましになったな。丁度宏章に用があったんだ。今日帰りに届けようかと思ってたんだが」

医師はポケットから白い封筒を取り出した。

「お前宛だ」

「俺に？ 誰からですか？」

怪訝そうにしている宏章に向かい、医師は言った。

「一之瀬紗枝子さんから預かってた。もし自分に何かあったら渡して欲しいと」

その名前にドキツとして宏章の顔を見上げる。

宏章が医師から受け取った封筒の文字を確かめ、呟いた。

「紗枝子叔母さんから……」

医師は宏章を見つめた。

「ただし、開封する前に一つだけ伝言がある。封筒の裏に書き留めておいた。それを読んで、お前が自分で決めるんだ。いいな？」

宏章は封筒の裏に書いてある文字を読み、しばらくそのまま見つめていたが、そのままコートのポケットにしまうと言った。

「わかりました。ありがとございました」

医師は頷き、それから私の顔を見て笑った。

「愛美が一人で病院に来るのを見る度に心配したもんだが、いいボディーガードができてよかった。時々、宏章がふわふわ舞い上がっていかないように踏んづけてやってくれ。もうすっかり地に足が付いてないようだからな」

赤くなつた宏章をからかう様にちらりと見て、医師は私に言った。

「愛美は体調が悪いので、目が覚めるまで病院で寝かしておきますと園長に言っておいた。二人で夕飯を食う間くらいはまだ眠ってることにしていいよ。」

帰るとき、俺に電話をくれれば送ってく。きつかけがないと朝まで病院で仕事をしてしまいそうだからね」

病院を出ると、宏章と一緒に近くにあるハンバーガーショップで食事をした。

「こんな時間に外にいるのって初めて」

私はほとんど入ったことのないバーガーショップの賑わいに戸惑いながら宏章に言った。

母と暮らしていた頃から、夜に外出したことはなかった。

母はいつも夜の仕事をしていた、私は一人で部屋に残され、留守番をしていたからだ。

帰ってくる母の疲れた表情を見ていた幼い私は、外の世界は怖いところなのだと思っていた。

だから大きくなってからも、施設の厳しい規則を破ってまで夜の街に一人で出ようと思ったことは一度もなかったのだ。

店内の時計を見ると九時を回っている。



「施設って守られてるんだかいらないところだな。夜遊びする奴はいないってこと？」

「年長の男の子なんかは出ている子もいるみたいだけど、女子寮はないわ。今は私が一番年長で、その下の子が小学校六年生だから。男の子の人数の方が、女の子よりいつもずっと多いのよ」

内部が正しく機能さえしていれば、確かに施設は子どもを保護する場にふさわしいのかも知れない。

「年頃の女子生徒はひとり。じゃあ、年長の男は全部愛美を意識して見るってことだ」

宏章はそう言って、紙コップの中の氷をストローで掻き回した。

「男が女子寮に入り込むことはないの？」

そして私の目をじっと見る。

聡明な瞳を見ていられずに、思わず目を伏せる。

宏章は、私が初めてではなかったとわかったはずだ。

何も知らない無垢な少女の振りをするのは、私にはできなかった。

まるで、別の自分に支配されたかのように、身体が宏章を欲していた。

そんな私の過去と相手を、気にせずにいられるはずがない。

彼はもうクロスのことを口に出さなかったが、ずっと気に掛けているのを感じていた。

「見回りが厳しいの。だから……」

「頬を殴られたのはいつ？」

「……食堂で。食堂だけは男女一緒なの。時々争いがあるのよ」

「愛美」

宏章はテーブルに両手を置くと、私の手を握った。

「あそこの評判は聞いている。正直に言っただけ。今の園長も副園長も成り上がり志向だから、親父の名前を出せば愛美は優遇される」

「でも……」

「使えるものはみんな使うよ。他の奴らはどうでもいいが、愛美だけは守る。陸人にも約束した」

それほど簡単に事が運ぶだろうか。

宏章は私達が置かれている環境を知らなさ過ぎる。

だが、漠然とした不安を言葉で上手く言い表すことができず、私はただ宏章の顔を見返すだけだった。

別れ際、気になっていたことをようやく口に出した。

「宏章さん、さっきの手紙の事だけ……」

あのひとが自分の死を見越して結城医師に手渡していた手紙には、

宏章が知ってはならないことが書かれている気がした。

今の彼にこの事実はあまりに非情過ぎる。

宏章の母は、彼が自分を実母と知らずに愛していたことを知っていたに違いない。

彼に何を知らせようというのだろう。

「手紙？ 気になる？」

宏章はそう言っつて、少し笑った。

「ええ。宏章さん、それを読むの？」

「何をそんなに心配してる？ もしかして、焼いてくれてるとか」

「そうじゃないのよ。ただ……」

「何だ。残念だな。今はまだ読むつもりはないよ。いつ読むかはもう決めてる」

「今じゃないのね？」

「ああ」

それから、宏章は私に向き直り、真剣な表情できいた。

「愛美。愛美は、その。本当に今、誰とも付き合っていない？」

「ええ。本当よ」

宏章は、その言葉で懸命に自分を納得させようと努力しているよ

うだった。

何か聞こうとして諦め、宏章は私を見た。

「俺も、愛美が初めてってわけじゃない。でも、今日から俺たちはお互いだけのもので……。つまり……」

宏章は言葉に詰まり、小さくため息をついて笑った。

「やばいな、俺。どんどん好きになる。たくさん会おう、愛美。一緒に過ごして、愛美の笑顔を見て、いっぱい抱いて、安心したい」

宏章の誠実で真っ直ぐな愛情表現や表情が、私の心を優しく溶かす。

「心配しないで、宏章さん。できるだけ、時間を作るわね」

宏章が、少し先の道端で車を止め、私を待っていてくれる結城医師の車に視線を走らせ、自分の身体で隠すように私にキスした。

「お休み、愛美。必ず連絡してくれよ。電話くれないと、施設の意地悪ババアに取り次げて電話攻勢かけるぞ」

「わかったわ。お休みなさい」

まだ私の背に手を回したままの宏章からそっと離れると、結城医師の車に乗り込んだ。

「まるで女雛と男雛だな」

結城医師は車を走らせながらバックミラーを見、くすつと笑った。

「最初から一対で作られたみたいに似合って見えるよ。あいつ、車が見えなくなるまで見送るつもりだな。あの堅物の宏章が人前で女の子にキスするなんて、世の中先はわからんもんだ。このままいい付き合いになれば俺も嬉しい」

「そんな……。私と宏章さんは違い過ぎます」

結城医師は穏やかに言った。

「今から決めつけることはないさ、愛美。ゆっくり歩いていけばいい」

私は宏章のぬくもりを思い出しながら言った。

「宏章さんを赤ちゃんの頃から知ってるって言っていましたよね」

「ああ。十六歳も違うからね。弟の伶とほぼ同じ時期に生まれたんだ。初めてあいつが家に帰ってきたとき、すぐ見に行ったことを覚えてるよ。」

あいつの母親の嬉しそうな顔が忘れられない。アメリカで不妊治療をしてようやく授かった子どもだと言うことだったよ。妊娠中も向こうにいて、あいつが生まれて三ヶ月くらいしてから日本に帰ってきたんだ」

医師は私にそう話ながら、何かを思い出すようにふと沈黙した。全ては内密に行われたのだろう。

宏章の今の母は、三年間わが子のように育てたと言っていた。

彼の出生がああでなければ、たとえ養子であってもずっと愛情深く育てられたに違いないのに。

「宏章の叔母、あの手紙の紗枝子さんは俺より二つ年上で、子どもの頃からずっと学校が一緒だった。天真爛漫でよく笑う女の子でね。誰もが好きにならずにいらなかったよ。残念ながら俺とは最後まで仲のいい姉弟の関係のままだったけどね。」

一度だけ、彼女の涙を見たことがある。彼女は小さい頃からずっと好きな奴がいたんだよ。その相手が他の女性と結婚したんだ。何も言わず、ただ涙を零していた姿が忘れられない。

あんなふうに辛い最期を迎えるべき人ではなかった。それが残念でたまらない」

宏章の本当の母。ずっと好きだった人は、宏章の父だったのだろうか。

そして、宏章を愛した気持ちごと夫に裏切られた育ての母。

結城医師は宏章の出生の秘密を知っているのではないか。

そんな気がした。

窓の外を流れていく夜の街の景色を見ながら、親子とは何なのだろうとぼんやり考えていた。

宏章、優花、そして陸人。

生まれる場所が違っていたら、どれ程愛される子ども達だった事だろう。

こんな状況に置かれてさえ、人の心を打つ何かを彼らはそれぞれ持っていた。

宏章があの手紙を読まずにいてくれるよう、祈ることしかできないのが辛い。

「自分のことも考えるんだよ、愛美」

医師は黙り込んだ私を見てそう言った。

「明日の楽しいこと。将来の夢。どんな小さなことでもいい。今何かやってみたいことはない？」

私は宏章との会話を思い出しながら答えた。

「この間宏章さんの家で食事をいただいたんです。見たこともない、凝ったおいしい食事。その時、私も料理を習ってみたいと思いました。今は何にも作れないから」

「そうか。それはいいね。愛美の好きそうな可愛くて美味しいケーキ作りを習うのもきつと楽しいぞ。宏章に御馳走した残りでもいいから、いつか俺にも食わせてもらいたいな」

「頑張ってみます。今度図書館で本だけでも借りてみようかな」

施設の前に車が止まった。

「一緒に降りて、しばらく病院に通う事が必要だと言っておくよ。少し気晴らしができるようにね。今の愛美には、学校での勉強や生活よりも外の空気に触れることの方が大事だ。宏章は定期的に病院に通ってるから、部活三昧でもそこで顔は見える」

私は驚いて聞いた。

「宏章さん、どこか悪いんですか？」

「膝に問題があつて、スポーツ外来に通ってる。あまり状態は良くないが、高校にいる間はサッカーを辞めたくないとの強い希望でね。監督と伶以外の部員は誰も知らないはずだ」

「そうだったんですか……」

宏章が陸人に持っている複雑な気持ちの一部分がわかる気がした。陸人の広く開けた未来に比べ、宏章には限られた時間しかなかったのだ。

五歳の頃から続けてきたサッカー。

「あいつは我慢強過ぎるところが欠点なんだ。お前達はよく似てる



よ。ただ宏章には、とにかく前へ進んでいこうとする気の強さがある」

医師は私に優しく言った。

「愛美が少しあいつの影響を受けてくれると、おせっかいオヤジの医師としては少しほっとするんだが。そして愛美があいつに与えてくれるものにも期待しててね……。さあ、車を降りよう。未成年の美少女を誘惑してる悪徳医師に見えたら大変だ」

結城医師のおかげで、園長はもとより、寺田すら遅い帰宅に何も小言は言わなかった。

「優花ちゃんのお母さんには結局連絡が付かなかったのよ。でも、あの子が一命を取り留めてくれて安心したわ」

寺田は私が部屋に戻る時にそう言った。

管制室の前で、川崎に擦れ違った。

廊下の窓から外の道を見ながら煙草を吸っている。

「外車でお帰りか。いい身分だな」

彼はそれだけ言っと煙草を揉み消し、私には触れずに玄関から外へ出て行った。

職員が彼の後姿を見たが、止めるはずもない。

川崎の冷たい視線が何を物語っていたのか、その時の私にはまだわからなかった。



翌日、ホームルームが終わり、教室を出ようとしたら、担任の猪口に呼び止められた。

今日は体調が悪く欠席だと、副担任が言っていたのに。

一瞬足がすくんだが、無視してそのまま歩き去ろうとすると、私を追いかけてきた猪口が強く腕を掴んだ。

嫌悪感で悲鳴を上げそうになる。

「離して下さい」

だらしなく体系の緩んだ中年の教師の腕を振り払い、身体を放して鞆を胸にしっかりと抱きかかえる。

猪口は定まらない目線で落ち着きなく辺りを見渡すと、油染みた汗で滑る銀縁の眼鏡を何度も指で押し上げた。

「蔵木、話がある。後で進路指導室に……。いや、どこか学校の外で待ち合わせできないか」

何事かとこつちを見ながらひそひそ話をして通り過ぎていくクラスの女子に緊張した目を向けながら、猪口が囁いた。

「無理です。今日は病院へ行かなければなりませんから。それに、もう個人的にお会いするつもりはありません」

真っ直ぐ教師を睨み返し、きびすを返す。

宏章に言われた言葉が自分を守ってくれていた。

今日から俺たちはお互いだけのもの。

私を信じている宏章を裏切りたくない。

「蔵木」

執拗に腕を掴まれた。

「今度は大声を出しますよ。いい加減にしてください！」

心の中の恐怖を読み取られないように、必死で強気の状態を作る。以前は私が高圧的な態度を取る男の前で身動きが取れなくなってしまうことを見抜き、それを利用して卑劣な行為を強要した猪口が、今日は顔色も悪く、目の下に濃い隈が出ているのに気がついた。目が落ち着きなくさまよっている。

そういえば、こここのところこの教師の様子が変だと生徒の間で噂になっていた。

授業中もぼんやりして話が途切れたり、かと思うとずっと机に目を落としたままブツブツ言っている。

受験生を持つ父兄が見るに見かねて校長にクレームを出し、近々会議でこの教師の処分が決定するという噂だった。

川崎の恐喝だけでここまで追い詰められているとは思えない。いくら川崎でも、相手はまだ高校生なのだ。

「頼む。一時間でいい。いや、三十分でも。場所はお前が指定してかまわん。話をするだけだ。本当に何もしない」

この男の言葉を信じられるはずはなかった。

「嫌です」

腕を振り切り、廊下を走り出した私の後ろで猪口が叫んだ。

「助けてくれ！ このままじゃ殺される！」

驚いた生徒がみんな猪口を振り返る中、教師は廊下にぺったりとしゃがみこみ、子どものように泣き出した。

生徒に知らせを受けた他の教師がすぐに駆けつけ、興奮して泣き叫ぶ猪口に落ち着けと怒鳴っている。

狂ったように意味不明の事を叫んでいる猪口を、数人の教師が立たせて廊下を引きずって行った。

騒ぎを知った生徒達が集まってきて、校内は騒然としたままだ。

「どうしたの。蔵木さん、猪口先生に何かされたわけではないわね？」

駆けつけた保健の教諭が、顔色を失って立ち尽くしている私の腕に手を回した。

「佐久間先生……。いえ。何も……。何もされていません……」

「大丈夫？ 顔色が悪いわ。保健室で休んだらどう？」

「今日、これから病院に行くんです。主治医の先生に診てもらおう予定ですから……」

佐久間は猪口が連れ去られた方向を厳しい表情で見て、私に手を回したまま囁いた。

「それでも少しは休んだほうがいいわ。倒れてしまいそうよ」

保健室の奥にはドアで仕切られた小部屋があり、不登校の生徒が勉強できるようにテーブルと座り心地のいい椅子が置いてある。

椅子に腰掛けた私に佐久間が暖かいミルクティーを入れて手渡ししてくれた。

二十代後半の佐久間は年よりずっと若く見える可愛らしい顔立ちをしていて、男子の強烈なからかいも冗談で切り返す明るい性格が好かれ、生徒たちの信頼も高かった。

「ありがとうございます」

私はそう言って、甘くて暖かいミルクティーを口にした。

優しい紅茶の香りが胸に染み渡り、ようやく気持ちが落ち着いてくる。

「内緒で隠してあるのよ。行きつけの紅茶専門店からいつも切らさないように買って来てね。おいしいでしょ？」

佐久間は笑窪を浮かべて笑うと私の前に座り、一緒に紅茶のカップを傾ける。

「今日はこれから病院なのね。また風邪でも引いてしまったの？  
ずっと入院していて、ようやく退院してきたばかりだもの。大事にしないとね」

「退院後に御挨拶もしないですみませんでした。綺麗なお花までいただいたのに」

私が頭を下げると佐久間が微笑んだ。

「いいのよ。廊下で擦れ違う時、随分顔色も良くなったって安心してたの。退院後でまだ気持ちが悪く着かなかったでしょう？」

私に可愛らしい藤の籠に入ったクッキーを差し出す。

「私が焼いたの。お砂糖とバターがたっぷりダイエットには大敵だっと思っただけど、お菓子作りが大好きなのよ。甘いものを食べると簡単に幸せになっちゃうのよね」

そう言っ、佐久間はにっこり笑った。

「入院している間、保健の授業中に蔵木さんの可愛い顔が見えないから寂しかったわ。もちろん、気にしてる男の子も何人もいたわよ。教壇に立っているとよく見えて楽しいわ。男の子達が蔵木さんのあいた机を見てぼんやりしてるところとかね」

「そんな。そんなこと、ありません。だっ……」

その言葉を否定すると、佐久間は優しく私を見て聞いた。

「どうしてありえないと思うの？」

私は佐久間から目を逸らし、うつむいた。

「……私は汚くて、醜いからです」

佐久間は私を軽蔑するだろうか。

私が佐久間が思っているような無垢な少女ではないと知ったら。

佐久間は黙っている私にそつと言った。

「私は日向園を出ているの。もう十年以上前の事よ。きつと今でも施設に暮らす子どもたちは変わっていないわね。あそこの先生方も……」

驚いて顔を上げる。

「先生が、日向に？」

「そうよ。中学三年までね。いろんなことがあったわ。定時制に通いながら働いて、三年年遅れで大学に入ったの。だからまだ新米教師よ」

佐久間は少し笑ってそう言い、私を見ると真剣な口調になった。

「あなたのことがずっと気にかかった。猪口先生の事も、もしかしてっと思っていたのよ。蔵木さん、あの先生に酷いことをされていたんじゃない？」

正直に頷くことができず、身体を硬くしたままの私に先間は言った。

「あなただけじゃない。ほかにも猪口先生の事で気になっている女の子が何人もいるの。事が事だからむやみに追求できなかったのよ。公にはしたくなかった。私はあなたたちの気持をよく知っているから」



佐久間の真剣な表情に心からの理解があることが感じられた。

「あなた達が傷つかずにあの先生に制裁を与えられるように努力するわ。最低の大人ばかりだと思わないでね。猪口先生は昨日の職員会議で糾弾されているのよ。恐らく教職は続けられないわ」

「でも、理由を聞かれたら……。皆に知られたくないんです」

「わかってるわ。あの先生には他にも問題があるの。必要ならば、こういう虐待で女の子がどれだけ傷つくか、私は自分の体験を話すつもりよ。」

私もあなたと同じ経験を持っているのよ、蔵木さん。だから私はこの仕事を選んだの。誰にも悩みを打ち明けられずに苦しんでいる子に、あなたが悪いんじゃないって教えてあげたくて……」

「佐久間先生……」

自分の心の傷に、同じ目線から話しかけてくれた人は始めてだった。

「心配しないで。もしここでよかつたらいつでも遊びにいらっしい。話したくないことは話さないでいいの」

涙が溢れて止まらなかった。

佐久間は何も言わず、泣いている私に手を触れたまま、ずっと見ていてくれた。

「ほら、涙を拭いて。可愛い顔が台無し」

佐久間は私にハンカチを渡し、クツキーを進めてくれた。

「こういう時にも甘いものって力があるのよね。本当よ。試してみ  
て」

口の中で、優しく甘いクッキーが溶けていく。  
生まれて一度も食べたことがない手作りのクッキーは、胸が痛く  
なるほど懐かしい味がした。

「おいしいです。とても」

私が言うと、佐久間は生クリームのように白く滑らかな頬にくっ  
きりと笑窪を浮かべた。

「喜んでもらえると嬉しいわ。誰か作り過ぎたお菓子を一緒に食べ  
てくれる子がいたらいいなって思ってたの。そうでないと、ますま  
す体重計を怨みたくなるんだもの。ほっそりしてる蔵木さんが羨ま  
しいわ。」

けど私達、笑窪はお揃いね」

私に笑窪があることを知っている人は数少ない。

佐久間がどんなに私を気にして見てくれていたかが身に染みる。

私は泣きながら頷き、佐久間に笑顔を返した。

「病院へはバスで行くの？ 体調が悪いのに大丈夫？」

佐久間が心配そうに聞いた。

「体調は悪くないんです。施設で同室だった女の子が五日前に手術  
して入院しているから、お見舞いに行こうと思って」

「そうだったの。具合はどう？」

「手術は成功していると言われました。ただ、切除部分が多くて回復に時間が掛かるかも知れないと。その子のお母さんに連絡が付かなくて、きつと寂しい思いをしていると思うから」

「一緒に行ってあげたいのだけど、猪口先生の様子がおかしかったから見てこなくちゃならないわ。バス代は大丈夫？」

「はい。施設からもらうお小遣いはほとんど使わないんです。だから」

「そう。帰りは暗くなるから気をつけてね。世の中は怖い人ばかりじゃないけれど、自分の身を守ることは大事よ」

保健室を出るとき、私は思い切って佐久間に言った。

「先生、あの……。もし御迷惑でなければ、私にお菓子作りを教えてくださいませんか？」

「まあ。私に聞いてくれるの？」

佐久間の顔がぱつと輝いた。

「アパートのキッチンの引き出しには、入り切らない程のレシピの山よ。これを誰かに引き継いでもらわなくちゃ文化遺産の損失だと思っていたの」

机の上にあったクツキーをナプキンに包みながら、悪戯っぽい顔で佐久間は笑った。

可愛らしい小さな持ち手つきのペーパーバッグに移して私に差し出す。

「はい、お土産。今度はシフォンケーキを焼いてくるわ。ほっぺが落ちちゃうわよ。いつでもいらっしゃい。手ぐすね引いて待つてるわ」

「ありがとうございます。すごく嬉しいです」

陽だまりのような佐久間の暖かさに触れ、胸が一杯になった。

佐久間が日向園を出ていることも、私を勇気付けた。

もし顔を上げて歩いていくことができたなら、私も佐久間のようになれるかもしれない。

学校からの帰り道、クッキーの入った紙袋が鞆と一緒に揺れるのを見ながら、私は心の中が少しだけ軽くなるのを感じていた。

「愛美姉ちゃん」

病室に入り、ベッドの横にある椅子に座ると優花が目を開けて私を見た。

今が一番身体が辛い時だと看護婦が言ったとおり、優花の声は弱々しく、目を開けているのも大変そうに見えた。

「優花ちゃん、今日はどう？少し顔色が良くなったわね」

私は優花の髪を撫で、手を握った。

「愛美姉ちゃんが来てくれたから元気出たよ」

「何かして欲しいことはある？ お姉ちゃんがいない時も、いつでも看護師さんと呼んでいいのよ。声を出さなくても、ここのブザーを押せばいいから。」

お姉ちゃんもここの病棟には何度も入院したの。この病院のえらい先生がとも思いやりのある方だから、看護師さん達もどこの病院よりも優しいわ。だから声をかけたらきつとみんな親切にしてくれる」

「うん。看護婦さん達がいるから、優花寂しくないよ」

優花はそう答えたが、私の手をしっかりと握り締めたまま離さなかった。

「愛美姉ちゃん、もう帰っちゃう？」

「優花ちゃんが眠るまでここにいるわ」

「優花、眠りたくないな」

そう言いながらも、優花はまたうとうとし始めた。

あまり目を開けていられない様子だった。

体力のない小さな子どもには想像以上の負担がかかっているのだろつ。

優花の回復は思わしくなかった。

微熱がずっと続いていて、時々うわごとで母親を呼んでいる。

眠っても私の手を握ったままの優花の姿が切なくて、私はずっとそのまま少女の傍に座っていた。

少女が焦がれている母親のことを考えた。

連絡さえ付けば、優花を見舞ってくれるかもしれない。

そうしたら、この少女はどれほど喜び、早く回復したいと願うだろう。

身体を回復させるのは何よりもまず前向きな明るい気持ちなのだと結城医師はいつも言っていた。

私は眠ってしまった優花の手をそつと離し、病室から出ると施設に電話をかけた。

「優花ちゃんのお母さんの住所が知りたいんです」

私は寺田に言った。

優花が母親と住んでいた所は、何度も話の中に繰り返してきた

公園や通りの場所からして、ここからそんなに遠くないはずだ。

寺田が訪ねた時は留守だったと言っていたが、夕方ならば働いていても家に帰ってくる可能性がある。

「今病院にいますので、帰りに訪ねてみます。ご迷惑はおかけしませんが、私が個人的に訪問したかったのだと言いますから」

ただでさえ、問題のある子どもたちを多く抱えた寺田は、一人の少女にいつまでもかまっていられない様子だった。

「わかったわ。食事はあなたの分を取り置いておくから、変な事件に巻き込まれないようにすぐに帰ってくるのよ」

電話を置いて歩き出そうとし、ふと振り返る。

宏章に電話をかけるべきだろうか。

一緒にいると約束したことは正しかったのか、まだ吹っ切れない気持ちがあった。

迷いながら受話器を取り、ボタンを押す。

心の準備もできないままに、すぐ宏章が出た。

「愛美？」

名乗らないうちから宏章が私の名を呼んだ。

「どうして私だってわかったの？」

「ああ、そうだよな。どうしてかな。たぶんずっと待ってたからだと思う。この五日間は授業中まで携帯を机の上に置いてた。あやうく教師に没収されるとこだったよ」

「毎日病院にお見舞いに来ていたの。なかなか連絡できずにごめんなさい。それに、宏章さんも部活で忙しいでしょう？」

「早く愛美の顔が見たい。抱きしめたいよ。五日間がこんなに長かったのは初めてだ」

宏章の熱っぽい声の調子に頬が赤くなる。

「今日はまだ寄りたい所があるのよ。今度、時間が取れたら」

電話を切り、受話器を置いたまま宏章の事を考えた。

今まで一人になって思い出すのはいつも陸人だけだったのに、時々ふと宏章を思い浮かべていることに気がつく。

エレベーターを降り、がらんとした病院の待合室を通ると、丁度正面玄関から背の高い影が入ってくるころだった。

「宏章さん」

宏章が私を見つけ、足早に近づいてくる。

「愛美」

ブラックデニムに同色のライダースジャケットがよく似合う。

華南学院の高等部は私服にバッジをつけるだけだから、学校帰りの宏章はまるで大学生のように大人っぽく見えた。

「今日はもう部活終わったの？」

「ああ。真っ直ぐここに来た。愛美から電話があったらすぐに行け



るように、あれから毎日バイクだったんだ。俺のこと、少しは思い出してくれてた？」「今病院にいるので、帰りに訪ねてみます。ご迷惑はおかけしません。私が個人的に訪問したかったのだと言いますから」

ただでさえ、問題のある子どもたちを多く抱えた寺田は、一人の少女にいつまでもかまっていられない様子だった。

「わかったわ。食事はあなたの分を取り置いておくから、変な事件に巻き込まれないようにすぐに帰ってくるのよ」

電話を置いて歩き出そうとし、ふと振り返る。

宏章に電話をかけるべきだろうか。

一緒にいると約束したことは正しかったのか、まだ吹っ切れない気持ちがあった。

迷いながら受話器を取り、ボタンを押す。

心の準備もできないままに、すぐ宏章が出た。

「愛美？」

名乗らないうちから宏章が私の名を呼んだ。

「どうして私だってわかったの？」

「ああ、そうだよな。どうしてかな。たぶんずっと待ってたからだと思う。この五日間は授業中まで携帯を机の上に置いてた。あやうく教師に没収されるとこだったよ」

「毎日病院にお見舞いに来ていたの。なかなか連絡できずにごめんなさい。それに、宏章さんも部活で忙しいでしょう？」

「早く愛美の顔が見たい。抱きしめたいよ。五日間がこんなに長かったのは初めてだ」

宏章の熱っぽい声の調子に頬が赤くなる。

「今日はまだ寄りたい所があるのよ。今度、時間が取れたら」

電話を切り、受話器を置いたまま宏章の事を考えた。

今まで一人になって思い出すのはいつも陸人だけだったのに、時々ふと宏章を思い浮かべていることに気がつく。

エレベーターを降り、がらんとした病院の待合室を通ると、丁度正面玄関から背の高い影が入ってくるところだった。

「宏章さん」

宏章が私を見つけ、足早に近づいてくる。

「愛美」

ブラックデニムに同色のライダースジャケットがよく似合う。

華南学院の高等部は私服にバッジをつけるだけだから、学校帰りの宏章はまるで大学生のように大人っぽく見えた。

「今日はもう部活終わったの？」

「ああ。真っ直ぐここに来た。愛美から電話があつたらすぐに行けるように、あれから毎日バイクだったんだ。俺のこと、少しは思い出してくれてた？」

私は小さく頷いた。

宏章は恥ずかしくなってしまうほど私をじっと見つめている。

「愛美の今度を待つてたら、俺はもう白髪のアジイになりそうだからな。きつとここに寄るだろうから送ろうと思って。今日こそ逃がさないように強行突破だよ。俺と一緒にできれば行きたいところに乗せてくけど」

「ありがとう。優花ちゃんのお母さんの家に訪ねてみたかったの。夜だし行ったことがない場所だから、宏章さんが一緒だとほっとする」

「住所はわかる？」

宏章は私が制服のポケットから取り出したメモ書きをしばらく見つめていたが、それから目を上げて私を見た。

「以前陸人の親父が住んでた辺りだ。住所を見ただけじゃわかりにくいけど、実際は繁華街の裏通りだよ。伶と遊んでそこに迷い込んだ時、あいつがそう言ってた」

陸人の父親が住んでいた……。

陸人の名前を思いがけずに聞いて動揺する。

あれから陸人は一度も連絡をよこさず、私はそれを思うと気持ちが沈むのをどうしても止められないのだった。

院内が暗くて自分の表情が宏章に見えないことにほっとする。私は自分の気持ちを押し隠し、宏章と並んで病院を後にした。



そこは、裏寂れた長屋のような家が連なる場所だった。

今にも崩れそうなプレハブの家の壁に、スプレーで大きな落書きが書き散らされている。

空気が澱んでいるようなそのあたりの景色は、私が以前母と暮らしていた街とアパートを思い出させた。

バイクから降りた後、私は隣を歩く宏章の手を知らずに掴んでいた。

足を一步一步進めることに重苦しい何かが私に絡み付いてくるように、身体が強張ってくる。

私の様子が気がついた宏章が手をしっかり握り返してくれた。

「副園長がここを訪ねたなんて大嘘だな。一度でもここに来たことがあれば、いくらなんでもこの時間に女の子を一人でよこす筈がない。このすぐ先はホテル街だよ」

その言葉は意外ではなかった。

日が暮れた裏通りに人の声はなく、びっしりと落書きされた線路下のコンクリートの壁際に溜まって細い煙草のようなものを吸っている少年達が数人いるだけだ。

彼らはあからさまに私達を見て嫌悪感を表していた。

おそらく宏章の雰囲気がここにそぐわないのだ。

はやく切り上げて出ないと、宏章が絡まれる恐れがある。

錆びた郵便受けにある掠れた文字を確認して、優花の母の住むア

パートを見つけ出した。

「明かりがついてない。どっちみち、この辺に住んでたらほとんど夜の仕事なんじゃないか？ この時間にはいないだろう」

宏章が言うとおり、時々ドアを開けてこのアパートの部屋から出てくる女達は、判で押したように厚い化粧と派手な服装をしている。輝の入った曇りガラスから中を覗いても、暗い屋内に人影はない。念のため壊れかけたドアホンを押したが、やはり誰も出てくる気配はなかった。

「開かないかな」

宏章がドアノブをガチャガチャ回していたら、いきなり中からドアが押し開けられて驚いた。

「どなたですか？」

ドアの中に立って私達を恐々見上げているのは、五十代くらいに見える小柄な女性だった。

予想していなかった事態に、宏章と思わず顔を見合わせる。

「遅くに申し訳ありません。片桐優花ちゃんと同じ施設に暮らしている、蔵木愛美といいます。優花ちゃんのお母さんですか？」

女性は驚いたように私を見た。

「優花と一緒に？ 優花は施設にいるんですか？」

勢い込んでそう聞いた後、女性は少し落ち着きを取り戻して私達

に言った。

「中へお通ししたいのですが、生憎電気が止められているようです。私も娘の帰宅を待っていたのですが、今帰るところでした。申し遅れましたが私は優花の祖母です。宜しければどこかでお話を伺えませんか」

物騒な界限を抜けて、繁華街の中にあるコーヒーショップに入っ  
た。

宏章に絡もうとしていたに違いない少年たちも、さすがに老婦人  
連れでは手を出しにくいらしく、私達の後ろから挑戦的な暴言を吐  
くに留めていた。

宏章は私を守るように背中に腕を回していたが、彼らの挑発に簡  
単に乗るほどおろかではない。

この辺は飲み屋や風俗店が乱立していて、私は宏章のジャンパー  
で制服を隠していたが、ショップの中にも外にも学校の制服を着た  
ままの中学生や高校生の女の子が堂々と男の人と抱き合い、煙草を  
吸っている姿が見える。

私は小さな頃から厳しい施設の規則の中に暮らしていたので、今  
見ている現実が小説や一部煽り立てるようなニュースの中の話では  
ないことにとまどいを覚えていた。

以前宏章が言った、施設は守られているのかいないのかわからな  
い場所だなという言葉を思い出す。

「優花は三歳の時まで私と暮らしていたんです」

優花の祖母はコーヒーの紙コップを両手で挟み、卓上に目を落と  
して話し始めた。

私達は二人とも実際の年齢より大人に見えるらしく、優花の祖母の口調は丁寧で礼儀正しいものだった。

「娘は、私の以前の夫と再婚した女性に育てられていました。私も新しく家庭を持ち、娘を気にしながらも会うことができなかったのです。それが六年前、娘が生まれたばかりの優花を預かって欲しいと訪ねて来て……」。

夫の息子はもう海外で所帯を持っていましたし、辛い思いをさせた娘へのせめてもの償いと、私達は二人で優花を愛情掛けて育ててきました。それが、三年前に突然娘は優花を連れて姿を消してしまつたのです。いくら探しても消息がつかめず、あのアパートを探し出したのも最近です。

半年前に夫が他界しまして、ずっと気になっていたあの子たちの行方をもう一度探そうと……。娘はもう何日も家に帰っていないように、ポストの中にあつた合鍵で中に入りましたが優花の姿もなく、とても心配していたんです」



女性は心配そうに手に持ったハンカチを握り締め、私の顔を見た。

「娘の行方は御存知ですか？ 優花はいつから施設に暮らしているんですか？ 私は孫に会えるでしょうか」

必要以上に驚かせたり、悲しませたりしなくなかった。

私はできるだけ落ち着いた声で言った。

「お母さんがどのような堅田か私にもわかりませんが、優花ちゃんを育てるのに疲れていたという事です。優花ちゃんは四ヶ月前に施設に来ました。部屋が私と同室で、ずっと仲良くしています。本当に可愛い子だと思います」

そこで言葉を区切り、私は女性を見つめた。

「今、優花ちゃんは入院しています。五日前に、腸重積で大きな手術をしました。手術は成功していますが、今はまだ痛みがあつて、目が覚めると一人でいることを寂しがっています。お母さんに見舞っていただけたら元氣が出てもっと早く回復すると思つて、お家を訪ねてみたんです」

「優花が手術……」

女性はしばらく言葉を失った。

「病院を教えていただけませんか？ かけがえのない、たった一人の可愛い孫なんです。側にいてあげられるものならすぐにでもそう

してあげたい」

その目に涙が浮かんでくる。

「ここからタクシーですぐです」

宏章が言った。

「愛美、俺はここで帰るから、一緒に病院に戻ったらいい。帰りは結城先生が送ってくれると思う。さっきまだ駐車場に車があったし、伶の話じゃ帰りは毎日このくらいの時間だそうだから」

「ありがとうございます」

優花の祖母はハンカチで目を押さえながら頭を下げた。

コーヒーショップから出る時、宏章はほっと力の抜けた私に小声で言った。

「良さそうな人だ。来た甲斐があつてよかったな」

「ありがとう、宏章さん。私一人じゃここまで来れなかった」

「お礼はないの？」

答える暇もなく宏章が私にキスした。

向かい合わせで、両手を私の髪に触れながら優しく目を見つめる。

「明日は土曜日だから一緒にいれる？ 俺の心配を解消する甘い時

間も込みで」

「宏章さん」

私は赤くなつて宏章から離れた。

「こんなところでこの程度のことを気にする奴なんか誰もいないよ」

宏章がからかうように言う。

私はまだ赤くなつたままだつた。

「午前中に優花ちゃんのお見舞いに来るわ。その後なら」

「わかった。じゃあ、明日」

さっきから何度もフラッシュがたかれた気がしていた。

振り返ると、女子高生達が携帯のカメラでお互いを撮り合っている。

後で考えれば、宏章と二人で過ごしている時に何度もその感覚があつたのだ。

誰かに見られている感覚。

フラッシュ。

だがその時にはまだ、私はその意味を深く考えてはいなかった。

翌日、優花を見舞おうと廊下を通ると、ちょうど面会室へ入ろうとしている優花の祖母を見つけた。

「片桐さん」

私が声をかけると女性は振り向き、頭を下げた。  
笑顔が少し強張っている。

「ああ、蔵木さん。来て下さったんですね。ありがとうございます」

「優花ちゃんの様子はどうですか？」

優花の祖母は、表情を曇らせ、寂しそうに言った。

「相変わらず口はきいてくれません。あんなに人懐っこい子だったのに、私から顔を背けたまま。娘との間にいったい何があったんでしょう」

それから私の顔を見て、不安そうに声を潜める。

「蔵木さんは御存知だと思いますが、あの子の手の火傷の跡……。あれはいい」

優花の母が、娘を虐待していた事実を知らせていいものか迷い、私は口ごもった。

「それは……」

「愛美」

その時、いつもの快活な声で名前を呼ばれて顔を上げた。

こちらへ向かって廊下を歩いてくる、白衣姿の結城医師が、私に笑顔を見せている。

「見舞いか。毎日ご苦労さん。片桐さんも早くからお見えになったんですね」

「本当は孫の病室で休みたかったんですけど……」

肩を落としている優花の祖母に、医師は言った。

「焦らず、時間をかけなくてはいけません。もし今よろしければ、あの子が置かれていた状況と現在の病状を私から説明します。よろしいですか？」

二人と別れて病室に入ると、優花が点滴のチューブのついた手で可愛い洋服を着たうさぎの縫いぐるみを撫でているところだった。

「愛美姉ちゃん、見て。お名前付けたの。可愛いからエミちゃん」

「お姉ちゃんと同じ名前ね。おばあちゃんが買ってくださいましたの？」

私が話しかけながら椅子を引き寄せると、優花は視線を落とし、縫いぐるみを枕元に置いた。

「うん」

布団を引つ張って顔を隠してしまいたそうに見える優花の髪を撫で、私は言った。

「優しそうなおばあちゃんね。優花ちゃんが大好きなんだって。羨ましいな。お姉ちゃんにはおばあちゃんがないから」

「うん」

優花はしばらく黙っていたが、ようやく小さな声で囁いた。

「おばあちゃん、病気がよくなったら一緒におばあちゃんのおうちへ帰ろうねって優花に言っただよ」

「素敵じゃない。きっとおばあちゃん、優花ちゃんのこと、心から可愛がって下さるわ」

「でも……」

優花の目に涙が湧き上がり、大きな粒となって零れ落ちる。煙草の火傷が残る小さな手で布団を握り締め、涙を拭いて優花は言った。

「……優花、お母さんに迎えに来て欲しいの……」

どう答えていいかわからなかった。

子どもにとっての母親という大きな存在。

祖母の家で母を待っていたらと気休めを言うことはできる。

だが、優花の母親が迎えに来る可能性はあるだろうか。

私はハンカチを優花の涙にそつとあてた。

「今すぐ決めなくていいのよ、優花ちゃん。おばあちゃんは、優花ちゃんの気持ちをわかって下さると思うわ」

そう言うしかなかった。

私たちの年になってさえ諦めきれないのに、たった六歳の優花が現実を受け入れるのは大変なことだ。

私は今でも母に迎えに来て欲しいと本当に思っているのだろうか。

自分に自問自答していた。

優花の抱いていたうさぎの縫いぐるみが、移動動物園での母の記憶を蘇らせていた。

あの時、私と陸人を見ていた母の目が忘れられない。  
静かで哀しげな瞳。

「何を考えてる？」

宏章に声をかけられて我に返った。

私は宏章の部屋のパソコンを前にその操作の仕方を習っていると  
ころだった。

目の前のディスプレイには画面いっぱい桜の花が写っている。  
はらはらと花びらを散らしている櫻は幻想的で、いつまで見ても見飽きない。

宏章は何よりも絵を書くのが苦手なんだと情けなさそうに言うが、  
パソコンの中に作り上げる世界の緻密さと美しさは目を見張る程だった。

「ううん。パソコンの扱いが難しいのよ。いままで触れる機会がほとんどなかったの。宏章さんは凄いわね。本当に驚くわ。それに、この本の数」

宏章の部屋にはパソコンだけでも四台あり、それぞれが他の機械に接続されて、まるで専門のオフィスの一角のようだ。

本棚には参考書や問題集の他にIT関連の本がずらりと並んでいて、その中には洋書も多数あった。

華南サッカー部の中で理数科にいるのは結城と宏章だけなのだという。



華南学院は幼稚園から大学まである名門校だが、スポーツでも名を馳せられるように、運動能力が優れたものは成績が優遇されるクラスがある。

だが、この理数科は純粋に成績の査定だけで評価され、選抜と言えるほどレベルが高い。

華南の理数科を目指している同級生の成績を考えると、私はただただ彼の頑張りに驚くのだ。

「何かを分解して元通りにしたり、自分でちょっとした機械を組み立てるのが子どもの頃から好きだったんだ。そのうち、自分でパソコンを組み立てたり、市販ではちよつとない実用ソフトを作るのが趣味になった。将来はこの関係で食っていけたらいいと思う。おいで、愛美」

宏章は自分の膝の上に私を座らせ、唇と髪にキスした。

「今日は愛美とずっと一緒にいられたから満たされた気分だ。すごくやる気が湧いてる。月曜の物理のテストはもらったな」

私達は午後の時間を、こうしてゆつくり過ごした。

自分でも、驚くほどの安心感を宏章に覚えていた。

求められることが嫌でないのは初めてだったし、抱かれた後、男の腕の中でまどろんだのも初めてだった。

「お父様のお仕事を継がないの？」

私が聞くと宏章は厳しい顔で首を振る。

「嫌だね。政治家なんてごめんだ。この家に生まれたからって当たり前に親と同じ道を進むつもりはないよ」

宏章はそう言いながらマウスを握る私の手に自分の手を沿え、クリックでテレビ画面を開いて見せた。

「コンピューターは面白いよ。この先、もっともって進化していく。それにかかわりたいんだ」

パソコンの画面上では、お昼のニュースが流れていた。

衆議院議員の関与が疑われる汚職疑惑に関するニュースです。

アナウンサーが淡々とニュースを読み上げている。

また、この件ではすでに自由党の只野義一議員が事情聴取されており、暴力団の洗神組との関係が……。では次のニュース。

宏章がテレビの画面を消した。

「愛美、部屋の隣に宿直の職員が泊まるようになった？」

「昨日から」

私の部屋の空き部屋には、昨日から宿直の職員が泊まるようになった。

川崎もあれ以来施設には帰っておらず、私は施設の中での安全を以前より感じていたが、何か不安な気持ち振りが振る払えないのだった。

猪口も学校を休んでおり、もうずっと副担任がホームルームを行っていた。

「宏章さん、もしも私の為に何か無理をしているのなら……」

「一番問題がありそうな奴なら簡単に話が付いたよ。職員がそいつの素行を問題視して、他の施設への移動を検討しているところだったらしい。それを本人に通達したんだ。そっちへ移されたらそいつも困るだろうから、施設内でこれ以上好き放題にはできないと思う」

川崎のことを言っているのだろう。

宏章が私と川崎の間にあつたことを知らない様子でほっとしたが、同時に、黙っていることに罪悪感が湧き上がる。

私を安心させるように宏章が言葉を続けた。

「あいつ以外はほっといても問題ないただの腰抜けだと聞いた。別にたいした事はしてないよ。愛美が少し施設で過ごしやすくなるように伝を使って頼んだだけだ。どうして？」

「うっん。なんだか宏章さんが心配で……」

何故とはつきり理由を言うことはできなかった。  
自分でも答えを出せているわけではないのだ。

宏章は笑って私を見た。

「愛美は心配が趣味だから困ったもんだな」

宏章が「じゃあ、二人でもう一度心配を解消しよう」と言い、私

を抱き上げベッドに横たえる。

宏章の肩越しに見えるパソコンのディスプレイの中で、美しい桜がまたいくつもの花びらを振らせ始めた。

猪口が逮捕されたと聞いたのは、それからしばらくたった頃だった。

今朝は登校途中の生徒に、テレビ局のリポーターが猪口の話进行こうと躍起になっていたらしい。

「後援会のお金を使い込んでいたの。監査は来月の予定だったのだけれど、今回はたまたま繰り上げられたので見つかったのよ。この一ヶ月の間に二百万近く」

保健室の椅子に座る私にいつもの紅茶を出しながら佐久間が言った。

「正式な処分は後日になると思うけど、すでに事実上の懲戒免職よ。今までの学校でも卒業生に性的関係を強要していて、他にも数人の女性が連名で訴えたところだったの。」

この学校でのことは表ざたにされないわ。未成年に与える心の傷の大きさを考慮して、私が児童相談所の職員と一緒に被害を受けた女の子をカウンセリングすることになったの。他の先生方も知らないし、校長も名前を知らされていない。知っているのは私だけよ。学校には匿名で経過を報告することになっているの」

「そうですか……」

肩の荷が一つ降りた気がした。

この学校で私と同じように苦しんでいた少女達も、佐久間にならきつと心を開くだろう。

それにしても、猪口が学校のお金を使い込んでいたのが気になった。

川崎は猪口を脅していると言っていたが、果たして彼だけの力で大人を相手にそこまでの金額を揺するものなのだろうか。

「蔵木さん、よかつたら明後日の日曜日、私のアパートに来ない？  
あなたが心配してる優花ちゃんが退院する時、お祝いの可愛いケーキを作ってあげたら素敵だと思うわ。ゆっくり練習しましょ。私から施設に許可をもらってあげる」

「ありがとうございます。でも、その日あの、知り合いの……華南サッカー部の選手と、兄の高校が練習試合をするんです。だから、見に行きたいと思って……」

私が「知り合いの」と言いながら少し頬を染めたのを見て、佐久間が優しく微笑んだ。

「きっと素敵な子ね。華南の選手さん」

私はますます赤くなった。

「とても、信頼できるんです」

「何時から試合はあるの？」

「午後一時からだそうです」

「そうなの。じゃあ午前中早くからお菓子を作って、午後からお兄さんや、その知り合いの子にでき立てのお菓子を持って行ってあげるのどう？」

「ほんとうですか？ わあ。楽しみ」

私は思わず佐久間に笑顔を向けていた。

自分が作ったお菓子を宏章に手渡すところを想像して気持ちが浮き立つ。

それからまた、自分が陸人より先に宏章を思い浮かべたことに驚いていた。

宏章の存在が、自分の中で日々大きくなっている。

「あら可愛い。蔵木さん、笑窪がくつきりよ。笑うとますます可愛らしく見えるわ。きつと皆、蔵木さんが作ったお菓子を大喜びしてくれるわね」

佐久間もにこにここと笑ってそう言った。

優花が手術をした日から丸一ヶ月たとうとしていた。

昨日優花のお見舞いに行った時、優花は祖母に絵本を読んでもらっていて、うさぎの縫いぐるみを抱いてはにこにこ笑顔で浮かべていた。

ベッド回りは可愛らしい人形や絵本で一杯になり、一時は思わしくなかった容態も急に回復の様子を見せ始めている。

病院で出される食事も残さず食べ、笑顔を多く見せるようになって来たせいか顔色もずいぶん良く見えた。

「身体が治ろうと頑張りだしたんだよ。悪いところは取り除いた。あとは元気になって明るい笑顔を取り戻すだけだ」

結城医師はそう言って私を優しく見た。

「愛美も気持ちが悪く落ちてきてるようだな。この調子で行けば、身体免疫力ももっと高まっていくぞ。よく言うだろう？ 笑うと免疫力が強くなるって。あれはほんとだよ。俺はそんな例を沢山見てきたからね」

施設の中での寺田の態度は相変わらず気持ちの悪いものではなかったが、私は副園長室にはほとんど呼び出されなくなり、女子寮の管理が以前より行き届いて他の少年に手出しされることもない。

先週、霧島代議士の秘書がまた施設を訪問した。

霧島議員は児童擁護団体の役員にもなっていて、こういった施設の人事にも力があるらしく、人手不足の施設に経験豊富な職員が二名派遣されることが決まったと園長が言っていた。

「親父は自分の評判を上げる話にだけは耳を傾けるんだよ。と言っても、直接親父と話したんじゃないくて、秘書に言っただけなんだけど」

転がり落ちたクッションをすんなりした長い腕で取り上げて、宏章はうんざりした口調で言った。



午後の柔らかい日差しの中でいくつも積み重ねたクッションの上に身を投げ出している宏章の姿は、すぐに絵に書き留めておきたいほど独特の雰囲気があった。

青年と少年の中間にいる危うさが、少しけだるい午後の風景に似合っていると思う。

宏章の家の居間の出窓の所は、私達のお気に入り場所になっていた。

宏章は明日の試合に備えて練習に出ていたが、午後は膝に負担を掛けないように早めにメニューを切り上げて、病院にいた私を迎えに来てくれていた。

「以前傷害事件まであった荒れている施設に行き届いた配慮をするなんて、次の選挙演説のネタになるじゃないか。親父が売りにしてる分野だしね。来月総選挙を控えてるから、少しでも善行を積んでおきたいんだろ。」

あれでも親父は自由党の看板議員の一人だから、比例代表区での支持率稼ぎを期待されてるわけさ。そこでの得票数が、実質的な各政党への支持票だし、公明党がかなり力を伸ばしてるからね」

社会科の教科書を思い浮かべて真剣に聞いている私の姿を見て宏章が笑った。

「眉間に皺寄せて聞いてなくても。親父の仕事なんかより、愛美が施設で過ごしやすくなったことが重要だ」

「ありがとう。宏章さん。私、もしかして明日小さなお礼ができる

かもしれないわ」

私は宏章が手作りのお菓子を受け取る場面を想像して、自然と微笑んだ。

きつと喜んでくれるはずだ。

「お礼？ 何だろうな。明日の夜会えるってこと？」

宏章がそう言いながら私の腕を掴んで引き寄せる。

私はバランスを失って、足を投げ出してクッションに寄りかかっている宏章の腕の中に倒れこんだ。

「だめよ。宏章さん。私、もう今日は返らないと。時間がないの」

「何をする時間がないの？」

宏章がからかうようにそう言った。

赤面して身体を離そうとした私を、宏章はそのまま両腕を回してしっかりと抱き寄せる。

「大丈夫。何もしないよ。いや、本音を言えばすごく抱きたくてたまらないんだけど、試合の前日にするとだめだっていうからさ。明日は絶対に負けたくないから迷信でもゲンを担いどく」

「明日遅い時間は無理だから、試合を見に行ってもいい？ その時にね……」

「来なくていい」

言い切らないうちに、宏章は強い調子で私の言葉を遮った。

意外な言葉に驚き、私は言葉を失ったまま宏章の胸に顔を付けていた。

浮き立っていた気持ちが一瞬で沈みこむ。

私が他の部員の目に触れるのが嫌なのだろうか。

施設に暮らしていると一目見てわかるから？

「誤解するなよ。俺だって他の奴ら全部に見せびらかしたいさ」

「じゃあ、どうして？」

消え入りそうな声しか出せなかった。

宏章の心臓の音が私の耳に響いている。

宏章は黙って私を抱きしめた。

その手に力が籠って来るのがわかる。

「愛美は試合の時、俺だけを見ていてくれない。それが耐えられない」

掠れた声で宏章はようやく言った。

俺だけを見ていてくれない。

自分の身体を流れる血がとくとくと音を立て始める。

「愛美を誰にも渡したくないんだ……。たとえ相手が誰だろうと」

宏章は、私の陸人への想いを知っているのだろうか。  
彼のシャツを握った手が知らずに強張っていた。



おお、凄いな、愛美。これをお前が？」

佐久間のアパートでお菓子を作った帰り、優花のお見舞いに行き、病院の休憩室で休んでいた結城医師に紅茶のシフォンケーキと何種類かのクッキーを渡した。

「不恰好で恥ずかしいんですけど」

医師はすぐに箱からクッキーを取り出して一つ食べると嬉しそうに目を細めた。

「うまい。うまいよ、愛美。暖かい味だな。シフォンケーキもいい香りで見るからにうまさうだ。うーん、たいしたもんだ。初めてでこれだけ作れるとは」

「学校の保健の先生がとてもお上手で、教えて下さったんです。何もかも始めから。楽しかったです。これからも定期的に教えて下さるって」

「それはよかったな。会った事はないがいい先生だ。俺からも礼を言いたいよ。宏章も大喜びしたろ？」

「宏章さんには、まだ」

私は口ごもった。

「ああ、そうか。今日は一時から試合だったな。陸人のところとや

るって怜から聞いてたのに忘れてた。

薄情な兄だと怒られないように、俺が車で愛美ごとクッキーを運ぶから、今だに決まった彼女もない気の毒な弟にもおこぼれを分けてやってくれないか。

まだ間に合うだろ？ 今から行けば後半から見られる」

「いえ……」

私は首を振った。

「今日はこれで帰ります。施設からそんなに長く出てはいられないし。宿題も……」

「どうして。陸人の試合も久しぶりだろ。さては宏章と喧嘩でもしたか？ あいつは自分が悪いとわかっていても謝れない可哀想な奴だからな。」

愛美がちよっと声を掛けてやれば内心泣いて喜ぶよ。お前のことになる面白いくらい顔に出る」

呼び出し音が鳴り出した電話の受話器を取り上げながら、医師がからかうようにそう言った。

「怜か。今噂してたところだ」

気軽に話し始めた医師の表情が少し陰しくなる。

「何でお前が宏章と……。陸人も一緒ならタクシーでここまで来い。監督の付き添いはいらさないよ。休日だから緊急外来の方にな。顔には氷でもあてとけよ。宏章は？ もう、帰った？」

耳に入った話の断片に動揺する。

受話器を置いた医師が安心させるように私を見た。

「心配しないでいいよ。試合の最中に随分熱くなっちまったらしい。まあ、サッカーだからそういうこともあるさ」

言葉が出てこないまま受話器を握り締めている私の耳に、慣れ親しんだハスキーボイスが聞こえた。

「愛美？」

「陸人……」

「大丈夫だよ。俺の怪我はたいしたことない。霧島となんかあったわけじゃないんだろ？」

「何も。いつも通り宏章さんは優しいわ。おかげで施設でも過ごしやすいになった」

緊張で声が震えているのを悟られないように、慎重に言葉を口から押し出す。

「結城の言うとおり、何か誤解だと思う。それより、最近は随分表情が明るくなって体調もいいと結城先生に聞いている。こんなことはたいした問題じゃないから気にするなよ。わかったね？」

宏章は陸人に何か言ったわけではないのだ。

身体から力が抜け、安堵のあまり受話器を取り落としそうになった。

「私、宏章さんのところに行ってくるわ。陸人も傷はきちんと手当てを受けてね。結城さんにもそう伝えて」

電話を切った後、立ち上がってなんとか笑顔を作り、医師に頭を下げた。

「愛美、宏章がもう少し頭を冷やすまで行かない方がいい。こんな時は、ほとぼりが冷めてから話すに限る」

「でも、宏章さんは今頃きつと凄く落ち込んでいると思うんです」

「ひとりで反省させる時間も必要だ」

医師は私を見て真面目な表情でそう言った。

だが、私はどうしても宏章の顔を見たかった。

いつものように私を優しく見つめる宏章を確認して安心したかったのだと思う。

「そばにいきたいんです。陸人をよろしく願います」

小さくため息をつき、医師が頷いた。

「愛美がそこまで言うのならしかたないな。宏章に、怪我はほったらかしにするなと伝えてくれ」

「はい。わかりました」

その時、行くなと止める医師の言葉に頷いていたら全ては変わっていたのだろうか。



せめて、宏章が何を聞かされていたか知っていたら。

運命の齒車が音を立てて動き出した。

宏章の家のドアホンを何度押しても中から反応はなかった。

まだ夕方までには時間があつたが、十一月の風は冷たい。

私は少し震えて着ているカーディガンをしつかり搔き合わせた。さつき佐久間の家に遊びに行った時にもらったものだ。

帰り際、羽織りものが何もない私に気がついた佐久間が、自分にはもう着ないからと白く柔らかなカーディガンを着せ掛けてくれた。それはほんのりと甘い佐久間の香りがして、まるで見えないヴェールで守られているような気持ちになる。

外から電話を掛けてみようかと公衆電話を探して歩き始めたら、覚えのある男二人に前を遮られた。

「やあ、お久しぶりだね。美人さん。霧島ジュニアに振られたの？」

宏章と二人で過ごした朝、写真を撮ったあの二人組みだ。

とつさにきびすを返して逃げようとした私の前に、そのうちの一人がまた回りこむ。

「逃げなくなつていいでしょ、蔵木さん」

無精髭で落ちくぼんだ目をした男が、薄ら笑いを浮かべながら私に言った。

「ちょっと話を聞きたいだけだよ。御曹司にもて遊ばれてる気持ち吐き出したくない？」

どう答えても、好きなように書かれるのだろう。

だったら何も答えないほうがいい。

「向こうは遊びだよ。」

霧島家の跡取りは、代々必ず政略結婚することになってる。悪い虫が付かないように、高校生くらいで相手を決めるんだ。

彼の父親、霧島広之もそう。彼の一族は皆そうだ。

ジュニアもそろそろ相手に引き合わされる頃だろ。もう会わされてるかもしれないけどね」

「私には関係のないことです」

宏章との未来など、考えているはずもない。

明日のことすら考えてはいないのだ。

私が男の横をすり抜けようとすると今度は腕を強く掴まれた。

途端に全身が硬直し、身体から血の気が引いて行く。

男に乱暴に扱われると、恐怖で縛られたようになり、身体がどうしても動かなくなってしまうのだ。

拒否する声すら出せず、私は怯えながら記者を見上げた。

男がにやりとほくそえんだのがわかる。

「おや。これは驚いたな。男が怖いらしい。このままさらって行っても悲鳴も上げられない子だね。そうだろうなあ、いろいろあったんだろうからねえ」

この男は何を言っているのだろう。

どうして卑劣な男は抵抗ができないものをすぐに見分けるのか。

「震えなくてもいいよ。俺が欲しいものはもう手に入れてるんだ。」

あんたの大事な彼氏にも昨日の夜見せておいた」

男達は顔を見合わせてにやにや笑った。

「何故か君の素敵な写真が手元にあるのさ。相手はこの間逮捕されたあの癖の悪い教師だと聞いた。よつぽど君に固執してたらしくて、一番写真が多かったそうだよ。確かにこんな綺麗な顔でこの身体持ってたらなあ……」

男達が私と写真をじろじろと見比べながら笑っている。

手に持った何枚かの写真を見せられ、あまりのショックでその場所に崩れ落ちそうになった。

いつ撮られていたのかわからない。

それは思い出すのもおぞましい現場だった。

猪口の仕業はあまりに酷すぎた。

「あんたの彼に、昨日の約束どおりちゃんと金を用意するように言ってくれよ。霧島ジュニアが弄ぶ悪名高き施設育ちの美少女の悲惨な写真。今はネットって便利なものもあるから楽しいよね。思い立ったら即公開だ。もっとも、世の中の興味はうわべの同情より扇情的な写真に集まるだろうが」

身体の震えが止まらなかった。

宏章にこれを見られたのだ。

この場で死んでしまいたい。

「児童擁護で有名な議員の息子が施設の少女と淫らな関係にあるのはまずいよね。まして君は教師の性的虐待にあつた悲劇の美少女だ。霧島代議士の立場がヤバイこの時期に、次々身内のスキャンダ

ルを出されちゃ困るだろうしね」

もう、何を言われているのか考えることができなかった。  
身体が冷たく痺れ、足がよろめく。

「お前ら、何をしてるんだ」

聞き覚えのある声。いつの間にか陸人に支えられていることに気がついた。

「別に。何してても兄ちゃんには関係ねえだろ」

「関係ある。俺の妹だ」

男達と陸人が話す声がぼんやりと聞こえる。  
自分が呼吸をしているのかどうかさえわからない。

「妹？」

陸人を制止することもできなかった。  
記者がすぐにあの写真を胸のポケットにしまったのが目に映る。  
だがもうそれすらどうでもよかった。

「妹だって！ お前、慶京の蔵木じゃないか。この子の兄貴だったとは驚いたね！」

男達は目で合図しあった。

「まあ、今のところはお兄ちゃんには関係はない。妹のお願いを聞き届けてくれって、あんたも霧島君を知ってたなら一緒に頼んで置いて

くれ。じゃあな」

歩き去った男達を見ながら陸人が厳しい表情のまま私に言った。

「愛美、どうした？ 霧島の家に向かうって言ってたから、気になつて後を追ってきたんだ。あいつらに何を言われたんだ」

答えることができなかった。

あの写真を見られたら、陸人は私をどう思うだろう。

「……もう生きていたくない」

私はようやくそれだけ言った。

死んだらどれだけ楽になれるだろう。

この世にいてもこうして次々と絶え間なく苦しみが襲ってくるだけだ。

「何を言ってるんだ。霧島に何か酷いことをされたのか。それとも、川崎に何かされてるのか！」

私は首を振り、うわ言のように繰り返した。

「死にたい。死にたいの、陸人……」

「愛美……！ しっかりしろ」

陸人の声が遠く響いた。



どうやってそこに辿り着いたのかわからない。

どこかで見た景色だとぼんやり思った。

所々にあるネオンと、独特の据えた匂いのする細い路地。

暗いその部屋の畳に座らされた時、古びた部屋をがたごとと揺らす電車の音が近くに聞こえた。

「親父が住んでたんだ。今は空き家だよ」

まだ電気がつくんだなと言いながら、陸人が薄暗い部屋の蛍光灯を付けた。

煤けた蛍光灯が、いくつか物が捨て置いてあるだけのがらんとした部屋を照らし出す。

陸人の父。

私達は父親が違うのだ。

なぜ母を同じくして生まれてきたのか。

冷たい壁に寄りかかる私の脳裏に、母といたあの部屋の風景が幻のように蘇る。

「考えて見れば、ほとんど一緒に暮らしたことはなかったな」

陸人が私の横に座り、同じように冷たい壁に背をつけて言った。

「俺の家族はもう愛美だけだよ。」

親父とは高校入学と同時に縁を切った。いろんな方法で稼いだ金



を、ここに住んでた親父のところに持って来てたんだ。親父は足が不自由だから、まともに働くことができなくてね。適当に女を作っては宿と飯をまかなくてたんだよ。

俺達のお袋と別れた後に結婚した女のおかげで、国籍だけは取ってたんだけどね。俺が持つてくる金は全部やばい薬に使ってた。怪我した足が痛むから、それを忘れるためにつて……」

重い沈黙を破るように、ぼつぼつと話を続ける。

「愛美も知ってる通り、俺たちはまともにバイト先も探せない。保証人が、未だに施設の園長名だしね。あまり口には出せないこと……見つかったら退学になるようなことで金をいくら稼いでたんだ。将来のことを考えると、とてもこんなことは続けていられない。そう言つて親父に最後の金を渡したのが十ヶ月前かな。

それでも時々気になってここに来てたんだけど、二ヶ月前から姿が見えない。もう、探す気力もないよ。生きてるのか、死んでるのかもわからない」

私達は壁に寄りかかったまま、ずっと黙って座っていた。

「何で生まれてきたのか、俺もずっと考えてる。生きてることに何の意味があるのかって」

陸人はそう言ったきり口をつぐんだ。

重く長い沈黙。

私はようやく答えた。

「陸人には誰よりも素晴らしいサッカーの才能があるもの。私には何もない」

生まれてきた意味など一つもないのだ。

「俺がサッカーを続けてるのは愛美のためだよ。一人で生きていくのなら、何がどうなってもいいんだ」

陸人はそう言って、横に並んで座る私の身体を抱き寄せた。

「死ぬなんて言うなよ、愛美。お前が死んだら俺にももう生きてる理由なんかない……」

もうずっと人の住んでいない部屋は、身体の芯が凍りそうなほど寒かった。

それとも、私の心が絶望に冷え切っていたせいかもしれない。

知らずに泣いていた。

とめどなく涙が頬を伝う。

命を絶つつもりだった。

この世のどこに救いがあるというのか。

「陸人、私は……」

陸人の身体に腕を回し、肩に顔をうずめた。

次から次へと湧き上がる涙が陸人の服を濡らす。

「私はずっと陸人が……」

もうどうなってもよかった。

明日は永遠に来ないのだから。

「言つな」

陸人が遮る。

「口に出しちゃだめだ……」

陸人は知っているのだ。

嗚咽を止めることができない。

「もういいの。私は」

「それ以上、何も言わなくていい」

陸人が私を強く抱きしめ、耳元で苦しげに囁いた。

「お前が罪を被る必要はない」

陸人の身体から、私と同じ想いが伝わってくる。

同じ想い。

このまま死んでもいいと思った。

陸人が私に回した腕に力が籠る。

私達は抱き合ったまま、冷たい畳に崩れ落ちた。

夢中で抱きしめ合うその感触に、私はこの世の苦しみ全てを忘れた。

身体の上に重なる陸人に腕を回し、きつく抱きしめる。

抑えていた想いをすべてぶつけるかのように、陸人が私を組み敷いた。

私を間近から見つめる陸人の熱を帯びた瞳。

その指が、私の髪を、喉を、狂おしく辿る。

そして、頬と唇を。

夢にまで見たこの瞬間に、頭が痺れたようになる。

二人を抑えられるものは、もう何もなかった。

理性にどんな意味があるというのか。

陸人の浅黒い指が、私の制服のブラウスのボタンをもどかしそうに外していく。

身体中を吹き荒れる情熱に逆らうことができない。

その時、私達は結ばれるはずだった。  
恐ろしい永遠の罪と共に。

だが、ブラウスが私の身体からはがされることは無かった。  
私の首に掛かるクロスの鎖が、内側からブラウスの糸に絡み付いていたのだ。

陸人が力づくで引つ張って糸を引き千切ろうとしたが、その度クロスの太い鎖が私の首を締め付けた。  
何度繰り返しても、それはまるで意思を持っているかのようにますます強くブラウスに絡みつく。

「陸人……。痛い……」

小さな悲鳴をあげた私の声で我に返ったように、陸人が私を見下ろした。

荒く息をつき、手にしたクロスを見つめている。

「外れない」

首のクロスは、陸人の目から私の身体を遮るように、ブラウスを離さなかった。

ただ一枚の布が私達を遠く隔てていた。  
胸の動悸が徐々に治まり、二人の間にあった狂おしい情熱が急速に冷めていく。

私達はただ静かにお互いを見つめ合っていた。

一度頂点まで達した想いが、何か違う感情に変わっていくのを感じる。

陸人はようやく私から目を反らすと、カーディガンを拾い上げ、私に手渡した。

「着ろよ、愛美。そのままじゃ寒いだろ」

肌蹴た胸元を隠すように身を起こし、カーディガンを羽織る。絡みついたクロスを手にとると、その途端、不思議な事にブラウスに絡み付いていた糸がするすると解けた。

「ずっと思ってた」

陸人は私の胸に掛かるクロスを見て言った。

「そのクロスは、俺たちの母親を思い出させる。それを見る度、愛美とは血の繋がった兄妹なんだと言われている気がする……」

これは、お守り？

宏章の言葉を思い出す。

今まで、このクロスに呪われていると思っていた。

だが、私達が最後の一線を越えることを引き止めてくれたのは、間違いなくこのクロスだ。

陸人が静かに言った。

「ずっとお前と同じ気持ちだったよ。俺の渴望や嫉妬の強さはそれ以上かもしれない。」

俺が心の奥に秘めていた想いは愛美より罪深い。

押さえているのが苦しかった。いつそのまま墜ちてしまえばいいと何度も思った。

でも、そうしてしまっただら、俺も愛美もこの世でただ一人の肉親を無くすことになる」

兄と妹。

たとえばほとんど一緒に暮らしたことはなくとも、私達は兄妹だった。

離れていても、心を寄り添わせて生きて来たのだ。

「帰ろう、愛美。送るよ」

陸人の言葉に頷き、私は背中を向けて着ていた服の乱れを直した。

陸人が私を見つめているのがわかる。

私が振り返った時そこにいるのは、二度と手を触れることはない実の兄だ。

身支度を終えた私を、陸人が手を差し伸べて立たせてくれた。

私達は二人でその古い家のドアを閉め、お互いの胸にあった想いを永遠に封印した。

「宏章さんの所に寄って行きたいの」

私は隣を歩く陸人にそう言った。

いつの間にか、みぞれのように冷たい雨が降り出していた。広く整備された道路を、眩しいライトをつけた車が行き交っている。

暗く濡れた道路に、外灯の明かりが白く映っていた。

「大丈夫か？ あいつ、様子が変だった。川崎に何か聞いたと言つて、試合中に一回接触したのをきっかけに、俺に殴りかかって来たんだ。止めに入った結城にまで食って掛かった。回りも驚いてたよ。気は強いが、感情で試合をめちゃくちやにする奴じゃない」

宏章は昨夜あの男達に写真を見せられている。

それだけが理由なら、陸人や結城に怒りを向ける理由はない。

川崎は宏章の感情を激しく揺さぶる何かを言ったのだ。

私の写真で宏章は恐喝されている。

あの男は霧島代議士の今の立場が危ういと、そんなふうに言っていないかっただろうか。

宏章の家は暗く、宏章の部屋の明かりだけがぼんやりとついている。「一人で家にいるわ。彼はいつも一人なの。宏章さんに会って初めて、家族に囲まれながらの孤独があることを知った」



陸人は顔を上げ、広い敷地の中にそびえ立つ大きすぎる家に、たった一つだけともる明かりを黙って見ていた。  
冷たい雨の滴が、陸人の髪を濡らしている。

「お前が家に入るのを確認してから帰るよ。もう辺りも暗い」

私を見ずに、陸人はそう言った。

宏章の家の、閉じられた高い門の前で、ドアホンを押す。

「宏章さん……」

何度繰り返しても返答はない。

もう一度、私はドアホンに向かって言った。

「宏章さん……。私よ。お願い。どうかここを開けて」

少し間が開いた後、門のロックが外れる音がした。

「中に入るわ。ありがとう、陸人」

陸人は無言で頷いた。

背の高い兄の影がそっと離れ、夜の闇の中へ消えていく。  
黒いベンチコートのポケットに手を入れ、視線を落として歩き去る兄の後ろ姿が、私の瞼に焼き付いた。

門をくぐり、重い玄関のドアをノックする。

中から、ガチャリとドアチェーンを外す音がした。

「こんな時間には出られないんじゃないかなかったのか」

宏章は自分の部屋に私を通すと、皮肉な口調でそう言った。  
気だるそうにベッドの上に座り、背もたれに寄りかかる。  
シャワーを浴びたばかりのようだった。

濡れた黒髪のせいで、余計に表情がやつれて見える。  
その顔には、さっきの陸人のような傷はない。  
兄も結城も、宏章に手出しはしなかったのだろう。

私はドアの前に立ったまま、さっきからまだ一度も目を合わせてはこない宏章に言った。

「宏章さん、もう少し前に、一度この家の前に来たの。この間、写真を撮っていた男の人達に捕まって、携帯を見せられたわ」

宏章の身体が緊張したのがわかる。

彼は背もたれに寄りかかったままうつむいて、見たものを否定するかのよう眉をひそめ、目を閉じた。

「学校の教師に乱暴されていたの。その教師はこの間、他の事件で逮捕された。宏章さん、私のことであんな男の人達の言いなりになることなんかない」

私の言葉に、宏章はすぐに反応した。

「あの動画がばら撒かれるんだぞ！」

静まり返った部屋の中に、苦しげな怒鳴り声が響き渡る。

「もういいのよ。私は汚れきっているの。あの写真が私の本当の姿だから……」

私は言った。

もう、隠しておく事はできない。

「あれだけじゃない。私は」

「やめる！」

宏章は、ベッドの横の壁を、腕で思い切り叩きつけた。

長い沈黙の後、宏章は、掠れた声で苦しそうに言葉を押し出した。

「試合の前、川崎って赤い髪の奴が俺を呼び止めて、お前が教師に何をされていたかを言った。教師だけじゃない、あいつもお前を抱いてると。それどころか、愛美は誰に求められても逆らわない女だから、陸人がいなくなっただけからは、いつも施設中の男の慰み者だったって……」

意外な言葉ではなかった。

玖出にあれだけこだわっていた川崎が、宏章を嫉妬して逆恨みする事など、簡単に予想できたはずだ。

「俺が信じないと否定すると、じきに真実がわかるとあいつは笑った。もうひとつ、愛美が俺に隠し通していることがあると、捨てぜりふを置いていったよ」

私はただ黙って宏章の言葉を聴いていた。

「愛美、お前は陸人と……」

宏章はようやく顔を上げ、暗く沈んだ眼差しで私を見た。

「お前の首のクロスは、陸人がかけたのか？」

すぐに言葉を返せなかった。

宏章の言葉を全て否定するには真実が重すぎたのだ。

一瞬の沈黙を、宏章は肯定と捉えた。  
打ちのめされた表情。

「陸人とはそんな関係じゃないわ。……私達は兄妹よ」

私の言葉は、すでに何の意味も持たなかった。

「華南のコートで会った夜、お前が泣くほど想っている相手は伶なんだと思った。お前が自分の置かれてきた環境に苦しんで、伶に想いを打ち明けられないんだって。」

伶はそんなことを気にする奴じゃない。だけど、お前が俺の親友を好きなんだと思う方が、あの病院で会ったときの陸人の目が何を語っていたかを考えるよりましだった」

宏章は、俯いていた顔を上げ、わたしを見た。

「川崎からお前がされてきたことを聞いたときも、陸人が施設を出なければお前を守れたのにとあいつを恨み、伶がそんなお前の気持ちを汲んでやらずに苦しめたんだと腹まで立てて、試合中に暴れたよ。大笑いだろ？」

携帯を突きつけた男どもに金を払うと約束し、どうか画像を渡してくれと頭を下げた。相変わらず大馬鹿な俺は、さっきこの目でお前らを見るまで、川崎の言葉を信じなかったのさ」

宏章は自嘲気味に笑い、そこで言葉を切った。

彼は私と陸人の後を追ったのだ。

カーテンもない、陸人の父の空き家。

「何もなかったわ。信じて、宏章さん」

「陸人がお前を押し倒すのを見た。お前が陸人を抱きしめるのも、とてもその後を見ていられなかった」

宏章が苦しげに顔をしかめる。

「あれで最後までいかなかったって言うのか。それを信じるほどガキだとも？ いい加減俺を馬鹿にするのはやめろ！」

何を言っても真実が変わるわけではない。

これ以上宏章を傷つけたくなかった。

彼には何一つ罪はないのだ。

「ごめんなさい。恐喝には従わないで。もう、二度とあなたの目の前に姿を現さないわ」

私はそれだけ言うと、宏章に背を向けドアノブに手を掛けた。

「待てよ！」

ベッドから降りた宏章が、私の腕を強引に掴んだ。

「それほどまでに好きな男がいながら、なぜ俺に抱かれた。お前はあいつの言う通り、男なら誰でもいいのか」

「宏章さんがそう思うのなら、それでいい」

もう、新たな心の傷の痛みを感じることもすらできなかった。  
掴まれている手を引いたが、宏章はその手を離さない。  
その目には、屈辱と嫉妬の激しい炎が燃えている。

「男の部屋に上がりこんできたんだから、やらせるつもりなんだろう。  
俺はお前とやりたいんだよ。お前には簡単なことだろう？」

「やめて！」

宏章に引きずられ、力づくでベッドの上に押し倒された。  
私の上に馬乗りになった宏章が、無理やり身体を押さえ込む。

いつもと同じ。

幼い頃から、繰り返されてきたことだ。

他の誰でもなく、宏章にそうされていることが悲しくてたまらなかった。

「何人の男とやったんだ！ 言えよ！ 俺と付き合ってから、まだ他の男と寝てたんだろ！」

無理やり引き裂かれたブラウスのボタンがはじけ飛ぶ。

さっき私を守ってくれたクロスは、今はただの金属の固まりになって、冷たい光を放っているだけだった。

宏章はクロスを握って鎖をぐつと引っ張ると、手負いの獣のような黒い目で私を見つめた。

「あの記者が教えてくれたよ。俺は親父と愛人の子だそうだと。その愛人はお袋の実の妹だって……。明日から一斉に報道される、親父

の一連のスクープの皮切りになると」

驚いて宏章を見上げる。

宏章は出生の秘密を知ってしまったのだ。

残酷な現実の全てが彼の心に鋭いナイフを突き立て、ずたずたに切り裂いていた。

「俺は何も知らずに実のお袋を愛してたんだ。笑い話の総仕上げじゃないか。あの人の家族の葬式の夜、抱き合ってた男は俺の親父だったんだよ……」

血を流すような言葉だった。

「宏章さん……」

「何もかもどうでもいい。もう、誰も信じない。誰一人、俺には真実を教えないんだからな。何も知らされずに同情されるのは真つ平だ！」

宏章が手に持ったクロスの鎖を強く自分に引き付けながら、私に押し掛かった。

鎖が首に食い込む。

痛みで顔を上げた私を離さず、残酷な強いキスをする、宏章は突き放すように私を見下ろした。

胸が締め付けられるほど傷ついた表情をして。



思わず差し伸べた私の手を、宏章が乱暴に振り払う。

「同情するなって言ってるだろ！ それ以上酷い仕打ちがあるかよ！ お前はいつたい何様のつもりだ！」

その言葉で、私は自分が彼に何をしてきたのかを知った。  
宏章の言う通りだ。

いったい私は彼の何をわかっていたというのか。

抵抗をやめた私を、宏章が強引に貫く。

愛撫もなく、服すらほとんど脱がせないままに。

その痛みに呻き声が漏れた。

宏章が、涙を見せずに泣いている。

私の痛みは宏章の痛みだ。

彼は私を犯しながら自分を傷つけている。

私は宏章の身体の下で、自分の罪の全てを受け止めていた。

兄を愛してしまった罪。

男達に逆らわず、抱かれてきた罪。

そして、宏章への同情を隠して彼を受け入れた自分の傲慢さを。

恐ろしくて逆らえないと自分に言い訳をしながら、私はさまざまな人生の苦しさから逃げてきたのだ。

相手に同情することで、自分は悪くないのだと思い込もうとしていた。

私は覆いかぶさる宏章の身体に腕を回し、きつく抱きしめた。

「最後まで、離さないで」

宏章が驚いて動きを止め、私を見下ろす。

「そうして欲しいの。好きよ。宏章さん」

心にある言葉をそのまま口に出したのは初めてだった。

「嘘をつくな！ 俺のことなんか、好きはずがない」

私は宏章の目を見て言った。

「あなたが好き。病院で初めて見た時からずっと」

陸人以外の男を好きになるのが怖かった。

恋をして、傷つくことを恐れていたから。

私と陸人はお互いにそうだったのだ。

決して傷つけられられたり、裏切られたりされない相手を求めていた。

私をじつと見つめていた宏章が、苦しみを堪えるように、掠れた声で言った。

「信じてない。お前の言葉も、誰の言葉も……」

宏章の頬に手を触れる。

「信じてくれるまで何度でも言っわ」

涙が溢れ、頬を伝い落ちた。

宏章に、同じ言葉を繰り返す。

「好きよ……。宏章さん……」

「……畜生」

宏章が呟いた。

「畜生！」

彼は私のブラウスに手を掛け、それを剥がし取った。

「俺は、お前が好きだなんて認めない」

ベッドに投げ出した私の手に自分の指を絡め、強く握り締めて宏章が言った。

「どうしようもない程お前が好きだなんて、絶対に認めないぞ……」

繋ぎあった手から、彼の想いが流れ込んでくる。

私は、溢れる涙を拭わないまま、その言葉に頷いた。

私の身体を覆うものを、宏章はすべて取り去った。

自分の服も脱ぎ捨てた宏章が、全裸の私を組み敷く。

二人を遮るものは、もう何もない。

宏章は、私の胸のクロスだけを外さなかった。

それが私の身体の一部であるかのように。

銀の重い鎖ごと、彼は裸の私を強く抱きしめた。

宏章の唇が触れる。

私の身体を自分に刻みつけるように。

深く強く繋がる身体。

吐息を漏らした私を抑え、宏章が繰り返し身体を打ち付ける。

私は宏章に腕を回した。

熱い宏章の身体。

私が生きていることを教えてくれる宏章の　　。

最後の瞬間まで、宏章は私を離さなかった。

そして、私も。

始めて本当に結ばれたことを確認するかのように、私達はそのまま、いつまでもお互いを強く抱きしめていた。

私の忌まわしい写真が公開されることはなかった。

宏章が記者の揺すりに従ったのだろっ。

彼は私だけを守ってくれた。

自分のことはそのままに。

その金額がいくらであつたのか私にはわからない。

宏章はあの日以来私に一度も連絡をよこさず、携帯電話はずっと電源が切られたままだった。

宏章の家に訪れることすらできなかった。

陸人だけでなく、結城医師にも強く止められていたのだ。

「どつちみち、宏章は今あの家にはいないよ。どこから学校に通っているかは俺も言えない。今愛美が関わっては、余計にあいつを苦しい立場に追い込むことになる。わかるね？」

宏章の部屋であの日最後に会ってから、一ヶ月半近く経とうとしていた。

テレビや新聞では相変わらず霧島代議士の一連の報道が止まらない。

衆議院の総選挙を前に、自由党の看板議員である宏章の父のスキヤンダルが次々と暴露されたのはあの翌日からだった。

女性や子どもの擁護と精悍な容貌で絶大な支持を集めていた代議士の乱れた家族関係はセンセーションを巻き起こし、代議士が今まで築きあげてきたクリーンなイメージは一瞬のうちに崩れ去った。

家族まで持っていた、妻の実の妹との長い愛人関係。  
妻の夜遊びと乱れた交友。

そして今まで代議士のイメージアップに貢献していた優秀な息子の自堕落な生活。

次々と出てくる慈善事業団体との癒着や談合の疑惑。

女性週刊誌やワイドショーが飢えたように食らい付き、顔はぼかされたが宏章と私の写真が数多くネットで流れた。

私達の大切な思い出に下卑たタイトルをつけて。

自由党議員の贈収賄に暴力団が絡んでいた事件でもその後二人の逮捕者が出て、党は大打撃を受けた。

総選挙で自由党は歴史的な惨敗を記し、ライバルの新民主党が政権奪取を成し遂げた。

霧島議員は比例区で議員の地位を確保したが、他の党ばかりか自由党内からも突き上げは厳しく、立場は危ういものになっていた。代議士は、今だに逮捕者が続く渦中の贈収賄事件にも大きく関与していると噂され、彼を糾弾した新民主党の代議士はまるで自分がヒーローになったかのように振舞っている。

政治家は一枚皮を剥けばみんな一緒だと宏章が皮肉に言っていたのを思い出す。

宏章の父は世間が言う通りの酷い人間なのかも知れないし、吊るし上げている方がもっと酷いのかも知れない。

表面では善人の顔をしながら裏で弱者を踏みつける大人を、私は何人も見てきた。

政治の世界や大人の社会がどうやって動いているのか、私にはわからない。

けれど、これだけははっきり言える。

宏章は大人たちの汚い世界の餌食になった。

自分が置かれた環境と一人で必死に戦っていた少年を、私利私欲のために、彼らは無残に踏みつけたのだ。

宏章の姿を二十日ほど前にテレビで見た。

新年に決勝戦がある天皇杯の二回戦で、彼はキャプテンマークを外し、応援席から試合を見つめていた。

膝の痛みを押し隠して続けてきたサッカーすら、大人達は宏章から奪ってしまった。

退部にならなかったただけでしたと結城は私に言った。

私と宏章の関係は、確かに未成年が望まれる行動の範囲を超えていたかもしれない。

だが一般の高校生に比べ、世間にそこまでの非難を受けるようなものだったとも思えない。

少なくとも、私達はお互いを真剣に愛していた。

学校側の厳しい意見に対し、監督と結城を含む他の部員達が宏章を擁護したという。

陸人が中心選手になっている慶京高校が天皇杯で高校初の準々決勝まで進んだのを、宏章はどんな思いで見っていたのだろうか。

「世間なんて飽きっぽいものだ。全てがなかったことの様に忘れ去られる日が必ず来る。気持ち落ち着けて、焦らずに待っていないさ  
い」

診察室で結城医師は私にそう言い、カルテに薬の名前を記してから少し考え、それを棒線で消した。

「なぜ微熱が引かないかな。愛美、今度は他の科の診療を受けてみたらどうだ？」

婦人科の診察を受けると暗に言われているのがわかっていった。

「はい。でも、今日は時間がないので次の機会に。必ず……」

結城医師の聡明な眼差しに心の中を見通されているようで、目を逸らさずに答えるのがやっとだった。

「最後の生理はいつ？」

「一週間前です」

「そうか……。日数も、ちゃんと？」

「はい」

「何か変わったことは？」

「ありません」



たしかに一週間前に出血があった。

下腹の鈍痛と共に、二、三日下着を濡らす程度の少量の出血。

宏章の部屋で最後に会ってから生理がない。

ずっと酷い精神状態にいたので遅れているのだと私は無理に自分を納得させていた。

今までどんなにいい加減に私を扱う相手とでも、一度も妊娠したことはなかった。

母の恋人に初めて犯された時も。

私の身体を傷つけないように、あれ程避妊に気遣ってくれていた宏章が、たった一度私の中で想いを遂げただけで妊娠することなどありえない。

「保健の、佐久間先生だったかな。もし何か不安なことがあったら、その先生に相談しなさい。いいね？」

「……わかりました」

けれど、本当はわかっていたのだと思う。

医師から処方される抗生剤をもうずっと飲んでいなかったし、体調の不調を理由に体育を休んで見学していた。

無意識にお腹の中の小さな命を庇おうとしている自分がいたのだ。

「そうそう、今日は怜が来てる。待合室にいますから帰りに声を掛けてやってくれ。あいつ、クリスマス・イブを理由に愛美をデートに誘うつもりかもしれないぞ。何しろ、俺に似ないで不届き者だからな」

緊張した表情をしていたのか、医師が私を和ませるように微笑んだ。

「先生の弟さんは、イブと一緒に過ごしたい女の子に整理券配つてると思います。女の子にすごく人気があるって、宏……誰かが言ってます」

軽い調子で答えたつもりだったのに、宏章の名前を口から出すことができなかった。

私は自分の気持ちを振り切るように立ち上がり、医師に頭を下げた。

「いつも気遣ってくださってありがとうございます。お礼にもならないんですけど、これ、よかったらあとで召し上がってください。昨日、佐久間先生と一緒にケーキを焼いたんです。少し甘みを押さえたチョコレートケーキ。お口に合うといいんですけど」

「俺にだけ？ 伶に取り上げられそうだな」

医師はケーキの箱を受け取ると、嬉しそうな顔で中を覗いた。

「弟さんの分もちろん持ってきました。陸人は高校選手権が近くでずっと合宿だから、クッキーを焼いて送りましたし。優花ちゃんにも。おばあちゃんの家ですごく幸せにしているみたいで良かったです」

「ああ。病気や手術は大変な事だったが、変わりにあの子には掛け替えのない家族ができた。何が運命を変えるか、わからんもんだな。最悪だと思えることが幸せを呼び寄せるきっかけになることもある。希望を捨てない限り、人生は必ずなんとかなるもんだ」

医師は私を見つめ、力づけるように言った。

「終わりよければ全てよし。俺の座右の銘だよ。昔から筋金入りの楽天家だね」

病院の大きな待合室へ向かうとき、いつも無意識に宏章の姿を探している自分に気付く。

ここで背の高い少年の姿を見たのがまるで昨日のこのようだ。黒いスポーツバッグを持った、少年の後姿。

窓から見える中庭には、コスモスの花が咲き乱れていた。声をかけると驚いたように私を見て、慌てて目を逸らした。その照れた表情。

何もかも胸が締め付けられるほど懐かしく、愛しかった。自分の気持ちにもっと早く気がついていたら、彼をあれほど傷つせずに済んだだろうか。

「愛美姉ちゃん！」

名前を呼ばれたことに気がついて顔を上げると、ちょうど入り口のほうから少女が走ってくるどころだった。

赤いダッフルコートに白い毛糸の帽子を被った優花が私に抱きつく。

「おばあちゃんと日向園に行ったら病院に行ってるって言われたの。愛美姉ちゃん、具合悪いの？」

心配そうに聞く優花に、私は笑って答えた。

「うっん。たいしたことないのよ。それより優花ちゃん、もう走れるようになったのね。コートも良く似合うわ。可愛いサンタさんみたい」

「おばあちゃんが買ってくれたの」

優花がはにかんで笑った。

「優花、すごく元気だよ。もう何でも食べれるの。お姉ちゃん、昨日の夜クッキーが届いたよ。今日まで我慢しようと思ったけど、ひとつ食べちゃった。すごく、すごくおいしかったよ」

「ありがとうございます。嬉しいな。また作ったら送るから、たくさん食べてね」

ようやく孫に追いついた優花の祖母が、優しい笑顔を浮かべながらやって来た。

「ありがとうございます。蔵木さん。私までおいしい物を頂いてしまって」

「いいえ。喜んでいただけたのなら嬉しいです」

そう答える私に、優花の祖母は大きな紙袋を差し出した。

「蔵木さん、これね、受け取っていただきたくて。私はこんな年ですから、デパートの若い店員さんを選んでいただいたんですよ」

「優しくて天使みたいに綺麗なお姉ちゃんだって、優花、言ったの」

水色の紙袋の中に、白い薄紙で包まれた洋服のようなものが入っている。

「そんな。頂けません。私……」

「優花とお揃いだよ、お姉ちゃん」

優花がにこにこ微笑む祖母の手を握り、嬉しそうに私に言った。

「こんな形の色違いのコートなんですよ。優花に良くして下さってありがとうございます。お礼にぜひ受け取っていただきたいんです」

優花の祖母に紙袋を持たされて戸惑って立っていると、優花が喜んで声を上げた。

「あつ。サッカーのお兄ちゃんだ」

その言葉にドキツとして振り返る。

「やあ、優花ちゃん。元気になってよかったな」

結城だった。

宏章と同じ、華南の黒いスポーツバッグを持っている。

結城は優花が入院していた時に時々見舞っていたので、今ではすっかり仲良くなっていた。

優花は祖母や結城医師、それにこの快活な医師の弟のおかげで、退院する頃には私以外の人も少しずつ話せるようになっていたのだ。

「うん。ねえねえ、お姉ちゃん、このコート着てみて……。きっとお姫様みたいだよ。王子様が迎えにくるよ」

優花は私にそう言っただけで、こり笑った。

「終業式が終わった帰りに、そのままこっちへ寄ったんだ。例年イブは仲間と夜通し騒いでるんだけど、今年はめんどくさくて逃げてきた。俺もオヤジになったもんだ。兄貴にパワーを吸い取られてんだよ。二人暮しも二年目だからさ」

優花たちと別れて病院から出た後、私と並んで歩きながら結城がそう言った。

相変わらず、彼の明るい話し方は聞いているものを和ませる。

「御両親はまだずっと海外にいらっしゃるんですか？」

「うん。海外に在住しなくちゃならない仕事でね、日本にはほとんどいない。おかげで気楽なはずだったんだけど、兄貴がうるさくて夜遊びもままならない。自分は遊び放題の癖にね」

「先生が遊んでるって、お忙しくてそんな暇なさそうに見えるけど」

結城はうんざりした顔で溜め息をつき、私を見た。

「時間がないのと遊ばないってのは別ものだって愛美に説明するには十八禁コード外さないと。やばいよ、奴は。朝一で病院行ってる。朝飯代わりに点滴打って書類かいてるから。マジでさ」

「まさか」

私が笑うと結城も笑った。

「ドリンク剤飲むより効率いいんだってさ。俺が作る夕飯にいつも文句つけるから、今度皿の上に点滴置いてやろうと思ってる」

私は学校を休んだまま二学期を終えた。同級生は受験勉強の最終の追い込みに入るのだろう。

私は卒業後すぐに寮に入って働けるように新しい進路指導の先生と相談していたが、なかなか就職先が決められないでいた。

先生は親身になって仕事を探してくれるのだが、不景気のあおりで中学卒業の生徒を雇用するところがほとんどないのだ。

ごくわずかにある住み込み採用の職場は三交代制の工場などがほとんどで、私の場合は体力的に難しいと医師からも止められていた。進学するにしても就職するにしてもできる限り協力すると医師は言ってくれているが、これ以上迷惑はかけたくない。

そのためにも、はやく自分で就職先を見つけて独立したかった。

「明日から冬休みですね。高校選手権に向けて、サッカー部も練習が大変でしょう?」

沈黙していたことに気がついて、話しやすい話題を振ったつもりだった。

けれど、結城は私の心にしまった気持ちを汲んでくれていた。

「まあね。今日半日だけ休みで、冬休みはないようなものだ。あいつも毎日出てきてるよ。監督もいつまでも学校の言いなりになってはいないと思う。いい選手だからね。奴がいないとチームが締まらない」



結城の思いやりが嬉しかった。

宏章はどんな時でもうつむかず、顔を上げて歩いていく人だ。回りが誤解を解いてくれる日がきつと来る。

「そのコート、似合うな。友達の彼女だとわかってる俺さえくらくらして、怖い誰かにぶん殴られそうだ」

愛美の祖母からプレゼントされたコートはオフホワイトのダッフルコートで、その柔らかな白は小さな頃母に買ってもらったコートを思い出させた。

うさぎさんみたい。愛美、うさぎさんみたいに見える？ お母さん

母との思い出には、いつも私の姿と一緒に見える。まるで、映画の一場面のように。

夢を記憶と思い込んでいるだけなのかもしれない。母と優しく触れ合った記憶が欲しいために。

さつき病院を出たところにあるカフェで、優花の祖母と二人で少し話をした。

何か気がかりなことがあるらしい優花の祖母の様子を気遣って、結城がしばらく優花を連れて席を外してくれたのだ。

「あの子は私に一言も母親の話をしません」

愛美の祖母が辛そうに、そう言った。

「結城先生に、優花が娘に受けていた虐待のことを聞きました。こんな小さな、それも自分がお腹を痛めて生んだ子どもになぜそんな

仕打ちをしたのか、最初は娘に対する憤りで一杯でした。優花も母親を恨んでいるものだとばかり思っていたんです。

私はあの子の手に残る火傷の跡を見て、酷いお母さんねと思わず口に出していました。

その時私を見たあの子の目が忘れられません。私は娘に怒りを向けることで優花を傷つけてしまったのだと気がついたんです」

祖母は言葉を区切り、テーブルに目を落とした。

「私は大きな間違いを犯してしまいました。子どもがどれ程母親を慕うものか、優花の姿を見て初めて思い知らされました。いなくなつた娘も私をそう思っていたのだろうか、自分は娘の本当の気持ちをこの年になるまでわかっていなかったのではないかとずっと考えて……。

……聞き分けのよい、穏やかな娘でした。私があの子の父親と離婚して家を出る時、大丈夫だからと涙も見せずに見送ってくれた姿を思い出して、昨日は眠ることができませんでした」

ハンカチで涙を拭う祖母の姿は、私の心を鈍く痛ませた。悲しみと、怒りと、やるせなさが混ぜ合わさった鈍い痛み。

優花の母の気持ちがわかる気がした。

どこにも行き場のない痛みを抱え、それを消すことができないまま母親になったのだ。

優花の母は、子どもを愛したい自分と憎む自分の間で葛藤し、最後には子どもから目を逸らしてしまったのではないだろうか。自分が苦しさから逃れるために。

私がもし今のままの気持ちで母親になったらどうだろう。

そう思った途端、怖くて身体が強張った。

母親に愛されなかった自分が子どもを愛することができるのだろうか。

私も優花の母のようになってしまっているのではないだろうか。

知らずに下腹に触れそうになっていた手をテーブルに載せる。

こんな自分を母親として選ぶ子どもなどいて欲しくない。

私は気持ちを落ち着かせようとしながら、ようやく優花の祖母に言った。

「おっしやるとおり、優花ちゃんはお母さんをずっと慕っていました。夜寝る時に絵本を読んでもらったことや、手を繋いで公園に出

かけたことを繰り返して話して。

子どもは沢山の辛い思い出よりも、たった一度優しくされた思い出を心に刻むんです。私もそうですから……」

「蔵木さん……」

「私の母は決して褒められた生活をしていませんでしたが、それを他人に非難されるとどうしようもなく腹が立ったものです。母の優しさは他の人にはわからないのだと。優しい時の母が本当の姿だと思っていたんでしょうね……」。

だから、優花ちゃんの気持がよくわかります。正直言うと、私は今でも母に愛されていたのだと思う気持ちを捨てきれないんです」

優花の祖母は私を見つめ、静かに頷いて言った。

「時間はかかるかも知れませんが、娘を探し出したいと思っています。もし、あの子がそう望んでくれるのなら、もう一度やり直したい」

優花の祖母との会話が頭から離れなかった。

心に刺さったまま抜けない棘がある事を思い出したくない。

私は知らずに柔らかな感触のコートごと自分の肩を抱いていた。

「寒いと思ったら、雪だな」

結城がコートの前を掻き合わせ、上を見上げて言った。

今日は珍しく華南の黒い大きなベンチコートに来て、同じく華南のマークの入ったニットの帽子を目深に被っている。

背中に鮮やかなブルーの文字でYUKIとネームまで入っているので、高校サッカーファンの女の子が何人もこっちを振り返りなが

ら通り過ぎた。

医師に良く似たこの弟は、人を惹き付けるものを全て持っている。彼や医師には、全て満ち足りている人特有の落ち着きと大らかさがあつた。

それはいつもとても居心地よく暖かったが、私にはやはり遠い世界だと思うのだ。

「ほんと。綺麗。私、こうして空から何かが降って来るのを見ているのが好きなんです。雪とか、雨とか、花びら」

私は両方の手のひらで雪をそつと受け止めながら言った。  
手のひらの中で、白く美しい結晶はすぐに溶けて消えていく。

「花びら？」

結城が笑った。

「愛美らしいな。こんなに大きな雪は花びらにも見えるね。もう頭に沢山積もってるよ」

私は結城の黒いニット帽を見上げた。

羽根の様に白い雪が頭にも肩にも降り積もり始めている。

「結城さんも雪だるまになっちゃいそう」

「俺の家に寄ってって言い出す格好の口実になると思わない？ほら、なんともう五十メートル先にマンションがある。昨日兄貴に無理やり手伝わせて飾り付けた自慢のツリーを見てってくれよ。俺も兄貴も寂しいイブだから、せめて部屋の中くらいクリスマス気分

分でつてさ。男二人でむなしいんだけどね」

結城の言い方がおかしくてつい笑ってしまふ。

「結城さんもお兄さんも立候補者が多すぎて一人に決められないんでしょう？」

「確かに兄貴は誰か一人に決めたら血の雨が降りそうだ。何であんな奴がいいかね。ここ数日、兄貴、携帯の電源切ってるよ。

悪い男だろ？ さつさと誰かにしつかり捕まえてもらわないと、俺まで巻き添えを食らいそうだ」

そう言う結城の携帯もさつきから引きも切らずに鳴り通しで、ついに彼は携帯の電源を切るとポケットに突っ込んだ。

「そのコンビニで飲み物買ってくるからここでちょっと待ってて。寒そうだからフードはそのまま被ってた方がいい」

結城はそう言って私のコートの大きなフードをさらに引っ張って目深に被せると、私をいきなり抱きしめた。

「結城さん……！」

「意外？　だよ。 もう一つ悪乗り」

驚く私の頬にキスして、結城はベンチコートのフードを被りながらすぐに道路を横切って行った。

こんなことをされたのはもちろん初めてだ。

結城は私にとって陸人よりも兄を感じさせる雰囲気を持っていたから、今まで二人きりになっても何も構えたことはなかった。

混乱したまま立ち尽くしていると、結城が手にペットボトルの手提げ袋を持ってコンビニを出てくるのが、降りしきる雪の向こうに見えた。

どうしていいかわからずに結城から目を逸らし、動揺して顔を伏せる。

道路を大またで渡ってくると、何も言わないまま、結城は私の手を取ってマンションの方へと歩き出した。

「あの、結城さん」

ようやく顔をあげたが緊張で身体が強張ってくる。

手を離そうとしても、結城は私の手をしっかり握ったまま離さなかった。

帽子の上に深く被ったフードでその表情はまったく見えない。

足が速くて追いつくのがやっとだ。  
あつという間にマンシヨンの門をくぐってしまう。

結城の背中を見ながら、このままついていくのに不安を感じていた。

帰った方がいいのではないだろうか。

結城の家には以前陸人と遊びに来たことがある。

彼の家はもとと宏章の家の近くにあったが、両親の海外赴任が長いため、大きな家は親戚に貸して兄弟二人でマンシヨンに住んでいるのだと言っていた。

マンシヨンのセキュリティコードを解除して、エレベーターで最上階に上がる。

「結城さん、あの、私今日は……」

結城は私を後ろに置いたまま扉の前に立っていて、その背中が大きく見える。

いつもとは明らかに雰囲気が変わっていた。

フードで表情が見えないことも、余計に不安を煽る。

結城が怖くて顔を上げられないのは初めてだった。

身体が震え出す。

最上階に着いたエレベーターのドアが開いた時、結城は私を無理やり引き寄せ、強引に部屋に連れ込んだ。

声を上げなくては。

けれど、相手はずっと兄のように思ってきた結城だ。

黒く塗られた重々しいドアを後ろ手で閉め、広い玄関に足を踏み入れた途端、結城が立ちすくむ私を強く抱きしめた。



「嫌」

逃げようと必死になっていた。

身体を捻って結城から離れようとしたが、さらに強く抱き寄せられる。

望まない関係はもう絶対に拒むと心に決めていた。

たとえ相手が結城でも、これは私が望んでいることではない。

「結城さん、やめてください！」

私は意を決して思い切り結城の足を踏みつけ、身体を離れた。

「痛ってえ」

「こんなふうにされるのは絶対に嫌……」

言いかけて、ようやく気がついた。

「伶なら踏みつけるんだ。安心した」

フードと目深に被ったニット帽を取って、宏章が私を見ていた。懐かしい黒い瞳。

「宏章さん」

「コンビニで入れ替わったんだよ。コートだけ取り替えて。俺だとわかってても踏みつける？」

涙でその顔が霞んだ次の瞬間、宏章の腕の中にいた。

私をきつく抱きしめる懐かしい腕。

耳元で、宏章の優しい声が聞こえる。

「久しぶりだな」

「会いたくてたまらなかった。どうして連絡をくれなかったの？」

次々と涙が頬を伝い落ちる。

この目で宏章の姿を見ることができた安堵感で涙が止まらなかった。

「声を聞いたら会いたくなる。会ったらまたお前が苦しむことになるだろ？」

「会わなくても苦しいわ。ずっと宏章さんのこと想ってた……。好きよ。いまでも変わらない」

「もうお前の言葉は信じないって言っただろ」

「信じてくれるまで何度も繰り返すって言っただろ」

言葉はすぐに唇で塞がれた。

堪えていた想いが堰を切ったように溢れ出した、荒々しく、情熱的なキス。

宏章は私を捉えて離さない。

終わらないキスに息が止まりそうだ。

宏章が私の唇をようやく開放し、頬や髪に雨のようにキスを繰り返しながら囁いた。

「変装して来たの？ 見たことがないコートだな」

コートごと私を抱きしめながら宏章が言う。

「柔らかい感触もいいな。似合いすぎてお前を誰にも見せたくないよ。誰から買ってもらった？ 結城先生？ 伶？」

「優花ちゃんのおばあちゃんがプレゼントして下さったの。さっき手を通したばかりよ」

「伶だったら殴り倒してたところだ」

「でも、結城さんが私達を合わせてくれたんでしょう？」

宏章は少し笑ってもう一度私を抱き寄せた。

「まあな。感謝してるよ。あまり長い時間は一緒にいられないんだ。もつとよく顔を見せて……」

それはあの日以来の宏章との再会だった。

「俺と愛美の写真を撮りたい奴がまだいるんだよ。愛美が特別に綺麗なせいで、ネットでも大騒ぎらしい。」

本当はここに伶が愛美を直接連れて来て俺と落ち合うはずだったんだが、病院ですつと愛美を見張ってる奴がいるって電話が来たんだ。イブだからどこかで俺と接触すると思ったのかもな。

今頃そいつらは伶の後を追って華南のコートだ。親父を辞任に追い込むまでやるつもりなんだろう。目的は総選挙だけじゃないらしい」

宏章はリクライニングさせた黒い皮のソファベッドに身体を持たせて、私を抱き寄せたままそう言った。

「別に親父がこの先どうなろうと俺には関係ないけどね。そんなことより俺は愛美を苦しめた奴らを絶対に許さない。あの教師も、川崎って奴も。いつそ教師は警察に捕まらなければよかった」

宏章は厳しい表情で吐き捨てるように言った。

急に少年の面影が抜けてしまったように見える端正な顔には、時々どきつとするほど冷たい影が覗き見える。

彼が世の中を見る目は以前にまして辛辣になっていた。

猪口はその後、自宅から未成年との援助交際の証拠物件が山ほど押収され、児童売春法違反で再逮捕された。

暴力団に恐喝され、短期間の間に一千万近くを脅し取られて逃げようとしたが、死ぬ程恐ろしい目に合わされたらしい。

身体中に打撲や骨折があり、警察に捕まったときには安堵のあま

り泣いていたという。

佐久間が全力で守ってくれたおかげで私のように望まない関係を強いられていた未成年の少女達は取りざたされずに済んだが、川崎が猪口を暴力団に売っていたと思えるのが不安だった。

記者に写真を買ったのも川崎のはずだ。

彼が一番最初に私の行動が猪口の仕事を突き止めて脅していたのだ。

もし川崎があのだまわしい写真をまだ隠し持っているとしたら。

あれ以来川崎は施設に戻ってこない。

施設の少年達が、川崎は今暴力団でもっと大きな恐喝を手伝わされていると噂している。

確かに川崎は相手にわからないように写真を撮ることにかけては特異な才能を持っていた。

いったい彼は何をしているのだろう。

「施設の中は腐りきった屑の巣窟だ。愛美があそこにいると思うと耐えられない」

宏章は施設の中の少年達のみならず、施設そのものを憎悪していた。

そう思うのは当然の成り行きだったと思う。

それでも私は宏章の変化に不安を隠すことができなかった。

彼の黒い瞳の中に、川崎や母の恋人と同じ、暗く燃える光がともるのを見たくはなかった。

「悪い人ばかりじゃないし、繊細で優しい子もいる。あそこからも心から尊敬できるひとが出ているのよ。それに、そうなりたくなくても環境で変わってしまった人もいるの」

「だから自分がされたことを許す？」

私の目を見つめながら、宏章が冷たく落ち着いた声で言った。

「もちろん、許すことはできないわ。ただ……」

「ただ？ 屑どもの理由なんかどうでもいい。育った環境がどうであれ、愛美にした卑劣な行為が変わるわけじゃない」

上手く答えることができず、私は黙ったまま窓際に見えるクリスマスツリーを見ていた。

施設の荒れた少年達のことを世間が噂するのを耳にする時、私はふと玖出のことを思い出す。

彼は暗闇で揺らぎながら燃え続けている清冽な白い炎のようだった。

今彼はどうしているだろう。

あの美しい目は違う光を宿してしまったのだろうか。

大きな窓からは降り続く白い雪が見え、その前に美しくデコレーションされたツリーが暖かい小さな点を滅させている。

シンプルだがスタイリッシュにまとめられているマンシヨンの広いリビングは、結城医師や彼の弟の印象そのままに、清潔でくつろげる空間になっていた。

部屋の中は、春の陽だまりの中にいるように暖かい。

宏章が少し震えた私を見て、すぐに室温を上げたのだ。

宏章の暖かな身体とふんわりとしたブランケットに包まれ、心地よさにこのまま眠ってしまいそうだった。

「眠い？」

宏章が、ソファベッドの中で私にキスしながら聞く。  
身体中を優しく愛撫されながら、私は瞼を閉じ、小さく頷いた。

「なんだかいつも眠いのよ。宏章さんにこうされてると気持ちよくて……」

「眠っててもいいよ。ゆっくり抱いてる」

「ごめんなさい……」

まどろむ私に、宏章が、「なんだか複雑な気持ちだな」と小さく笑う。

ブランケットを巻きつけて起き上がり、差し出されたグラスを傾けると、冷たい水が喉を下る感触が気持ちよかった。

やはり微熱があるのかもしれない。

ここずっと身体がだるかった。

宏章はフローリングの上に座ってソファに身体を持たせかけ、私をじっと見つめていたが、ようやく口を開いた。

「愛美、もしかして妊娠してるわけじゃないよな？ あのこと、ずっと気になってた。可能性はあるだろ？」

その言葉に一瞬身体が強張ったが、すぐに笑顔を作る。

「大丈夫よ。どうして？」

宏章は私の気持ちを探ろうとする時特有の眼差しで私を見つめた。また。

「愛美がお腹を庇ってる気がしたから。それに、上手く言えないけど、いつもと身体が違って感じた。体内が熱いような。熱がある？」

宏章の言葉を打ち消すように私は言った。

「軽い風邪が治らないからきつとそのせいよ。一週間前に生理があったの」

妊娠はありえない。



私に子どもができるはずがないから。

子どもをどう愛していいかわからない私が、妊娠する体を持っているとは思えなかった。

きつと、この先も。

宏章はそれを聞くと、ようやく安心した表情になった。

「そうか。よかった。これからはもっと気をつけると約束するよ。風邪気味なのに無理に抱いちゃってごめん。結城先生に、愛美はあまり体調がよくないから調子に乗るなよって止められてただけ、顔を見たらどうしても我慢できなかった。疲れた？」

私の服を床から拾い上げて着せ掛けながら、以前の彼のように少し子どもっぽく照れた顔で宏章が言った。

その表情にほっとする。

私は身支度を整えながら言った。

「ううん。私もこうしたかったの。それに、宏章さん優しいもの。でももう夕方だから帰らないと。結城さんも私達がこのままじゃおうちに帰って来れないわ。外は雪なのに」

「もう帰ってるよ。だいぶ前にその廊下を通って行った。わざわざ俺に手を振って」

「えっ……」

私は絶句してソファの背もたれの向こうを覗いた。

玄関から結城の部屋に行くにはこの部屋を通るのだと思い出して全身が赤くなる。

「大丈夫。背もたれの影になって向こうから愛美の姿は見えないよ。それよりあいつ、コンビ二で俺と入れ替わる前、愛美に悪さしなかったよな？」

宏章に急に言われてもつと赤くなった。

「どうして？」

「やっぱりか。病院から自分の彼女みたいに愛美を連れて来るって言うから嫌な予感がしてたんだ。お前らが別れたみたいで一石二鳥だろうって。油断しちゃだめだぞ、愛美。こいつの悪乗りは昔からだ」

宏章がキッチンの方に目をやりながら、嫌そうに顔をしかめた。

「人聞き悪いこと言うなよ、宏章。挨拶程度にちよつとだけ演技しただけだ。なあ、愛美？」

顔を上げると結城がキッチンに立っていた。

ミネラルの瓶を開けながら楽しそうににやつと笑って私達を見ている。私は大慌てで服の乱れを直した。

「名残惜しいだろうがそろそろ送らないと俺が兄貴に怒られる。あれほど愛美に無理させるなって言っただろ、伶！で、愛美は無事？」

「人聞きの悪い言い方するなよ」

文句を言う宏章を軽くあしらいながら、結城がまだ赤くなつたまの私に言った。

「支度ができたら声かけて。向こうの部屋で待ってる。イブを一緒

に過ごした恋人らしく愛美とマンションを出ないとな。しかたないんだよ。演技だからな、宏章」

結城が気を使って雰囲気のをませてくれたが、それでも宏章と別れて施設に帰るのは辛くてたまらなかった。

「愛美に会えるなんて思わなかったから、プレゼントも用意できなくてごめん。でも、来年のクリスマスには何もかもきつと上手く行ってるって信じてる」

宏章はそう言って、私に別れのキスを落とした。

今度はいつ会えるのか宏章は言わなかったし、私も聞くことはなかった。

「またあいつと会える様に考えておくよ。元気出して」

マンションから出る時、結城は私に綺麗に包装された包みを二つ手渡して言った。

「慰めにもならないと思うけど、オレと兄貴からのクリスマスプレゼント。本当に送らなくていいの？」

施設まで送るといふ結城を断り、お礼を言つてタクシーに乗った。笑顔で礼を言うのがやつとだったのだ。

今日ここで会えただけでも幸せだったのは良くわかってる。これ以上何を望むというのか。

もともと宏章は私には手の届かない世界に住んでいる人なのだ。

私は着ていたダッフルコートを脱いでいつもの古いコートに着替え、荷物を目立たないように一つにまとめた。

宏章の父の騒ぎが起こってから、寺田の態度は以前にもまして厳しいものになっていったからだ。

霧島代議士を通して描いていた夢が無惨に崩れ去ったせいだろう。新しいコートやプレゼントは寺田の逆鱗に触れるか、執拗な興味の対象になるかのどちらかだ。

タクシーのドアを閉め、冬の風が吹く暗い路地に下りると、コンクリートの塀の向こうに施設の無機質な蛍光灯の灯かりが見えた。

夢から覚めるのが怖ければ、夢を見なければいい。

私は私の属する世界に帰るのだ。

これから宏章に何度会えたとしても、やがて別れは来ることを忘れてはいけない。

その日の夜中、私はお腹の痛みで眼を覚ました。  
今まで経験したことのない痛み。

確かめると、一週間前よりも多く出血していた。  
見た途端、恐怖で背筋が冷たくなる。

何かが違う。

私の身体はどうなってしまったのだろう。

恐ろしさに胸の動悸が止まらなかった。

崩れるようにベッドに横たわる。

どうか思い違いでありますように。どうか……。

私は止まらない身体の震えを押さえるように、自分を強く抱きしめた。



暗闇の中に子どもの泣き声が聞こえる。

探しても探しても姿が見えず、私は途方にくれて立ちすくんだまま涙を流していた。

遠くに小さな私と陸人がぼんやりと浮かび上がって見えた。

楽しそうに笑う声が聞こえる。

子どもの行方を尋ねようと近づくと、私と陸人の姿は陽炎のように揺らいで消え、そこに母が背を向けて立っていた。

長い髪と白いワンピースが生き物のように揺れている。

お前は母親になどなれない。

母は私を見ずに言った。

だって私はお前を愛していなかったのだから。

振り返った母は私の顔をしていた。

足の間から流れる大量の血が白いワンピースを赤く染め上げていく。

私は恐怖に悲鳴を上げた。

喉から漏れる長い長い悲鳴。

全身に汗をかいて目を覚ました。

枕もとの時計を確かめてから、いつもの施設のベッドにいることを確認し、安堵で胸を撫で下ろす。

夜中の三時。

昼も夜も眠り続けているせいで、毎日この時間に目が覚めるのだ。

あれから二十日近くが過ぎていた。

冬休みの間、私は微熱と体調不良を理由にして、ほとんど自分のベッドに横たわって過ごした。

先週三学期が始まったが、そのまま休み続けている。

優花のことがあってから、寺田は施設内の子どもに大きな病気が起こるのを恐れていて、私がずっと部屋で休んでいる事をとがめられはしなかった。

「あなた、顔色が悪いわ。蔵木さん」

寺田が眉をひそめて、見たくないものを見せられたように眉を顰める。

呼び出された副園長室にはいつもの強いコーヒーの香りが充満していて、私は何度も吐き気を催しそうになっては必死に耐えていた。最近では、ふとした拍子に胃液が込み上げ、食べ物の匂いが残る食堂に足を踏み入れるだけで戻してしまうことすらあった。

「食事はおかゆを作るように調理師さんに言うておくから、無理せず部屋で食べていいのよ。病院に行った方がいいと思うわ。明日にでも」

「お医者様からは貧血が酷いとお薬をいただいています。横になっていれば治るんです。冬の気候に弱いものですから」

寺田はそう言うのと、早く部屋に戻れとも言つように、机に上の新聞に目を落とした。

あれほど私の異性交遊に眼を光らせていた寺田は、最近急に私に興味を失ったようだ。

冬休みと同時に女子寮に入って来た私より一つ年下の少女が寺田の興味を一身に惹き付けていたからだ。

義父に虐待されていたらしい彼女の心の悩みを事細かに聞くのが、寺田のやりがいのある仕事になったらしい。

毎日時間を掛けて、少女が体験していた辛い記憶を聞き出す。

だが、少女は寺田よりも上手だった。

彼女は、泣きながらわざと扇情的に脚色した性的虐待の話を寺田に話してやるのだと笑っていた。

あの色ボケババアの興奮した顔ったら！ あんまりおかしいから毎日話をエスカレートさせてやるんだ。

瞬く間にみんなの注目を集めたその少女は、ほとんど寝たきりの私にまったく興味がなく、私は彼女の存在の影で自分の目的をなし遂げていた。

下腹を両方の手のひらでそつと触れる。

この時の私は、もう妊娠を確信していた。

最初の頃の恐怖は徐々におさまり、その代わり不思議な感情が芽生え始めていた。

ふと気がつくところしてお腹に手を触れている自分がある。

私の中に宿った小さな命。

それは宏章の命でもあった。

先のことを考えなくてはいけなのはわかっていた。

けれど、その決断は一日一日と先延ばしされる。

お腹の中で日々育っていく子どもを思う時、私は孤独を忘れていられた。

宏章の分身が私の体内にいる。

それは私が今生きてここにいる証でもあった。



少しでも、子どもをお腹の中にとどめておきたい。  
その願いが日々強くなるのを抑えることができなかった。

出血が止まり、お腹の痛みがなくなっても、私は身体を休ませ続けた。

食べられるだけ食べ物を取り、その後は冬眠している動物のように、ただただ眠りを貪る。

誰に教えられたわけでもなく、本能がするべきことを教えていた。

ベッドの手摺りにつかまって身体を支えながらゆっくりと起き上がり、厚いカーディガンを羽織ると私は部屋の外へ出た。

何枚も着込んだ服で、冷え込んだ廊下に出ても身体は暖かいままだ。

となりの部屋のあの少女の部屋からくすくすと笑い声が聞こえる。その相手がどの職員なのか、確かめたところでどうなるわけでもない。

そのまま部屋の前を通りすぎた。

どんな指導者が入ってこようと施設の中は変わらない。子どものほとんどが両親による虐待か、ネグレクトを経験していた。

親の面会はほとんどない。

ここにいる子ども達は大きな傷を心の中に抱え、それに触れられない様に自分の周りに硬い殻を作っていくのだ。

自分の目からも傷が見えなくなるほど、厚く、硬く。

野良犬なら、もうとつくに殺されてる。

本当は、俺らだってそうなりやいと世間は思ってるのさ。

昔、玖出がそう言っていた。

手洗い場の窓からは、角を曲がって廊下でつながっている女子寮が見える。

二階の一番端に灯っている小さな明かりが私の部屋だ。薄いカーテンを通して、そこだけばつんとオレンジ色の光が漏れている。

部屋に戻ろうと水道から流れる水を止めた時、施設を囲む外のコンクリートの塀の上に座った人影に気付いてどきりとした。

少年が顔を上げて私の部屋の明かりを見ている。

塀にくっつく様に伸びている桜の幹に背中を持たせかけ、膝を抱えて。

それは川崎だった。

身を切るように冷たい夜の闇の中、冬の青い月明かりに照らされて、ただ静かにひとつだけ灯った明かりを見ている。

私は部屋に戻ると、小さくつけていた明かりを消した。

しばらくして、カーテンの陰からそっと覗くと、川崎が塀を降り、道路の向こうに止めてあるバイクの方へと歩き去る姿が見えた。

うつむき加減に、背中を丸めるようにして。

それは、宏章の家の前で別れた陸人の姿のようだった。

まだ平らなお腹に手を触れたまま、小さくなっていく川崎の姿を見送った。

野良犬なら、もうとっくに殺されている。

誰にも望まれない存在であることを認めて生きていくのは死と同じだ。

ベッドに横たわり、目を閉じる。

だが、川崎の後姿が脳裏から離れなかった。

今日の夕方、佐久間から電話があった。

冬休みが終わっても登校して来ない私を心配してくれたのだ。

思いやり溢れた電話にすら、追いつめられている気がした。

佐久間が私の身体の変化にこれからも気がつかないままでは  
いけない。

結城医師にももう全てを見抜かれている気がしていた。

このままでは、この子をこうしてお腹の中にとどめておけない。私には産むことも育てることもできないと言われるのがわかっていた。

……絶対に嫌……。

私は小さく呟いていた。

この子は私から引き離されたら死んでしまうのだ。死んで……。

胸が引き裂かれるように痛む。

この子を失う事など耐えられない。

ここを出よう。

私はお腹に手を当てたまま、そう決心した。

何かに憑かれた様に、私は身体を起こしてベッドから降りた。

枕もとの小さな灯かりだけを灯して洋服に着替え、身の回りのものを粗末なバッグに詰める。

支度はすぐに済んだ。

この施設から子どもが一人いなくなったからといって、誰がいつまで気に留めるだろう。

私のことなど、すぐに忘れ去られる。

服の上から白いコートを羽織り、赤みが出るまで唇を強く噛む。編んでいた長い髪を梳くと、母譲りの明るい栗色の髪が、コートの上に緩いウェーブを描いて広がった。

こうしていれば、年をいくつも偽れるのを知っていた。

廊下に出ると、隣の少女の部屋もいつの間にか静まり返っている。

誰にも見つかることなく、施設の門を抜けた。  
振り返ると、暗い施設の庭で、白い月光を浴びている細い桜の木  
の目が映る。

その姿を胸に刻む。

ここで陸人と過ごしたいくつかの春の日。

手に持ったバッグを握り締め、私は川崎が走り去った方向へと歩  
き出した。

行くあてなど、あるはずはなかった。

私はコンビニやバス停のベンチで休みながら、街中を目指して歩いていた。

ポケットの中にある、わずかなお金を少しでも残しておきたい。

施設では、子どもたちに毎月小額の小遣いが渡される。

余分なお金は全て管理室に預けることになっていて、必要な時はそのつど金額を申請して許可をもらう。

大きい子ども達のほとんどは、学校で使用する文具や辞書などの理由をつけてはお金を引き出し、自分で隠し持っていた。

けれど私は今までほとんどそれをしなかったので、今持っているお金は千円札が三枚だけだった。

冬休みに入る時、世話になっている人たちへお菓子を贈ろうと用意していたお金だったが、佐久間が自分の出す荷物と一緒に送ってくれると受け取ってくれなかったのだ。

日が昇った頃にようやく駅までたどり着き、ヒーターで温まった待合室で身体を休めた。

私はこの先どうすべきなのか。

とにかく、夜露がしのげて横になれる場所を探さなくてはならない。

できるだけ遠くに行った方がいいのはわかっていたが、闇雲にこの街を離れるつもりはない。

探し出されさえしなければ、見知らぬ土地よりこのほうが安全だ。

なにより、身体のために、これ以上無理はできなかった。  
さつきからまた少しお腹が痛み出してきている。

ここから少し行った所に陸人の父が住んでいたあの空き家がある。  
昼はそこで休み、夜になったら彼らの誰かに話しかければいい。  
恐らく数日分の食料と、小さなヒーターを買うつらいのお金は手  
に入るだろう。

朝まで暖かい部屋のベッドで眠れるかもしれない。

売春をするつもりは毛頭なかった。

お腹の子どもを男の欲望で汚すことは決してしない。

今まで持ったことのない感情が芽生えていた。

卑劣な男との駆け引き。

お腹の子供の命を守りたいという強い願いの前に、恐怖が心の底  
へ鈍く沈んでいく。

彼のような男が私をどう扱おうとするかわかっていた。

欲望をうまく利用して、必要なものだけを手に入れる。

その先のことはそれから考えよう。

私はそう決意し、待合室に立つ男たちを見渡した。

数人に意識されていたのがわかる。

喜んで私を見る男。

慌てて目をそらす男。

その中でも、さつきから一番熱心に私を見ている中年の男がいる。  
四十代の後半というところだろうか。

どこから見ても平凡な中肉中背の普通のサラリーマンで、普通に  
歩いていたら目を留めることもなかっただろう。

男は、黒い大きなキャリーバッグを持っていた。  
手にはビニール傘。

待合室で流されていたテレビの天気予報は、この土地が一日晴れであると告げている。

これから、別の土地へ出向く営業職なのではないかとあたりをつけた。

私は男に視線を返し、じっと見つめた。

それから意味ありげに目を逸らし、椅子から立ち上がる。

待合室のドアを押すと男がそわそわと身体を動かしたのが目の端に映った。

人が多くなり始めた駅の構内を歩いているとすぐにさっきの男が早足で寄ってきて、私に話しかけた。

「ちよつと君」

通勤用のスーツにグレーのコートを羽織ったその男は、私の腕を掴んで柱の影に引き込んだ。

男は辺りを伺うようにしながら私に聞いた。

「君、どうしてこんな時間に一人でいるの？ さっき僕の方を見てたろう？」

口を開くと意外に手馴れた感じがする。

男の態度を見ると、きっと私の様な少女に以前にも声を掛けた経験があるのだらうと思えた。

お願い、頑張つて……。

何とかするから。必ず休ませてあげる……。

心の中でお腹の子どもに話しかけ、どこへ行ったらよいのかを必死に考える。



待合室には朝早くから書類ケースを抱えたサラリーマンが次々と入って来ていた。

そのうちの一人がちらちらと私を見ているのがわかる。

この時間に荷物を持って一人で座っている私は家出娘だと思われるのかも知れないが、男が私を見ているのは同情のためではない。

男が浮かべたその表情を、嫌というほど知っている。

彼は頭の中で私を陵辱しているのだ。

いつもならすぐにうつむいて男の視線から逃れようとしていたが、私は顔を伏せなかった。

男の顔に浮かぶ表情を見ていた時、どうやって宿と食事を確保したらいいのかに気づいたのだ。

「時々君みたいな子が朝の駅にいるんだよ。何か困ってるんじゃないの？　たとえば、ほら、行く宛てがないとかさ」

「どうしてわかるんですか？」

私は男を見上げ、不安そうな声を出した。  
途端に男の目に独特の熱が宿る。

この男を利用しよう。すぐに心を決める。

「やっぱりね。悪い子だなあ。家出てきたんだね。おうちのひと  
も心配してるよ。神待ちってやつ？　携帯で泊めてくれる男を捜し  
てるんだろ？」

「そんなことできるんですか？　今夜泊まれるところを探してるん  
です。二、三日でもいいんです。私、携帯は持っていないくて。誰に  
も連絡できないから……」

男は私を上から下までまじまじと見つめ、ねっとり光る舌の先  
で唇を舐めた。

「なるほどね。誰からも連絡がこないってことでもあるんだね。お  
じさんと一緒に警察に行こうか？　そうすると、すぐ家に連れ戻さ  
れちゃうだろうけどねえ」

「嫌です。警察には行きたくありません。お願いですから警察には  
言わないで」

私は一呼吸置き、男の平凡な顔を見上げた。

「私を泊めてもらえませんか？　お願い。何でも言うことを聞きますから」

あれほど男が怖かった自分の口から、すらすらと言つべき台詞が出てくることに驚いた。

男はさつきから私の顔を舐めるように見つめている。

「君はほんとに可愛いなあ。アイドルタレントより美人じゃないか。お世辞抜きで、こんな可愛い子見たことないよ……。いくつ？　高校生？」

「まだ高校には行つてません」

「えっ。じゃあ、中……」

男の顔に強い興奮の色が浮かんた。

「家出は初めて？」

「はい」

「それはそれは。どうりで擦れてないと思つたよ……。素敵なコートを着ていい家の子だろうに、困つた子だね。色も白いし肌も綺麗だ。まだ何も知らないんだな」

手に持った粗末なバッグは見えないのだろうか。

男は自分が考えた私の身元に興奮して、今にも襲い掛かって来そうだった。

男がにじり寄ってくると、何か独特な匂いに吐きそうになる。

ここずっと、匂いに敏感になっていた。

思わず両手で顔を押さえて俯き、胃液を戻してしまわないように堪えたが肩が震えてしまう。

だが男はそれが不安で泣いている姿と思ったようだった。

「泣かなくていいんだよ。おじさんは優しいからね……。その辺にいるエッチなオヤジじゃないから、変なこともしないよ。あ、変なことなんて言うとは誤解されちゃうかなあ。ははは」

男は楽しくてたまらないとも言つように大声で笑った。

それから人が行きかう早朝の駅の構内だということをようやく思い出したらしく、はっとしたように回りを見渡す。

男は手帳を取り出して何か書くと私にすばやく手渡した。

紙を見ると、全国系列のアパート名が記されている。

「三ヶ月の出張でウィークリーマンションを借りてる。夜になったらこの近くまで来なさい。携帯ナンバーもここに書いてある。あと一ヶ月ここにいるから、二、三日なら泊めてあげてもいいよ」

「ありがとうございます。でも……」

私は頼りない表情で男をじつと見上げた。

男が少し開いた私の唇を見て、ごくんと大きく唾を飲み込む。

「お金も全然ないし、もう、疲れて立っているのもやっとです。せつかくですけど、これから夜まで休ませてくれる親切な方を他に探します……」

男の顔に、焦燥感が浮かんだ。

この男は少女を食い物にすることに味を占めている。  
私を逃したくないはずだ。  
心の中で、冷静な声が聞こえる。

頭を下げて離れようとすると、男が慌てて腕を掴んできた。

「わかった。合い鍵を渡すよ。できるだけ早く帰るから、ここに入  
って夕方まで待つてるんだ。食べ物があったら食べていいし、シャ  
ワーを使ってもいい」

どうせ、あの部屋には無くなって困る物はなにもないんだと、男  
が自分への言い訳のように呟いた。

「そんなに迷惑をかけては……」

「いいんだよ……。その代わり、少しでも慰めてもらうかもしれない  
からね……。まあ、君も世の中に無料なんてないって知ってるだ  
ろ。おじさんは、君より少し大きい娘がいるんだ。家族と離れてい  
るから寂しくてね……」

「ありがとうございます。優しいかたに知り合えてよかった」

私はぺこりと頭を下げた。

「じゃあ、夜八時に。必ず待ってなさい。そうしないと、警察に君  
のことを話しちゃうよ……。いいね？」

「はい。おじさんの帰りを待っています。誰にも言いません」

「これが鍵だ。できるだけ早く帰るからね」

男の声が興奮で震えている。

頷いた私をもう一度眺め回すと、男は名残惜しそうに振り返りながら元来た方向へ引き返して行った。

これでしばらくしのいでいける。

それだけのものを必ず手に入れる。

私は男が歩き去るとすぐに背を向けて歩き始めた。

ただ、施設に戻らずに済むことに安堵していた。

それ以外の感情は何も起こらない。

ほとんど無人のバスに乗り、陸人の父が住んでいた家に向かう。

私がいなくなったことがわかれば、陸人がすぐにここを探しに来るのがわかっていた。

私には他に行く場所がないのだから。

今の男の話は渡りに船だ。

陸人が学校に行っている日中、あの空き家で過ごすだけなら見つけ出されずに済む。

陸人がむやみに高校を休めない状況にあるのははつきりしているし、一日たりとも遅くまでの部活は休まないはずだ。

夜は別の場所で過ごせばいいのだ。

夕方まであの空き家で過ごすだけなら見つけ出される確立は低い。この先も、夜、お金を手に入れるために出掛けることを繰り返し、まとまったお金ができれば遠くにいけばいい。

陸人のことを思うと胸が痛んだ。

きつと酷くショックを受けるだろう。

だが、今はもう誰にも会う訳にはいかない。

それが私を心配する人であるほど。

陸人がこの間していたように、郵便受けの底から鍵を取り出し、空き家の中へ入った。

身体を温めてくれそうなものを探す。

布団が二組と毛布、それに小さな電気ストーブを見つけた。

電気がまだ使えるのはこの間来た時に知っている。

部屋の隅にあった低い机を利用してストーブを中にいれ、上から布団を重ね掛けて炬燵を作る。

コンセントを差し込むと、ストーブが机の中で暖かなオレンジ色の光を放った。

使い捨てカイロの封を切り、コートの上から毛布を巻きつけると炬燵に身体を入れてゆっくり横たわる。

ようやくほつと溜め息が漏れた。

ほら、暖かくなったでしょう……。

お腹に手をあてながら小さく呟く。

ここはね、陸人のお父さんが住んでいたところなの。もう怖くないわ……。

寝不足と極度の緊張から来る疲れで、動けなくなっていた。

身体が温まってくると同時に強い睡魔が私の身体を眠りへと引きずり込んで行く。

私は暗闇の中に一人で立ち尽くしていた。

その子は実の兄と恐ろしい過ちを犯しそうになった夜にできた子よ。

ぼうつとした頭に誰かの声が響く。

本当はわかっているんでしょう？ その子の父親は。

違う。違う……！

罪の子よ。生むことなどあつてはならない。

やめて………！

頭に響く声を振り切ろうと駆け出した私の足に、柔らかい布が絡みつく。

赤ん坊を包んだ白い布。

それが、見る間にぬらりと光る黒い蛇にかわる。

暗闇で弱々しく泣き声をあげる赤ん坊を抱き上げて、小さな身体に絡まりつく蛇を必死で取り払おうとする。

その子の顔を見た途端、ショックで言葉を失った。

腕の中の赤ん坊が、闇のように黒い目で私を見つめている。

陸人と同じ、浅黒い肌。

暗闇が呆然とする私を取り巻き、渦を巻いて飲み込んでいった。



暗い路地を一人で歩いた。

耳に響くのは電車が時々頭上の線路を通り過ぎて行く轟音だけ。路地にたむろした少年達は、皆押し黙ったまま私を目で追っている。

不思議と怖くはなかった。

彼らの一人が近づいてきたが、私は怯まず、真っ直ぐに少年を見返した。

彼がその場に立ち止まり、気まずそうに視線を逸らすまで。

誰も、一言も発しない。

狭い路地を抜けて表通りに入る。週末の夜の繁華街には様々な人が群れるように溢れ始めていた。

毒々しいネオンの光に蛾が吸い寄せられるように。

大通りに出てからひっきりなしに声をかけてくる勧誘の男達を全て無視し、前を見歩いた。

いつか宏章と来たコーヒーショップの前でタクシーを拾い、行き先を告げる。

覚悟はできていた。

男の匂いで吐かずに済むように、夕食は何も口にしていない。

目の前のタクシーの運転手からも同じ匂いがする。

生暖かい車内に充満したそれは、日々繰り返す鬱屈とした生活の中で生きながら死んでいく男たちの腐臭のようにも思えた。

無言でハンドルを握る運転手がつけっぱなしにしたラジオから、

ニュースが流れるのをぼんやりと聞いていた。

毎日のように報道される子どもの虐待、成人男性の未成年との不順異性交遊。それらが氷山の一角に過ぎないことは身をもって知っていた。

こうして表に出ることすらなく闇に葬られる悲惨な事件。

ふと知っている名前が耳に入り、時々掠れるラジオの声に耳を澄ました。

明日は高校サッカー選手権の決勝です。慶京高校対華南学院高等部の試合は午後二時から。

陸人と宏章の高校の対戦だった。

今頃二人は明日の試合に全神経を集中させている筈だ。

施設のベッドに、朝一番のバスで病院に行きますと職員宛に書きおきを残して置いた。

以前にも一度そういうことがあったから、職員の目は一日ならごまかせるだろう。

休日前の当直は入ったばかりの職員とボランティアが一人だ。

宏章も陸人も、少なくとも明日の試合が終わるまでは私がいなくなつたと聞かされることはない。

陸人は、試合前は私に連絡をよこさないし、監督は選手の集中に気を配っていて、合宿先に携帯の持ち込みを禁じ、私用電話も一切取り次がないからだ。

準決勝の時、宏章は前半の途中から交替で出て、気合溢れるプレーで観客をうならせた。

膝が故障している事など微塵も見せず、迫力のあるゴールを二回

決め、華南は決勝に駒を進めたのだ。

もう宏章をベンチに置こうと言い出す者はいないだろう。

彼の父と彼のサッカーには何の関係もないことに皆が気づいたのだから。

霧島代議士は贈収賄事件で事情聴取されることが決まっていた。

代議士は強固に関与を否定していたが、崖っぷちに立たされているのは確かだった。

口では父への想いを否定していても、宏章の動揺は大きかったはずだ。

当たり前のように続いた代議士の家系が終焉を迎えるかも知れないのだ。

けれど彼はその中でも真っ直ぐに顔を上げていた。

スキャンダルの中での宏章の真摯なプレーは、徐々に世評を味方にし始めている。

一方陸人は一つでも大きなタイトルを取って、更に上へ登って行くこうとしていた。

彼にとってサッカーは遊びではなく、どん底の生活から這い上がるための手段であり、唯一の希望だった。

どちらが勝利を掴むにせよ、大きな意味のある試合であることは間違いなかった。

「ここでいいですかね」

運転手が住宅街に車を止めるとぶつきら棒に聞いた。

「近くに公衆電話はありますか？」

私が聞くと、運転手は早く降りろと言う様にドアを開けながら答えた。

「この先を歩いて角を曲がった辺りに昔はあったよ。携帯が普及してるから今はあるかどうかわからないがね」

道路に降り立つとすぐにタクシーは走り出して行った。  
辺りにはごくまばらに人が通って行くだけだ。

古い住宅街のようだった。

放置されたまま草が生い茂った空き地の向こうに、駐車場がついた新しいアパートがある。

狭い間口の、コピーしたように同じ間取りのアパートを見ながら、私は公衆電話のボタンを押した。

アパートには、いくつか明かりがともっている。

男の部屋のナンバーは105。

一階の部屋の窓は、どこも明かりがついていないことを、遠目で確認する。

数回のコールで、男はすぐに出た。

『もしもし。ああ、はい。どうしました？』

回りに誰かいるのだろう。

男が懸命に冷静を装っている様子が伝わってくる。

「あの……」

私は、おずおずと男に言った。

「やっぱり、お留守のおうちにお邪魔するのはいけない気がする。ずっと、近くのネットカフェにいました」

『今、どこですか？』

「おじさんのおうちの近くの公衆電話です。いらっしゃるまで、ここで待っています」

『わかりました。そこをお願いします。あと二十分ほどで、そこに行きますから』

男が、焦ったように言うのを聞きながら、私は受話器を置いた。すぐにアパートに向かい、あたりに人影がないことを確認して、部屋のドアに鍵を差し込む。

中に足を踏み入れ、ドアを後ろ手に閉じて鍵を閉めた。湿った空気。

あの男と同じ匂いがする。

手探りで壁に触れ、電気をつけると、まだ新しいがだらしく散らかった、狭い二間続きの六畳間と、畳一畳ほどの簡易な台所が見えた。

靴を脱いで上がり、カーテンの閉め切られた部屋の中をすぐに確

認する。

小さな冷蔵庫の中には、つまみとおぼしき食べ物の残りがいくつかと、封をあけていない、半ダースの発泡酒が二パック。

部屋を振りかえると、敷きっぱなしの布団の横にある小さなちゃぶ台の上に、日本酒の紙パックと汚れたコップがある。

この酒を飲む習慣があるのだろう。

紙パックを手にとると、軽い。

幸運に感謝しながら、コートのポケットから薄い紙に包んだ粉を取りだした。

紙パックの中にそれを残らず入れ、蓋を閉めて、中の液体と混ぜるように振る。

さっきの電話から十分ほど。

手早く作業を終えて、布団の枕元にある時計を見た。

6時。

シャワー室のドアに仕切りがあることを確認してから部屋の明かりを消し、そのアパートを出た。

足早にさきほどの公衆電話ボックスへと戻った時には、緊張で額に汗が滲んでいた。

手のひらで触れたとき、初めて、自分が小刻みに震えていることに気が付く。

「大丈夫。絶対にやり遂げてみせる」

お腹にそつと手を触れながら、私は俯いて目を閉じ小さく呟いた。

その時、誰かが後ろから肩を強引に掴んだ。

悲鳴を上げそうになると、耳元で男の慌てた声がする。

「静かにしろ！ 人が聞いたら変に思っただろ」

振り返ると朝の男が私の腕を放さないまま立っていた。

「君が来ないんじゃないかって心配だね。じっとしてられなかったんだよ。でも、やっぱり来てくれたんだね。おじさんに会いたかったの？」

ぞつとするほどの猫なで声で男は続けた。

「おじさんは寂しいから、君に早く慰めて欲しいんだよ」

それから男は私の腕を放し、空き地の向こうに見えるアパートを顎でしゃくった。

「あそこの一階、左から五番目の部屋だよ。おじさんはここから見てるから、君が先に部屋に入りなさい。誰かに見つからないように、気をつけて行くだよ。君が部屋にはいったら、おじさんもすぐに行くからね」

「はい」

私は素直に頷き、男に触れないよう横をすり抜け、電話ボックスから出た。

「もし君が部屋に入らなかったら、この場ですぐに110番するぞ。わかってるな？」

男が私を脅すように、低い声で囁いた。

玄関で待っていると、すぐに男が後を追ってきた。

男が鍵とドアチェーンを掛ける。

「さあ。中へ入って。コートを脱ぐんだ」

「はい」

部屋へ上がり、男の嘗め回すような視線の前で白いコートを脱ぐ。男はその下に私が着ているセーラー服を見て、興奮した笑いを漏らした。

もちろん、男がより興奮するように、わざと着てきたのだ。万が一にでも、目的を果たす前に、男が私を追い返さないように。

「ああ……。そうしていると、まるで中学生みたいだね」

背広を脱ぎ、布団の上にあぐらをかいて、立ちつくしたままの私を食い入るように見上げ、男は掠れた声で言った。

「私は中……」

男が私を遮るように怒鳴った。

「言わなくていい！ 君は二十歳にしか見えない。そうだろ？ ああ、頷いたね。じゃあ君が二十歳だと叔父さんに言っただけで決まりだ。」

二十歳の君がわざと幼い振りをする。おじさんは、それに合わせてやってるだけだ。

大人同士のお付き合いは、何をしても法律違反じゃないからな。どんなことをしようかね……」



男の片手がちゃぶ台の上に伸び、紙パックを掴んでコップに酒を注ぎ込む。

「飲むかい？　今日は滅法冷え込んでる」

私が横に首を降ると、男はコップの酒を一気にあおった。

酒の力で気を大きくしようとするのも、こういう男の特徴だった。

「君は本当に家に帰りたくないんだね。悪い子だ。お仕置きされてもしかたがない」

すぐに、私ににじり寄って来る。

「彼氏はいるの？」

「いいえ……」

「だろうね。君はそういう子だ。大人の世界を覗きたくてしょうがない、初心で悪い子だ。そうだね？」

「私……」

「家出したいなら、もっと男をよく知らないかね。君みたいな可愛い子に悪いことをしたがる奴はいっぱいいる。おじさんが全部教えてあげるよ」

男の息が荒くなっている。

私に近づいて肩に腕を回し、髪に鼻を押し当てて息を吸い込むと、大きくため息を漏らしながら男が言った。

「ああ、いい匂いだねえ。柔らかくて綺麗な髪だ。ちょっとだけ、チウウさせてね。声を上げたらすぐ警察だよ」

男が首筋や耳を嘗め回す感触のおぞましさを悲鳴を上げそうになり、唇を引き結ぶ。

男は興奮で息を荒げながら、私を布団に押し倒した。すぐに制服をまくり上げる。

「ああ、着痩せして見えたのに、こりゃあ最高だ……。初めてなんだろう？　俺が男ってもんをたっぷり教えてやるよ」

まるで台本があるかのように猪口と同じ言葉を言う。

この男が見ているのは私の顔と身体だけ。

そして、頭にあるのは、自分本位の欲望だけだ。

私の身体に心が入っていることなど気が付きもしないだろう。

男の狂気じみた欲求に飲み込まれないよう、そして、悲鳴や泣き声を上げないよう、懸命に自分を励ましていた。

胸元から下着の中に手を入れてきたとき、私は言った。

「いやです！　やめてください」

気ぜわしく自分のベルトを外す、男の欲望から目を逸らす。

「もう、今さら無理だね」

男の荒い息遣いだけが部屋に響いている。

私は、もう一度抵抗した。

演技をしなくとも、声が震えている。

「お願い。おじさんの言うこと、聞きますから、ちょっとだけ待って……！」

精一杯身をよじると、男がようやく私を離し苛立ったように見下ろした。

「何だよ！ 待てだつて？」

「……シャワーを使いたいです。私、そうじゃないと嫌……」

涙ぐんでいるわたしを見て、男が忌々しそうに言った。

「さつさとして覚悟を決めてこい」

男は身体を起こし、また紙パックを手にして、残り少ない酒をすべてコップに注ぎ込んだ。

「すぐに来ますから」

男が酒をあおるのを横目で見ながら浴室に向かう。

ここへ来る前、粉碎して紙に包んでおいた錠剤は四錠。

その睡眠導入剤は、私が入院中、眠れずにいたときに医師から処方されたものだ。

すぐに効き目が現れることはわかっていた。

ドアを閉じて浴室に入り、中から鍵を閉める。

水栓を開いて水流を全開にし、念のために二十分ほどその場で待った。

再び、部屋に戻ったときには、男は裸で大の字になり、正体不明でだいびきをかいているところだった。

眠り続ける男を見ても、何の感情も起こらなかった。

男が脱ぎ捨てた背広を手に取り、中から財布を抜き取る。

一万円札が三枚と、千円札が四枚。

今日のところは、これで十分だ。

お金を抜き取った財布を背広に戻し、コートを手に取ってすぐに立ち上がる。

玄関でチェーンを外してドアノブを掴み、開けようとした途端、外から強い力でドアが引き開けられた。

驚いて悲鳴を上げようとした私は、そのまま、また力づくで部屋に押し込まれ、壁に押しつけられた。

「声を出すな。こっちへこい」

男の顔を見て、驚きで声を失う。

私の腕を掴み、土足のまま部屋に引きずり込んだ男は、川崎だった。

「しばらく我慢してろ」

そう言って、制服のままの私を、昏睡している裸の男の上に突き飛ばす。

フラッシュの光の眩しさで、反射的にきつく目を閉じた。

カメラのシャッターを切る川崎を、呆然と振り返る。

「もういい。離れろ」

川崎は自分が着ていた黒いダウンを脱いで私に投げた。

「これを着て、ポケットに入ってるキャップをかぶれ。髪はダウンの襟から出すな。早くしろ！」

私を男から引き離しながら強い口調で命令し、動けない私にもう一度怒鳴った。

「さっさと着ろって言ってるだろ！」

男の背広から、財布と携帯を抜き取り、それを私に投げてよこす。

「これを持ってる。騒ぐんじゃねえぞ」

それから川崎は、スニーカーを履いたままの足で、寝ている男の横腹を思いきり蹴りつけた。

叫び声を上げ、男が慌てて片手を付き、腹を押さえながら起きあがる。

多量の睡眠導入剤で、まだ焦点がうまく定まらないままに、男が川崎を見上げた。

恐怖で一瞬に顔色が変わる。

「……お前、だ、誰……！」

「俺の女に手え出すんじゃないよ。この汚ねえ糞ジジイ！」

川崎が、不抜けたようになった男の顔を、力任せに蹴りつける。

何か砕けたような鈍い音がし、口から血の泡が飛んだ。

思わず悲鳴を上げそうになって、手で自分の口を押さえる。

あまりの驚きで、立っているのがやっとだった。

目の前で起こっていることにまだ頭がついていかず、私は壁に寄りかかったまま、呆然と成り行きを見ているだけだった。

自分の口から流れ出た血が白いシャツにボタボタと垂れるのを見て、男が恐怖に見開いた目を川崎に向けている。

「制服の中学生相手に淫行か。お前、どうせ同じくらいのがきがいるんだろ？ てめえのがきとやってろ、このエロ爺」

川崎は男を容赦なく何度も殴りつけた。

みるみるうちに、男の顔が腫れ上がっていく。

川崎は男を布団の上に突き放し、馬乗りになるった。

片手で首を押さえつけ、薄いカメラをジーンパンの後ろポケットにしまつと、代わりに折りたたみのナイフを取り出す。

起き上がれないままの男の喉に鋭く光るナイフの先を突きつけ、川崎が言った。

「キャッシュカードの暗証番号を言いな、オヤジ。口が聞けねえなら、このまま頸動脈ぶった切るぞ」

「ち……畜生……！ 美人局か！ け、警察を呼ぶぞ……！」

カツとした川崎が、ナイフを持った手で男を殴る。

男の切れた額からも、血が流れ出した。

「ふざけんな！ 素っ裸で何ぼざいてやがる。お前のその粗末なもんまで、セーラー服のこの女と一緒に写真に収めてるんだよ。呼びたいなら、俺が淫行で警察呼んでやる。てめえの名刺に写真をつけてな」

さつき背広から抜き取った名刺入れを、男の前でちらつかせる。

川崎は冷たく笑った。

「取引先の名刺でいっぱいだ。写真の送付先はここでもいいぜ？ それとも、家か？」

川崎は暴力団との関係を匂わせていた。

施設の少年たちの噂どおり、彼はもうそこまで足を踏み入れているのだろうか。

車が向かう先は、陸人の父の空き家に近い、あの繁華街だった。



タクシーは再び、繁華街のネオンと喧騒の中へと、私を連れ戻した。

水滴が、時折水盤を打つ音で目を覚ました。

古びた薄いカーテンの隙間から差し込む光で、朝になったことを知る。

私は薄い布団の上に身体を起こし、光の中でようやくはつきりしてきた部屋の中を見回した。

殺風景な狭い部屋には、小さなテレビとテーブル、石油ストーブだけが無造作に置いてある。

私が寝ていた布団の隣には、畳の上に、人が抜け出た形そのままの毛布と枕が置いてあった。

手を触れるとまだ暖かい。

川崎が、ここに今まで眠っていたのだろう。

私は起き上がり、ガタガタ軋む窓を少し開けると、外をそつと覗いた。

すぐ目の前に隣の家の物干し場があり、派手な女物のキャミソールと小さな子どもの服が軒下に揺れている。

あれから川崎は、私を繁華街の裏通りにある小さなスナックの二階に連れて来て、それからまたすぐに数人の少年達と出て行った。

私がどこかに逃げるとは思っていないようだ。

あの施設を無断で出てきた私に、行く宛てがないことがわかって  
いるのだろう。

欄干に掛けた白いコートのポケットを探ってみたが、あの男の財布から抜き取ったはずの金どころか、施設から持ち出した少ない現金もない。

部屋を探すまでもなかった。

川崎が無防備に現金を置き、私を残して出るはずはないからだ。

昨日のことを考えると、早く身体を洗い流したいという思いでいっぱいになる。

玄関のドアに鍵が掛かっていることを確認し、狭い台所で着ていた服を脱ぐと、冷えた風呂場に足を踏み入れた。

熱いシャワーを身体に浴びると、その心地よさに疲れと緊張が溶け出していくようだ。

お湯に打たれながら、私は、この先のことを考えていた。

ああして危険を冒し、見ず知らずの男から日銭を手に入れるのは限界がある。

見つけ出される可能性が高い陸人の父の家にも、長居はできない。大きくなるお腹を抱えて、いつまでも居場所を転々と変えるのは難しいだろう。

ともかく、雨露がしのげて、食事ができる場所を確保することが先決だった。

川崎はここに一人で暮らしているらしく、部屋の中に彼以外が暮らしている形跡はない。

どうなるのか不安はあったが、今はここにいての方が得策に思えた。

川崎は、私をずっと側に置いておくつもりなのだろうか。

妊娠を知ったら、いつかのように逆上するのが目に見えていた。どうやったらこの子を守ってあげられるだろう。

脱衣所のない風呂場から出て、身体に残る水滴をタオルで拭いながらふと見ると、玄関にスニーカーが脱ぎ捨ててあるのが目に入った。

川崎が帰ってきたのだ。

施設から持ち出してきた下着と服に着替え、髪をまとめてピンで留めると、思い切って部屋の襖を開ける。

壁に身体を預け、布団に足を投げ出して煙草を吸っていた川崎が目を見て私を見た。

テーブルの上には、コンビニで買ってきたらしい二人分の食べ物と飲み物がある。

長くシャワーを浴びている間、川崎が焚いていたストーブで部屋の中は暖かく、窓が白く曇っていた。

何を言っているのかわからず、敷いてある布団の上に座って川崎を見た。

「飯買って来たから食べよ」

川崎はテーブル上のビニール包みを顎でしゃくり、また煙草に火をつけた。

灰皿の中には、溢れそうなほどの吸殻が溜まっている。

「そんなに吸ったら身体に悪いわ」

自分でも意識せずに言葉が口から出ていた。

川崎は手に持った煙草を口から離し、私を驚いて見た。それを誤魔化す様にきつい表情で言う。

「うるせえよ。俺の身体なんかどうでもいいだろ」

確かに余計なことだ。

なぜそんなことを言ったのかわからないまま少し顔が赤らむ。

「お前、日向を出たのか。どうせ職員に何かされたんだろ？」

川崎は火をつけたばかりの煙草を、口には戻さずに灰皿で揉み消した。

テーブルの上にあるコンビニのビニール袋の中からお茶の缶を取り出して、私の足元に放り投げる。  
拾って手に持つと、まだ暖かい。

「何も。ただ、いたくなかったから。どうして私があのアパートに行った事を知っていたの？」

「この辺の情報はすぐに耳に入る」

昨夜、川崎が、似たような雰囲気的少年達と行動していたことを思い出す。

「お前が朝方空き家に向かって歩いてた時から、見てた奴らが噂してたのさ。お前、自分がどんなに目立つか知らねんだろ？」

それをよく覚えとかないとすぐ見つかって連れ戻されるぞ。しかも、よりによってあんなオヤジ相手に売りをするつもりだったとな」

「そんなつもりはなかったわ」

「昨日はな。犯られないで金を手に入れるなんて、お前がいつまでもやり通せるわけではない」

川崎の言うとおりだった。

昨日は私にとつての幸運が続いただけだ。

手持ちの睡眠導入剤にも限りがあるし、狡猾な男も多いだろう。

川崎がコーラの缶を開けながら私を見つめた。

「陸人は知ってんのか？」

私は何も答えず、ただ座って暖かいお茶の缶を両手で握り締めていた。

川崎はどんな情報も利用して、相手を窮地に追い込むのだ。

私のことで、陸人に絶対に迷惑は掛けたくなかった。

そして宏章にも。

彼はただでさえ苦しい立場に追い込まれている。

お腹の子どもの父親が宏章だとは、口が避けても言えない。

黙っている私に、川崎がサンドウィッチのパックを投げてよこした。

昨日の昼から何も口に入れていない。

食欲はなかったが、食べないと身体がもたないだろう。

気まずい沈黙が耐えられなかったのか、川崎がテレビのスイッチを入れた。

休日の朝の番組の司会者が、明るい声で旅行のレポートを伝えている。

この状況にそぐわないその声が、耳に乾いて響いた。

お茶の缶を開けて少し飲み、サンドウィッチを口に入れ、噛み砕く。

すぐに強い吐き気が込み上げ、慌てて立ち上がるとトイレへ駆け込んだ。

胃液を全部吐いたが、それでも吐き気が止まらず、私はしゃがみ込んだまま目の前が暗くなるほど吐いた。

ようやく気持ちを落ち着けて立ち上がると、川崎がいぶかしげな表情で眉をひそめ、私の後ろに立っていた。

「お前、朝方も水を飲んだ後、吐いてたろ。昨日もあのオヤジのマンションでも吐きそうになってた」

何を言われるのが恐ろしく、身体が強張る。

川崎は昔から恐ろしいほど洞察力があった。

「愛美、お前ガキができたのか。だから施設から出て来たんだな」

「違う」

私は首を振った。

今ここから追い出されてしまつては行く宛てがない。

何か言い訳を考えようと必死になるが、心の中を見通すような川崎の鋭い視線の前に、とっさの言い逃れすら出てこなかった。

「へえ。違うのか。だったらこうしても平気だよな？」

川崎は私を壁に押さえつけると拳を握り、私のお腹に真つ直ぐ押し当てた。

「これで腹を殴られても、たいしたことはねえよな？」

「やめて！」

お腹を庇い、夢中で川崎を突き飛ばす。  
壁に背中を向けて冷たい台所の床にうずくまり、お腹を守るように押さえた。

川崎は押し黙ったままだった。  
隣の部屋のテレビから流れる明るい会話だけが、恐ろしい沈黙を破っている。

「誰のガキだよ……」

低く押し殺した声が響く。

「誰の子だ！ あの霧島つて奴かよ！」

川崎は私の服の背中を掴んで床に引きずり、強く揺さぶると打ち付けるように突き放した。



「あいつのガキを妊娠しやがったんだな！」

その声にはいつか私を抱いた時のような、焼け付くほどの強い嫉妬があった。

宏章が父親だとわかったら、ここで殴りつけられてお腹の子どもを殺されてしまいかも知れない。

昨日の夜、あの男に暴行していた川崎は、恐ろしい程残酷だった。頭を擦りつけて謝る男の顔を、スニーカーを履いたままの足で、腫れ上がるほど何度も蹴りつけていた。

堀口や昨日の男への報復は、ただ恐喝のためだけでなく、私に手出したことに対する川崎の制裁でもあった。

嫉妬に駆られた川崎が、宏章の子どもを生かしておくとはとても思えない。

それだけは絶対にさせない。この子に手出しをすることは許さない。

私はお腹を庇いながら決心した。

この男の激しい独占欲を利用すれば　。

「退院してから抱かれたのは二人だけよ。あなたと、霧島」

私は身体を抱え、背を向けたままそう言った。

「だけど、霧島は用心深いの。あんな家柄だから、ただの遊び相手の私を妊娠させるはずがない。そうになったら大事なもの。ああいう人種は世間体を気にするのよ」

言いながらゆっくり立ち上がり、川崎を振り返った。

真っ直ぐに目を見る。

「あなたの部屋で抱かれてから、ずっと生理がない」

川崎が一瞬言葉を失ったのを見た時、自分の狙いが正しかった事を確信した。

頭がすつと冷静になって行くのを感じる。

川崎が私を抱いたあとに生理があったことなど、彼は知るはずもないのだ。

彼は独占欲に駆られ、避妊せずに私を抱いた。

「本を見て、月数を数えてみたの。もう四ヶ月よ。私は産みたいの」

本当は三ヶ月を超えたところだったが、先のことより今ここを乗り切ることだ。

私を見つめる川崎の前で、お腹にそつと手を触れた。演技をするまでもなく、自然に表情が和らぐ。

「可愛くてたまらないの。毎日私のお腹の中で大きくなっていく…。施設にいたら産むことはできないわ。私にはどこにも行くところがない」

黙ったままの川崎に、駄目押しするように私は言った。

「信じてくれないならそれでもいいわ。ここからすぐに出て行くから」

「……奴とはまだ会ってるんだろ」

川崎が動揺を押し隠すように、手を握ったり離したりしている。宏章とはずっと会っていない。

記者の目を眩ますために結城とコンビニで入れ替わった宏章と、マンションで一度過ごしただけだ。

川崎はおそらく時々私の行動を見ていたのだろうが、半信半疑で聞いている彼の様子からすると、その時のことは知らないに違いなかった。

「もう終わってるの。霧島がいつまでも私に固執するわけがない。誰かに私の乱れた写真を見せられたらしいわ。私が汚れているから嫌になったみたい。彼はお育ちが良くて潔癖なのよ。もう二度と会いたくない、顔も見たくないって」

それで決まりだった。黙って考えていた川崎が、ついに口を開いた。

「ここに住むんなら、お前にも仕事をさせるぞ。昨日みたいにオヤジを引っ掛けるんだ。お前に手出しをする直前に、俺がそいつを脅して金を巻き上げる。いいな？」

私は頷いた。

川崎が部屋を出て行った後、部屋の畳の上に崩れるように座り込む。

張り詰めていた気持ちの反動で、今更のように身体が震えだした。よかった……。これでこの子を無事に産んであげられる……。

けれど、そう思った途端、自分がしようとしていることの無謀さに恐ろしくなった。

私は本当に子どもを産むのだ。

川崎と一緒に住み、彼を騙したまま。  
その先、いったいどうするつもりなのか。

未成年の私が子どもを産んで育てていけるのだろうか。  
病院にも行けず、どうやって子どもが生まれてくるかもわからないのに。

怖かった。

妊娠も、出産も、何より母になることが。  
それでもこの子を失いたくない。  
不安に揺れる心を、無理に押し殺す。

私はバッグの中の荷物を出し、作り付けの粗末な箆笥を開けると  
川崎の服の横に自分の衣類を掛け始めた。

テレビから、今日午後に行われる高校選手権の決勝のニュースが  
流れている。

注目選手は一年生ながら超高校級の実力を持った慶京の蔵木  
陸人と、前試合二得点、今日はスターティングメンバーが予想され  
る華南学院の霧島宏章。

二人の名前を耳にしながら、私はニュースの途中でテレビのスイ  
ッチを切った。

暗い奈落の底に続く崖の上を、不安定に歩いている。

そんな夢をよく見ては、恐怖で目を覚ます。

隣で眠る川崎の規則正しい寝息が、いつしか私の心を落ち着かせるようになっていた。

平らだったお腹は急に膨らみはじめていた。

それと同時にあれほど酷かったつわりも治まり、急に食欲が出始めた。

夕方には亮子のスナックの仕込みを手伝って、恥ずかしいほどたくさん食事を食べさせてもらう。

「その細い身体にこれだけ入っちゃうんだから凄いね。はい、おかわり」

亮子が店のカウンター越しに、私に山盛りによそったご飯を手渡しながらあきれて言った。

私の両隣には、隆二と小学校一年生の兄の匠がぴたりくっ付くように座って、一緒に夕飯を食べている。

「すいません。お腹が膨らんできたの、もしかして赤ちゃんじゃなくて食べすぎかしら」

私は赤くなって言った。

これほど食欲があるのは生まれて初めてだ。

亮子の作る食事は、どれもこれも優しく暖かい味がする。

「あつ。兄ちゃん愛美姉ちゃんに触った！」

隆二が口を尖らせ、私の腕に両手を回して頭をくっ付けた。

「ちょっとただだもん。隆なんか、赤んぼみたいじゃん！ いつも愛美姉ちゃんにべたべたくっついてさ。もうすぐ赤ちゃん生まれるんだぞ！ そしたらお前なんか近づけなくなるよーだ」

匠の言葉に隆二が涙目になり、持っていた箸をカウンターに置いてしくしく泣き始めた。

「だいじょうぶよ、隆ちゃん。赤ちゃん生まれても仲良しでいようね」

私は隆二に手を回し、横を向いてしまった匠も片腕でしっかりと引き寄せた。

二人はすぐに笑顔になる。

「愛美ちゃん、あんたあたしより経験のある母親みたいだね。颯ちゃんもいいお嫁さんが来てほんとに良かった。あの子見てると切なくてしょうがなかったのよ。そんなふうに見られてたって知られたら、颯ちゃんに怒られるから内緒だけどさ。」

ここへ来てから女の子一人連れ込まなかったよ。友達がいる様子もなかったし」

この世話好きでおおらかな女性は、無口で人との交流を嫌う川崎を心から心配しているようだった。

「もうすっかり身体も落ち着いてきたから、そろそろ颯ちゃんを寂しがらせないでやったら？」

私と川崎の間にあるべき関係が何もないことを、亮子は見抜いていた。

私はあいまいに笑って受け流し、それが恥じらいに見えたいと願う。

「颯にいちゃん、何が寂しいの？ 母ちゃん」

「お前も大人になったらわかるよ、隆」

隆二が無邪気に聞いた言葉に匠が訳知り顔で答える。

「まったく、子どもの癖に何言ってるんだか」

亮子の言葉に吹き出した。  
みんなも一緒に笑い出す。

私に初めて家族というものを教えてくれたのが彼らだった。  
決して豊かでもなく、父親もいなかったが、そこには確かに私が  
憧れてやまない暖かな感情が流れていた。

「あら、お帰り、颯ちゃん。早かったわね」

亮子の言葉に振り返ると、川崎が珍しく早い時間に帰って来て店のドアを開けたところだった。

最近は日中の仕事の後、二時間ほど他のバイトをしているので、  
ずっと帰りが遅かったのだ。

「ここでごはん食べてったら？ 今愛美ちゃんに、そろそろちゃんと夫婦の生活始めなさいって言ってたところよ。もう安定期なもの、



心配ないわよ、颯ちゃん」

「ああ。どうも……」

川崎は言葉少なに答えたが、私を見たのがわかる。

彼が求めるのは当然のことだ。

悪気なく言われた言葉だったが、それは私の身体を緊張させた。

昨日の夜のことを思い出す。

川崎と暮らすようになって初めて、彼は眠っている私の布団の中に身体を入れてきた。

その気配に目を覚ましたが、そのまま気づかぬ振りをして目を閉じていた。

彼の手が私のお腹にそつと触れ、唇が重なるのを感じた。

けれど川崎はそれ以上何もせず、ただずつと私を抱いていたのだ。

川崎の気持ちちが胸に染み、複雑に心が揺れていた。

私が彼に対して持っている気持ちは、いつの間にか自分でも説明することができないものになっていたのだ。

彼という事は今では心安らく日常だった。

けれどそれは川崎が私に求めている気持ちと同じものとは言えないだろう。

こうして川崎と暮らしている自分の事を考えた。

夫婦のように川崎を玄関で送り出し、帰りを待つ日々。

卑怯で嫌らしい女だと思う。

私は川崎を騙し、利用しているのだ。

宏章の子どもを産みたいために。

親身に世話してくれる亮子と川崎の前で、私はどうしても顔を上げることができなかった。

「隆、匠、愛美ちゃんの隣り、あけなさい。颯ちゃんが座るんだから」

「はあい」

カウンターに座る私の横に、作業着姿の川崎が座った。耳のピアスも外し、赤く染めていた髪も、自然な黒髪に変わってきている。

「赤ん坊が……」

川崎が独り言のように言った。

「赤ん坊がタオルのおもちやを持って遊ぶのは生まれてからどれくらいたってからなのかな」

その時、匠がふと顔を上げてカウンターの端に乗った小さなテレビの画面を指差した。

「あつ。母ちゃんの好きなサッカーの人だ」

「あら、ほんと。いい男よねえ。父親も素敵だけど、息子はもうどこから見ても溜め息しかでないわ」

亮子が嬉しそうに身体を乗り出してテレビ画面を見つめた。  
ブルーのユニフォームを着た選手が、インタビューに答えているところだった。

食事の手が止まり、目が画面のに映った選手に釘付けになる。

宏章だった。

川崎の視線を感じていたが、目を離す事ができない。

優勝後のインタビューのようで、淡々と応える姿には隠しきれない誇らしさと喜びがあった。

懐かしさと、沸き上がる恋慕の情で胸がいつぱいになる。

手を伸ばし、触れることができれば。

「こんな時に流さなくてもいいのに、視聴率稼ぎが見え見えだわね。この人の母親が自殺未遂したって今日のワイドショーは大騒ぎだったわよ。父親はついに事情聴取されてるし、息子が気の毒ねえ。親が有名なおかげであることないこと書き立てられて」

亮子が手に持った皿を布巾で拭きながら溜め息をついた。

「……自殺未遂……？ 自殺未遂って本当ですか？ 霧島代議士の奥さんが？」

亮子に強く聞き返していた。

宏章の母親が自殺未遂……。

ようやく宏章が自分の力で前に進み始めていた時に……。

「昏睡状態だつて。もうこの一家もボロボロね。まあ、奥さんは相当遊んでたらしいけど。どうしたの？ 愛美ちゃんも霧島くんのファン？ 颯ちゃんが焼きもちやくわよ」

知らずに立ち上がったいた。

宏章はどうしているだろう。

いくら気丈な彼でも、短期間の間にここまで酷い事が続いて耐えていけるのだろうか。

「愛美」

川崎が私の腕を強く掴んで低く囁いた。

「終わったはずだろ。違うのか」

川崎の射るような視線に、私はなす術もなく頷いた。  
今の私に何ができるというのか。

テレビからは宏章の声が聞こえている。  
会いたくて胸が張り裂けそうだった。

「部屋に戻るぞ」

私の身体を引き寄せ、両腕できつく抱きしめて川崎が言った。

「俺と一緒に部屋に帰ろう、愛美……」

苦しげに囁いた彼の声が、今でも耳に残っている。

それは彼が私のお腹に触れながら唇を重ねて来たあの夜の記憶と共に、私の心の中に深く刻みつけられた。

川崎に肩を抱かれたまま亮子の店を出ると、三人の男が中に入ろうとしている所にぶつかつた。

見ただけでまっとうな人たちではないことがわかる。

「颯、お前に用があつてきたところだ。いいタイミングだな」

黒っぽいジャケットを着た三十代の男がタバコをくわえると、すぐにもう一人が火をつけた。

彼らが持つている独特の雰囲気からして、川崎が匂わせていた暴力団に違いない。

タバコをくわえた男はわたしを上から下まで嘗め回すように見ると、川崎がわたしの肩に回している手を見て口の端に冷たい笑いを浮かべた。

「最近はどうした？ 颯。あんなにいい仕事してたお前がちつとも上がりを持つて来ねえから、具合でも悪くしてんじゃねえかって心配してたところさ」

「すみません。数日中に必ずちゃんとした仕事しますから」

川崎の横顔を見あげると緊張しているのがわかる。

「そうか。期待してるぜ。ところで、お前の顔見に来たのはもつと大事な話があつてのことだ……。なあ、颯。お前、例の議員に直接ゆすりの電話をかけたんじゃないか？」

男は煙草の煙を川崎に吹きかけながら言った。

「いえ。そんなことはしてません」

川崎は声を落着かせようとしていたが、私を抱いた腕が強張っている。

「不思議だな。奴は俺らとの交渉を数日前から渋り始めた。何かあるんじゃないかって事務所の金庫の中を開けてみたら、例のものが綺麗さっぱり消えてんのさ。中身が入れ替えてあつて、一見それと気がつかないようになってる芸の細かさだ」

男はゆっくりと煙草を吸い、白い煙を吐き出す。

「事務所に入入りした奴全員と話をしてなあ、俺の金庫を開ける度胸のある組員を探したんだよ。ここにこのいつらを含めてな……」

見ると、男の少し後ろに控えるように立っている若い男たちの指には包帯が巻かれ、そこから見える手が青黒く変色している。何をされたのかを、彼らが男を見る怯えた表情から知った。恐ろしさに背筋が凍る。

「あとはお前だけだ。疑いたくはなかったんだが……。死んだお前の親父とは旧知の仲だったからなあ……」

「俺じゃありません」

川崎は男を見返しながら、私を少しづつ自分の後ろへと下げていった。

「今まで誰よりも目をかけてやって、お前も年に似合わねえほどいい働きをし始めた。お前は頭が切れる奴だ。このまま育ってくれりゃあ後見人の俺も上に対して鼻高々になるところだった。お前も組に入る事を望んでたはずだろ……」

男は煙草を指で弾いて捨て、私にゆっくりと目を向けた。

「何を急いで金を手に入れたがってるのか不思議だったよ」

少しお腹が膨らみ始めた私は、亮子からもらった楽なフリースのワンピースを着ていた。

男の視線を感じるまで、お腹を庇うように手を当てていたことにも気がつかなかった。

「いい女だ。お前が血迷うのも無理ねえな。金を持ってこいつとろんずらって計画か。腹の子をまっとうに育てたいってか？」

これといった特徴のない男の目が、狂気を含んだ残忍な光を帯び始める。

「お前の狙いはそれだけじゃねえな？ 金だけが目的なら、他に方法はいくらでもある。なぜあれを盗み出した？ お前のことだ、なんか計画があつたんだろ？」

だがな、それも終わりだ。惚れた女連れじゃあ遠くに逃げることもできねえしな」

私の手を取り握り締めた川崎の手は、冷たい汗でびっしょりと濡れていた。

男が私を見やる。

「この世界には流儀があるんだよ、お姉ちゃん。まずは俺に挨拶だ。それから腹の子とお前の男が一番苦しむ制裁をゆつくり加えてやる」

恐怖で身体が凍り付いていた。

叫び声を上げたくても声すら出てこない。

「逃げろ、愛美。できるだけ遠くに行くんだ……！」

川崎が私を後ろへ押すのと店のドアが中から開くのが一緒だった。

「川崎さん！」

店の中へと誰かの手で引つ張り込まれた途端、目の前でドアがバタンと閉まる。

「畜生！ 生意気なまねしやがって！」

ドアのすぐ外で怒り狂った男が叫ぶ声が聞こえた。

「川崎さん！」

ドアにすがり付く私に、板を隔てた向こうから川崎の声が聞こえる。

ドアに身体をつけて守っているのだ。

「行けよ！」

川崎が殴りつけられるうめき声が聞こえ、ドアに何かがぶつかった。



「裏口に匠がいるよ！ 早く逃げて！」

亮子がドアに鍵をかけ、その前に椅子やテーブルを積み上げている。  
躊躇している私に亮子が声を張り上げた。

「行きなよ！ 颯ちゃんの気持を無駄にする気？」

「亮子さんは……」

「すぐに後を追うよ！ 早く！」

「愛美姉ちゃん！」

裏口で匠が声を上げた。

私はドアをもう一度振り返ると、匠の後を追って裏口から狭く入り組んだ路地へと急いで足を踏み入れた。

「こつちだよ、お姉ちゃん」

匠が手招きしたのは小さなビルの狭い裏口の階段だった。

必死で駆け上がると、もう部屋の中に足を踏み入れた匠の代わりに派手な化粧の大柄な女が顔を覗かせ、私を中に引き入れた。

後ろ手にドアを閉めた女は厳しい表情のまま私の手を引き、カーテンで区切つてある畳の部屋に私を押し入れた。

「あんたたち、さっさと子の子に違う服着せな。妊婦だからお腹に

気をつけるんだよ。ほらミドリ、あんたこの子に化粧してやんな」

呆然と立ったままの私は、女の手ですぐにワンピースを脱がされた。

「はい」

派手な衣装を着て思い思いに寝そべっていた厚化粧の女達が起き上がり、私の回りに寄ってきた。

手早く薄いラメのワンピースを着せられ、寒くないようにとハンガーにかかった誰かの白いフェイクファーのコートに包まれる。

ミドリと呼ばれた少しふくよかな女は、私を簡素な丸椅子に座らせながら小さくため息をついた。

「あんた、物凄く綺麗ねえ。若いし。あたしらみたいに無理な若作りしなくてもお肌がプルプルで羨ましいよ」

言いながらすぐに私の髪を引っ張って引きつめ、ピンで手早く留めると派手な茶髪の鬘をかぶせる。

「あらまあ、こんなの被せてもお人形みたいだ。あんたみたいな顔に生まれてたら、あたしらもこんなとこにいなかったんだけどねえ」

「こんなところで悪かったね、ミドリ。匠、あんたは隣の子ども部屋で他の子と遊んでな。隆二もいるから」

私を連れてきた大柄な女は、腰に手を当ててミドリをちらつと睨むと匠に優しくそう言った。

ここの部屋にいる女たちの子どもが遊ぶ部屋があるらしかった。匠がドアの向こうを不安そうに振り返る。

「でも、母ちゃんが……」

女が匠の頭を強く撫でて言った。

「亮子は、ちゃんと上手いことやるさ。だって、あたしの親友で、あんたの母ちゃんだもん。そうだろう？」

匠は目に浮かんだ涙を袖口でさっと拭くと気丈に頷き、部屋から出て行った。

身体の震えが止まらない。

あの残忍な男たちの中に川崎がまだ一人でいるのだ。

そして、店の中にはまだ亮子が残っているに違いない。

「泣いたらマスカラが流れるだろ」

ミドリが私の肩を抱き、安心させるように何度も撫でた。

「颯ちゃんはあたしも知ってるよ。亮子ちゃんが年甲斐もなくのぼせちゃったってよく言ってたからさ。死んだ旦那に似てるんだって。あの子の旦那はそりゃあ男気のある人だった。亮子ちゃんが惚れるんなら、颯ちゃんもそういう男だよ。何が何でもあんた達を守り通すさ」

ミドリの言葉に頷くと、流れる涙が膝の上のドレスに零れ落ち、しみを作った。

川崎は私を連れてどこか遠くに行こうとしていたのだろう。お金を手に入れ、それを元に生活を築くつもりだったのだ。

それなのに私は川崎の真摯な愛情から目を逸らしていた。  
わかっていたのに。

彼の気持ちが痛いほどわかっていながら、自分を守ることだけ考えて。

今、彼は私を逃がすために残虐な制裁を受けている。  
お腹の子どもが自分の子どもだと信じて……。

次々と部屋にいた女達が呼ばれ、部屋の中には私とミドリのほか  
に、二人ほど女が残るだけになった。

簡易に取り付けてあるドアが開き、さっきの女が私を見て言った。

「エミちゃん、ご指名だよ。いいねえ、目がつぶれるほどの男前だ」

「えっほんと？ あたしじゃだめ？ モエ子姉さん」

ミドリがピヨンと飛び上がると女に言った。

「いちんちに大福ひとパック食べる習慣がなくなったら、あんたにもチャンスがあるかもね。さ、エミちゃんおいで」

けばけばしいネオンと電気が輝く狭い店の中には、あちこちの椅子で男たちと抱き合ったりお酒をついだりしている女達がいる。

モエ子の後についてうつむいて歩いていった私は、一番大きなソファに座る男の前に通された。

もう、何かを考える気力すらなく、私はモエ子に言われたままに男の隣に腰を下ろした。

「可愛い子だな。気に入ったよ」

男の言葉にモエ子が頷いたのを感じる。

「そうでしょ。運がいいわよ、お客さん。じゃ、エミちゃん、この人の言うことを聞いてね……」

モエ子が立ち去ると男はすぐにつつまれている私を抱き寄せ、耳元で囁いた。

「心配したよ、愛美」

聞き覚えのある声に驚いて顔を上げる。

「結城先生……」

それは、結城医師だった。

「どうして……」

「しっ。静かに。他の女の子みたいに俺の首に腕を回して」

入り口のドアが開き、さっきの男達の一人が中を見渡している。

私は身体を振るわせたまま医師にしがみ付いた。

医師は私をソファに押し付けるようにして自分の身体で男の視線を遮ぎり、囁いた。

「しばらくしたら俺と一緒に立ち上がって、抱きついたらままだよ。いいね？」

「お客さん、それ以上はお店じゃ困りますよ。やめるか出てくかどうかにして下さいな」

モエ子が近づいてきて、医師にそう言った後、お酒をテーブルに置く振りをしてしゃがみ、小声で続けた。

「あいつ、三軒先の店に入ってきましたよ。少し捕まえとくように電話して頼んどいたから、今すぐ出て下さい」

「ああ、わかったよ。出ていくから……」

結城医師は大げさにそう言うのと私に腕を回したまま立ち上がり、抱きしめる振りをしてそつと言った。

「店の前に車が止めてある。そこまでちゃんと歩ける？」

「はい……」

頷いた私をしっかりと抱き寄せ、医師はそのまま歩き出した。

「いい店だ。また来るよ」

戸口まで見送ってきたモエ子に医師はそう言い、私を車に乗せる。

「先生、お願い。助けてください！」

私は車に乗り込むとすぐに結城医師の腕にしがみついた。

「男の子が……。私と暮らしてた男の子が暴力団に酷いことをされてるんです。早く助けてあげないと、殺されてしまうかも知れない……」

泣いている事にも気がつかなかった。

「男の子？ 俺に連絡しろと伝言を残した川崎って子のことか？」

どうして医師が川崎から伝言を受けていたのか。

なぜ私の居所を知って助けに来てくれたのかを考えている余裕など、まったくなかった。

「この先の、路地に入るところに小さなスナックがあるんです。その前で……」

「わかった。案内して」

医師の車が走り出した。

その時の事を忘れることはない。  
彼は私の心に、永遠に住み続ける。  
もう一つの小さな命とともに。

医師がスナックの前に車をつけると、すでにパトカーがとまり、  
警察の姿が見えた。

必死で人垣を掻き分け、開け放たれたスナックのドアの中に足を  
踏み入れる。

亮子が泣きながら抱き起こそうとしている血だらけの少年の姿を  
見て、私はその場に崩れ落ちるようにひざまづいた。

「川崎さん……」

ナイフで切り裂かれた血まみれの背中。

そこには、目を覆いたくなるほど大きな古い火傷の跡があった。  
引き攣って変色したままの皮膚。

顔色を変えてすぐに駆け寄った医師が、警察に自分は医者だと名  
乗りをあげ、亮子に何か指示をして流れ出す血を止めようと懸命に  
なっている。

「あいつら、警察が来る前に裏口から入ってきて、表にいた颯ち  
やんを中に引きずり込んだのよ。警察官にはなんでもないうて言え  
ってあたしに……。颯ちゃんの首にナイフを突きつけてたから……。  
ああ、颯ちゃん……」



まだ救急車が来る様子はない。

亮子が震える手で川崎の身体から流れ出る血を抑えようとしている。

「出血が多すぎる。すぐに病院に運ばないとだめだ」

直接、医療センターと携帯で連絡を取っていた医師が、切迫した表情でわたしを見た。

「救急車が、ビルの火災現場に回っているそうだ。ここまで二十分以上かる。間に合わない。愛美、俺が運転するから、この携帯から病院の当直医師に連絡を取ってくれ」

警察官と他の男の人の力を借りて、医師の車に川崎が運び込まれた。

亮子とともに車に乗り込む。緊急事態に、パトカーがサイレンを鳴らして医師の車を先導した。

何事かと道の端によける車の列。

川崎は後部座席で私の腕の中にいた。  
流れ出る血のためにガタガタと震えだしている。

「愛美ちゃん、これを掛けてやって」

亮子自分が着ていた厚いカーディガンを前の席から私によこした。

私が川崎をくるんだ白いファアのコートは彼が吐き出した血で真っ赤に染まっている。

「川崎さん……。しっかりして……。私よ。わかる？」

川崎はようやくうつすらと目を開けて私を見た。

「……化粧してるお前を始めてみたな……」

彼の顔に小さく笑みが浮かぶ。

「……………綺麗だ……………」

川崎はゆつくりと手を持ち上げ、力のない指先で私の頬に触れた。次々と溢れる涙が川崎の血まみれの顔にばたばたと零れ落ちた。

「話しちゃだめよ……………」

私は川崎の手を取り、自分の頬に押し当てた。彼の指先が恐ろしいほど冷たくなっている。

「あいつの……………子なんだろ……………」

川崎は途切れ途切れに言葉を絞りだした。

「……………お前……………一人だけで……………育てられるわけ……………ねえよ……………」

知っていたのだ。

全て知っていて……………。

私はただ泣いて彼を抱きしめていた。

「……………死ぬのは怖くない。一人が怖かった……………。誰にも必要とされずに生きてるのが怖くて……………」

「私もよ。……私も同じよ……」

川崎の目から流れ出た涙を、震える指で拭う。

「……………ガキの頃、お袋に火をつけられたんだ……。その時死んでいればよかったって、ずっと思ってた……」

車の助手席で、亮子が嗚咽している。

結城医師はきつくハンドルを握り締めたままだ。

川崎は何度も閉じそうになる瞼を開けて、ぼんやりとかすむ眼差しを私に向けていた。

まるで姿を焼き付けるかのように。

川崎は私の首から下がった銀のクロスに触れた。

「これを掛けた奴はお前に無理やり自分を刻みつけたんだ……。俺と同じだよ……。自分が生きてたことを誰かに覚えていて欲しくて……。思い出して欲しくて……」

身体の震えが激しくなる。

彼の声はもうほとんど聞き取れないほど小さくなっていた。

「お前を初めて見た時、天使みたいだって思った。……なんでこんなところに来たのかっ…………て……」

クロスを握り締めた川崎の身体が、大きく麻痺して何度か引きつった。

唇の端から新たな血が流れ出す。

「川崎さん！川崎さん……！」

流れ出す血を夢中で拭った。

「……亮子さんに……預けて……あるから……」

少年は微笑むように私の顔を見、そのままゆっくり目を閉じた。  
私のクロスを慈しむようにそっと手にしたまま。

少年が閉じた目は、そのまま二度と開くことはなかった。

車の窓から差し込むステンドグラスのような夜の街の明かりが、  
眠っているように安らかな少年の亡骸を照らし出している。

私は少年の名を繰り返し呼びながら、まだ暖かい彼の身体を強く  
抱きしめていた。

どれくらい時間がたったのか。

霊安室で静かに横たわる川崎を前に、私はただずっと椅子に座ってぼんやり彼を見つめていた。

十六年の人生は、彼にとってどれ程の長さだったのだろう。

青い月の下、細い桜の木にもたれて私の部屋を見上げていた川崎を思い出す。

私を抱いた彼の背に手を回した時、傷口に触れられたように身体を振るわせた少年の姿。

人は命を終えることを選べても、生まれて来ることを選べない。

私のお腹の赤ちゃん。

この子が私のような思いをすることになったら。

私の知っている沢山の子ども達と同じ、過酷な人生を過ごさないとどうして言えるだろう。

玖出の目を思い出す。

幼い陸人が嗚咽する姿。

優花の手に残る火傷の跡。

そして川崎の焼け爛れた背中。

ただ愛されることを請いながら、もつとも残酷な感情を突きつけられた子ども達。

人生は繰り返すものなのではないのだろうか。

親が自分の人生を幸せだと感じられないなら、子どもを幸せにできないのではないか。

生まれてくれば全て幸せになれるのだと、奇麗事を言うことができなかった。

子どもを愛せない不幸な親から、また不幸な子どもが生まれる。  
抗えない運命というものが最初からあるとしたら。

「愛美、いつまでもここにいては身体が冷え切ってしまう」

結城医師が部屋に入ってくると、私の肩に優しく触れた。

「陸人には連絡したよ。佐久間先生が明日車で迎えに行つて、一緒にこつちへ来るそうだ。愛美がいない間、二人とも心配して何度も俺の所に連絡をよこしてたんだ。見つかったと聞いて、本当に安堵していた」

「御心配おかけして、本当にすみません」

私は重い身体を持ち上げるように立ち上がり、医師に頭を下げた。

「いろいろありがとうございました」

「もつと早く迎えに行けたらと悔やんでる。探したんだが手がかりがなかった。今回のことがなかったらとても見つけれなかったよ。自分にもし何かあったら俺に連絡を取ってくれて、数日前に川崎くんがあ的女性に頼んでいたそうだ」

きつと覚悟を決めていたのだろう。

彼は小さな可能性に命を賭けたのだ。  
胸が突き刺されるように痛む。

医師は川崎の亡骸に視線をやつて、静かに言った。

「可哀想だが、彼はもう亡くなったんだ。でもお前はまだ生きてい

て、これからも生き続けるんだよ。彼の死を乗り越えるのは簡単じゃない。あせらず、ゆっくり進む事だ」

廊下に出ると、泣き腫らした目をハンカチで押さえていた亮子が私に近づき、優しく抱き寄せた。

「颯ちゃん眠ってるみたいだったわね。きっと愛美ちゃんに看取られて安らかなまま旅立ったのよ」

私の腕の中にいた川崎の表情を思い出す。

うつむいた私の目から零れ落ちた涙が、亮子の肩を濡らした。

医師が亮子に礼を言った。

「佐藤さん、愛美を助けて下さってありがとうございました。あなたにお怪我がないのは不幸中の幸いでした。よかったです、しばらく愛美に付き添っていただけませんか。警察の方が事情聴取に見えています。私はこれからいろいろ手続きを取らねばなりません」

川崎の遺体がどうなるかを、医師は私には言わなかった。

事件に巻き込まれた遺体がどのように調べられるかを聞かされて絶えられる精神状態ではなかったからだ。

私はまだ、無力で傷つきやすい子どもに過ぎず、医師はいつもそれがわかっていたのだ。

亮子は医師の言葉に辛そうに眉をひそめ、頷いた。

「わかりました」

「愛美、お前の身体が心配だ。大切な話があるから話が終わっても少し待っていなさい。いいね？」

結城医師の声は優しくかったが、有無を言わせぬものがあつた。

「そうね、赤ちゃんがいるのに冷やしちゃいけないわ」

私と子どもを気遣う亮子を見て、医師が言った。

「佐藤さん、愛美はまだ十四歳なんです」

その一言で、医師が何を言おうとしたのかがわかつたのだらう。  
亮子は驚き、心配そうに私を見た。

「そんな……。それじゃあ……」

覚悟はしていたが、うつむかずにはいられなかった。  
動揺で震える私の肩を亮子が抱いた。

「愛美ちゃん……」

医師が立ち去つた後、廊下の椅子に座り、亮子が私の手をそつと握つて言った。

「この子の父親は愛美ちゃんが妊娠してる事を知らないの？」

「はい。妊娠した後、会う事ができなくて。彼の家は大変な騒ぎに巻き込まれていて、これ以上心配を掛けなくなかつたんです」



「愛美ちゃんは十六なのだと思ってた。颯ちゃんは十八なんだって……。もし年を知ってたら……。もう六ヶ月よね？」

「いいえ。本当は五ヶ月になるところです」

「それでももうそんなに月数が経ってるのね。ああ、なんてことなの……。もっと早く気がついてあげていれば……」

「私が悪いんです。最初から産めないことがわかっていたのに……。私のために川崎さんは……」

私がこの子をもっと早くあきらめていれば、川崎を死なせずに済んだのだ。

彼は私とお腹の子どものために死んでしまった。  
自分の子ではないと知っていて。

次々と涙が溢れ、頬を伝い落ちる。  
亮子は私の手を強く握り締めた。

「そんなふうになったら、颯ちゃんが怒るわよ。だって颯ちゃん、愛美ちゃんと暮らした二ヶ月が、間違いなく人生で一番幸せな時だったんだもの。あたしにはよくわかる」

「亮子さん……」

あの店の控え室でミドリが言っていた言葉を思い出す。  
亮子は川崎に想いを寄せていたのだ。

それでも彼女は川崎ごと私を包んでくれた。

「あたしの旦那も匠の父親じゃなかったの。だけど、ほんとの父親よりも匠を愛してくれた。病気で死ぬ時も、お前たちのおかげで本当に幸せだったって繰り返して……」

亮子は泣きながら笑顔を作って見せた。

「幸せは、形でも時間でもないわ。たとえどんなに短くとも、そのために死ねるほどの幸せもあるのよ。」

天国には、あたしの旦那がいるから大丈夫。面倒見のいい人よ。颯ちゃん今頃、辛気臭い顔してないで天国生活楽しめよって旦那にお尻叩かれてるわ。愛美ちゃんに見せたいくらい男前だったの。あの先生よりはほんのちよつとだけ落ちるけどね」

川崎が眠る霊安室のドアを見つめながら、泣きじゃくる私に亮子は言った。

「颯ちゃんのためにも、愛美ちゃんは幸せにならなくちゃいけない」

私はその夜、結城医師のマンションに泊まることになった。

施設には戻りたくないだろうという配慮と、私の精神的なシヨックの大きさを気遣ってくれてのことだ。

マンションには医師の弟もいて、いつものさり気ない気配りで私の気持ちを落ち着かせてくれた。

私は自分でも少し落ち着いたようにすら感じていたのだ。

けれど川崎の死は、完全に私を打ちのめしていた。

次々と押し掛かる過酷な現実の前に、私の心は自分でも気がつかないうちに悲鳴を上げ続け、壊れてしまう寸前にあった。

悲しみが心を麻痺させている事に気がつかないままに。

暖かな部屋着を着て、ベッドに休む私の所に結城医師がやってきた。

手にはよい香りがするミルクティーのカップを持っている。  
佐久間が保健室で私に入れてくれた紅茶の香りを思い出した。

医師は起き上がった私にカップを手渡してベッドの横に椅子を引き寄せた。

「病院に、宏章がいたんだ」

医師は私の目を見てそう言った。

その名前を聞いただけで、思慕で胸が締め付けられる。

彼の母親が自殺未遂したと亮子はある時言っていた。

宏章は今どうしているだろう。

「会わせてやれなくてすまない。愛美が見つかったことは、まだあいつには告げていないんだよ。その前に愛美と話したくてね。お前のお腹の子どものことだ」

私は頷いた。

「父親は宏章だね？」

「はい」

医師は私の表情を見ながら一言一言確認するように話す。

「最後の生理が終わったのはいつだった？」

「十一月に入ってからです」

「ぎりぎりだ。決断を急がなくてはならない。ここで選ぶことはまず二つ。子どもを生むか、中絶するか」

医師は私を真剣な表情で見つめた。

「俺は医師だ。人の命を救うために、日々最善の努力を重ねている。宿った命の尊さは充分理解しているつもりだ。中絶を養護するつもりはない。だが、場合によってはそれを選ぶしかないとも思っているよ。母胎が危険な場合。そして、両親が幼すぎる場合だ。」

今日愛美を診察した産婦人科の医師と話した。今の愛美の身体では若年出産に強い不安があること。このまま妊娠を継続した場合、母子ともに問題が起こる可能性がある」

そこで一息つき、医師は黙ったままの私に言った。

「入院して安静にしながら出産することも不可能ではないだろう。だがその場合は、生まれた子どもを愛美が手元で育てるのは難しい。理由はわかるね？」

私はようやく医師の顔を見返し、言葉を押し出した。

「……一晩考えさせていただけますか」

「愛美の身体のためには一日でも早く決意するほうがいい。もし中絶を選んでも、そのことで自分を責めることはない。愛美は未成年で、俺が主治医として決断を促したことだ。

三日後が川崎くんの葬儀になる。喪主は佐藤さんが引き受けて下さるそうだ。もし、処置をするならその翌日だ。それ以上は引き伸ばせない」

はい、と言葉に出したつもりだったが、どうしても唇が震えて上手く言葉にならない。

「愛美にだけ先に話しているのは理由がある。宏章の母親の事は二ユースで見た？」

声を出さずにもう一度頷く。

「夫の目の前で薬を飲んだ。劇薬だね。すぐに病院に運んで胃洗浄をしたんだが、未だに昏睡状態だ。宏章もその時の両親の姿を全て

見ていたんだよ」

「そんな……」

「宏章の父親も今回の事で精神的にもかなり追い詰められていて、正直目が話せない状態だ。まだマスコミには流れていないが心労のあまり病院で倒れてね。病院の周りにも記者が張り付いてるから、明日はまた大騒ぎだ。

愛美は日中病院へ行く事を避けて欲しい。すくなくとも明日はここにいるんだ。伶を残しておくからね。陸人と佐久間先生も来る」

「宏章さんは……」

医師は真剣な口調で言った。

「病院に泊り込んでるよ。気丈に振舞ってはいるが酷くショックを受けていて、精神状態が不安定だ。会わせてやりたいが時期が悪すぎる。ハイエナのようなマスコミの奴らはほんの少しのスクヤンダルも取りこぼさないように必死になってるからね。

子どもの事は俺から宏章に伝える。気持ちを落ち着けるのは難しいだろうが、二人とも何とか乗り越えて欲しいと願ってるよ」

私は声もなく頷いた。

今までも迷惑を掛け続けていた医師に、これ以上心配をかけてはならない。

医師は部屋から出て行く時、私の肩にそつと手を触れて言った。

「お前たちはまだ幼すぎる。酷い状況の中で早く大人になることを無理強いされているお前たちが痛々しくてたまらない。子どもが大

人になっていくには、一段一段しっかりと階段を上がらなければならぬと俺は思ってる。飛び級はできないんだよ。必ず心が悲鳴を上げる」

小さな明かりをつけたまま枕に持たれた。

少し膨らんだお腹にそつと手を触れる。

どうすべきなのか、医師との会話で答えは出ているのだとわかっていた。

医師が辛い言葉をあえて自分から口にしたのは、私の苦しさを少しでも和らげようとしてくれていたからだ。

それでも、決断を口にすることができない。

私と宏章の赤ちゃん。

その時ふと、お腹の中で何かが動いたのを感じた。

驚いて息をひそめた私の子宮で、もう一度押し上げるような小さな動き。

それは初めて感じた微かな胎動だった。

小さな命が私に生きていることを懸命に伝えている。

言葉には言い尽くせないさまざまな想いが胸に去来する。

私は耐え切れずに両手で顔を覆い、声を押し殺して泣き始めた。

医師のマンションの窓から下に見える近くのビルの前に、昨日の暴力団の手下の一人がいるのを見つけた時も驚くことはなかった。そして、その数人の男達の中に私の写真を使って宏章を恐喝した、あの記者の顔が見えたことも。

一晩中眠れなかった私の目に、それはまるで覚めない悪夢の続きのようにぼんやりと映っていた。

今朝方早くにモエ子を訪ねてきて、亮子が川崎から私宛に預かっていたという荷物といくつかの遺品を手渡された。

「亮子と子ども達は、しばらくあたしが世話した場所にいることになったから心配しないでいいよ。あんたはとにかく身体を回復させなきゃ。向こうが透けて見える様な肌色になっちゃってるじゃないの。今にも倒れてしまいそうだよ」

男達はモエ子の後を追ったのだろうか。

彼らがどうやって情報を手にしているのかは知らないが、その迅速さと正確さには背筋の凍るものがあった。

川崎の遺品の中にあつた携帯に、あの男は電話を掛けてよこした。

「お姉ちゃん、俺達から簡単に逃げられると思っちゃだめだよ。もう、身元も割れてんだ。颯から預かったものをさっさと渡さないと、お前を庇ってる奴も痛い目にあわせなきゃならない。めっぽう金のあるお医者様らしいから、揺すり始めたら楽しいだろうな。」

言いがかりなんかどうにでもつけられる。俺は蛇のように執念深いんだよ」



携帯から、男の低い笑い声が聞こえる。

「このまま生意気な真似をしてると、お前の腹のガキも一緒に苦しめてやりたくなる。颯のようにな。」

あいつの親父は昔、大きな仕事の最中に足抜けをはかりやがった。罪もねえ母親は、悪い誰かの差し金で薬漬けになって、俺に返せねえほどの借金を作った。

親の落とし前は、ガキがつける。そうだろう？」

川崎の人生を地獄に変えた男。

呆然と携帯を握る私の耳に、別の男の声が聞こえる。

「久しぶりだね、蔵木さん。お腹の子どもは、本当は霧島ジュニアの子どもなんだろ？ それともお兄さんの子ども？ さつき病院で、どっちの子かかって霧島君に聞いたら、顔色を変えていたよ。君が他の男と暮らしてたのも、妊娠してたのも知らなかったんだね」

代議士は、自殺を図った妻の側にずっと付き添っていたと、医師は言った。

それは世間に向けて美談を装う手段だったとは、私には思えなかった。

憎み合い、罵りあいながらも何度もよりを戻していた母と陸人の父を思い出す。

男と女、夫婦の間には、どれだけ憎み合おうと断ち切れない、何か計り知れない感情がある気がするのだ。

付けっぱなしにした寝室のテレビには、ワイドショーが映っている。

川崎の事件は、ごく小さくニュースで流されただけだ。

名もない少年の死は、誰の興味も引かない。

川崎の命を奪った男達の代わりに自首したのは、以前川崎と行動を共にしていた、あの三人組の少年の中の一人だった。

ここのところ静まりかけた霧島代議士の話題が再燃していたが、今度は以前とは少し様子が違っていた。

宏章が逆境の中で高校選手権の優勝の立役者になった事も、その理由のひとつだろう。

追い詰められた代議士の妻の、自殺未遂。

ショックで倒れた代議士。

病院で二人に付き添う息子の姿は、世間の同情を少しずつ集め始めている。

取りざたされている代議士の暴力団がらみの贈収賄には、決定的な証拠が出ていなかった。

もしもこの事件への関与の証拠がこの先も出なければ、人の興味は違う方向に流れていくのではないかという気がした。

三月だというのに、窓の外に見える薄暗い空からは雪がちらちらと振ってくる。

もう春が来ると蕾を膨らませていた桜の木にも、冷たい雪は積もっているのだろう。

私は亮子が持つて来てくれた荷物の中から、白いコートを取り出した。

ポケットの中に現金が入った封筒を入れ、小さくまとめてコートを手に持った。

川崎の携帯からタクシーの予約を取り、十分後にマンションの前につけてもらう手はずを整えてある。

川崎が残した遺品の中には、現金が二十万と、リボンを掛けた包みがあった。

包みの中にあるものは、赤ん坊が持つて遊ぶ、タオルでできた白いうさぎの縫いぐるみだった。

赤ん坊がタオルのおもちやを持つて遊ぶのは生まれてからどれくらいたってからなのかな

涙がこみ上げ、頬を伝う。

私はその柔らかな縫いぐるみを頬に押し付け、呟いた。

「絶対にあの男達の言いなりにはならない……」

私の大切な人たちを、もう誰ひとり彼らには渡さない。

川崎からあずかった箱の上に、結城医師宛ての手紙を添えてベッドの上に置いた。

医師ならば、きっと宏章と家族を助けてくれるだろう。

私がここを出れば、彼らは後を追って来るはずだ。

陸人がここへ来る前に、早く出なくては。

男達が陸人に触れることがあつてはならない。

手洗いにいく振りをして、リビングの椅子の上で本を読む結城医師の弟の後ろをそっと通り抜ける。

息をひそめてドアノブを回し、私は医師のマンションを後にした。下るエレベーターの中で、コートに手を通す。

お姉ちゃん、このコート着てみて……。きっとお姫様みたいだよ。王子様が迎えに来るよ。

優花は私にそう言った。

御伽噺の世界。

私が生きて歩いていくのは、この辛く汚れた世界だ。

エレベーターから降り、路肩に寄ったタクシーへ向かって歩く。乗り込む前に、通りの角を曲がった所に立っている、見覚えのある見張りの少年に自分の姿を見せ付けるよう、立ち止まった。

私を見つけた少年が、大慌てで携帯を手にしている。

開いたドアに身体を滑り込ませようとした瞬間、誰かが私の名を呼ぶ声が聞こえて顔を上げる。

「愛美！」

それは宏章だった。

車が行き交う広い通りの向こうに、宏章の姿が見える。

「宏章さん……」

遠くからでも彼の表情が手に取るようにわかり、胸が締め付けられた。

「そこにいてくれ！　すぐに行くから！」

宏章が通りを渡ろうと、信号を無視して道路に足を踏み出した。

クラクションを大きく鳴らして、行き交う車が次々と急ブレーキをかける。

「頼む、愛美！」

「出してください。早く」

私はタクシーに乗り込むと、運転手に言った。

私が乗り込むのを待っていたタクシーがすぐに走り出す。

後ろから、いくつものクラクションと急ブレーキの音が聞こえてくる。

後部座席から後ろを振り返ると、宏章が何台もの車に進路を阻まれながらも、必死で私の後を追おうとしているのが見えた。

車は渋滞を引き起こし、なかなか動き出すようすがない。

あの男達が私を追うのにも時間が掛かるはずだ。

角を曲がって少し行った所でタクシーを降り、流しのタクシーを拾って進む方向を変えると、私は黒いシートの中にうずもれるようにもたれかかった。

張り詰めていた最後の糸が、ふっと切れた気がした。

「お客さん、どちらまで？」

タクシーの運転手に、私はぼんやりと行き先を告げた。

それはここから離れた所にある、以前母と暮らしていた町の名前だった。

錆びたシャッターを閉じた店がならば飲食店街の裏通りに、その医院はあった。

この少し先に、昔、母が働いていた店がある。

小学生の頃、何か母に届け物をする時にここを通らなければならぬのが、嫌でたまらなかった。

古びたコンクリートの建物を見るとなぜかぞつとして、胸が締め付けられたようになる。

生きて生まれる赤ん坊より、死んで生まれる赤ん坊の方が多い所だからさ……。

母と同じ店に勤めていた女が、赤く染めた爪先に細い煙草を挟み、口に咥えながら私に言った。

あたしも何度もお世話になったよ。あんたもそのうち、この病院のことを思い出すかもしれないよ。

タクシーから降りた後、私はその病院へと迷わず足を踏み入れた。重く絡みつく昔の記憶に引きずり込まれるように。

病院の待合室の長椅子には、中年の派手な女が一人だけ座っていて、私を上から下までじろじろと眺め回している。

無人の受付に何度か声をかけた。ようやく事務の女が出てくると、彼女は気だるそうな態度で私に問診表を渡してよこした。

「保険証は？」

女はやる気のない口調でそう聞き、私が首を振ると、またかという顔でため息をついた。

問診表に偽った歳と住所を書き、熱を測って渡す。

また微熱が出ていた。

患者の影が見えないままに長い間待たされ、私はようやく狭く薄暗い診察室に足を踏み入れた。

「それで？」

椅子に座るなり、疲れた表情の中年の医師は、私を見ずにそう言った。

「妊娠していて……」

膝の上に置いた手が震える。

「事情があつて産めません」

そこまで囁くように言い、私は残りの言葉を一気に口から絞り出した。

「五カ月になります。どうしても、すぐに中絶したいんです。このままお願いできないでしょうか。お金は用意しています」

医師は私を見、冷たく言った。

「そこまでほつたらかしといて、今日、急に墮ろしたいってわけか。酷いもんだな」



その通りだ。

「お願いします。先生は事情を汲んで下さると聞きました。どうか……」

私は泣くまいと必死に堪えながら、なおも医師に懇願した。

何を言っても言い訳にはならない。

私は罪のないひとつの小さな命を無残に摘み取るのだ。

「ここを誰から？」

「母が……働いていたお店の女の人から……。数年前に……」

医師はしばらく私を見た後、感情のこもらない声で言った。

「あなたによく似た女を知ってたよ。その女は中絶手術の直前に気を変えて病院から姿を消した。もう十五年も前のことだがね」

それから医師はいくつか私に質問をし、横に立っていた痩せぎすの看護婦にぞんざいに指示を出した。

私が差し出した現金入りの封筒を受け取って、薄汚れた白衣のポケットにねじ込む。

「じゃあ、瀬名さん、こっちへ来て。準備があるから」

医師が出て行った後、廊下に出ると看護婦に呼ばれた。

蛍光灯で照らされた薄暗い廊下の先に処置室のライトが見える。

問診表に書いた名前は陸人の父の苗字だった。

とつさにそれしか出てこなかったのだ。

瀬名エミ。

罪深い自分を表すにはぴったりの名前だ。

私は兄を愛した。

そして川崎を騙して死に追いやり、宏章の子どもを自分勝手に身ごもって、殺す。

涙は出てこなかった。

きつと胸が張り裂けてしまったのだ。

残骸すら残らないほどに。

「今夜から明日の朝にかけて準備して、明日の午前に処置することになるわ」

看護師が事務的な口調で言う。

はい、と私は答えた。

自分の声が遠くに聞こえる。

アクセサリーは一切取つてと看護婦は言ったが、私は首を横に振った。

いいえ。これを外すことはできません。

看護婦はため息をつき、まあ自分の責任だからと呟いた。

その夜私は病院の二階にあるきしむベッドに横たわり、流れない涙を流し続けた。

「お母さん……。助けて。お母さん……」

何度もその言葉を繰り返していたことにようやく気がつく。

自分のお腹の子どもを殺そうとしているのに、私は母を求めている。

誰にでもなく、母に抱きしめてもらいたかった。

赤ちゃんが死んでしまうの。赤ちゃんが……。  
声にならない悲鳴を上げた。

怖い……。怖い……。  
……。助けて……。お母さん……。  
お母さん……。！

私はお腹の子どもを殺した。  
殺してしまった。

二度と許されない罪。

目もくらむ激痛の中で、身体が麻痺して震え続けていたことは覚えて  
いる。

医師が何度も舌打ちをするのが聞こえた。  
はした金じゃあ割りに合わん。

心も身体もずたずたに切り刻まれたように痛んだ。  
自分が息をしているのかどうかもわからない。  
この痛みがいつまでも続けばいい。  
私だけが生きているのだから。

漆黒の闇が私を取り巻いた。  
悪夢が現実を食いちぎる。  
永遠に続く、恐ろしい闇。

翌日、もう退院しますと私は言った。

どこか遠くに行かなくてはならない。  
あの男達が追ってくるかも知れない。  
きつともう、すぐそこまで来ているのだ。  
宏章を、陸人を、私の赤ちゃんを苦しめるために。

私は今、どこにいるのだろうか。  
悪夢という名の現実の中なのか。  
現実という名の悪夢の中なのか。

あの男達から逃げなくては。  
他のことは何も考えられなかった。

身体が火のように熱く、苦しい。  
お腹は今でも何かを突き刺しているように激しく痛む。  
だが私は、看護師が持ってきた体温計を平熱になるまで手で握り、  
熱などないように放置した。

高熱があることを知られては、ここから帰してもらえない。  
私はここに閉じ込められるのだ。  
あの子を苦しめる、恐ろしい男達が見つげに来るまで。

ねえ、生きている方が苦しいんだよ。だからね、苦しむ前に  
逃げるの。生まれるまえに天国に逃げるの……。

誰の声だろう。  
幼い頃の私だろうか。

だけど、この子は生まれてしまった。  
両方の胸がこんなに張りつめて痛むのは、赤ちゃんが生まれたせいだ。

だから私はここから逃げて、この腕で子どもを抱かなくてはならない。

「迎えが来てるんです」

私はうわごとのように看護師に言い、私の赤ちゃんを連れて帰り

ますと何度もつぶやいた。

私を見る看護師の顔がゆるりと溶けて、白い病室が足元からぐにやりと崩れていく。

子どもがまだ病院にいるのは知っている。

分娩台の上で、処置をする医師に、赤ちゃんを捨てないで私は絶叫した。

恐怖に駆られた声が耳に響いていた。

あれは私の声なのだろうか。それとも。

どこかであの子が私を呼んでいる。

泣いて、冷たい透明な液体を満たした瓶の中に。

連れて帰らなければ息ができない。

早く私の赤ちゃんを返して。

早く。

ああ、誰か、神様……。

私の小さな娘。

連れて帰ろう。

一緒に帰らなくては。

母が私を待っているから。

今、私は赤ちゃんを胸に抱いて、母の待つ家への道を歩いている。

小さな頃からずっと知っている道だから間違えない。

何度も通った道。

時々辺りの景色がぼんやりとかすむ。

熱があるようだがたいしたことはない。

こんな症状はいつものことだ。

道を擦れ違う人が、驚いて私を振り返っている。  
道端のブロック塀に手を付かないと立ってられないからだ。  
もう少しふらつかずにしっかりと歩かなければ。

この道をもう少し行けば、懐かしいアパートが見える。  
白いコートを着ているから、母は私だとすぐ気がつくはずだ。  
いつか買ってもらった、あのコートと同じ白。

あともう少しで家に帰れる。

家のドアを開けたら、お帰り、愛美と私を抱いてくれる。

お母さんが。

お母さん。

突然、あたりが暗くなった。

誰かの悲鳴が聞こえる。

どうしてそんなに叫んでいるの？

自分が冷たい道の上に倒れているのに気がついた。

こんなところで転んでは、赤ちゃんが怪我をしてしまう……。

「誰か！ 救急車を呼んで！ 早く！ 女の子が倒れてる！」

救急車……？

私は赤ちゃんを連れて家に帰らなくてはならないのに。  
お願い、私をそっとしておいて。

ほら、そこにお母さんが待っているのだから。





そのまま意識を失った。

何日も何日も眠り続けた。

夢を見続けていた。

懐かしく遠い、いくつかの顔と揺らめく白。

そして舞い散る櫻の花びら。

桜になつて、咲いたの。それから、天国に行ったの。

時々ふと意識が戻ると、知っている顔が見えた。

白い天井。

結城先生、優花ちゃん、佐久間先生……。

それとも、これも夢なのだろうか。

なぜ皆は泣いているのだろう。

……どうしたの？ 陸人……。泣かないで

誰かに酷いことをされたの……？ 陸人……………。

手を伸ばすと、それは宏章の顔に変わる。

「愛美」

宏章が泣いていた。

黒い瞳から、次々と涙を零して。

「……頼むから、行かないでくれ。ずっと一緒にいるって約束したる？」

私は死にかけているのだと、ぼんやり思った。

川崎……。

川崎は先に行ってしまった。そして、私の赤ちゃん。

「お願いだ。愛美……」

宏章が私の手を取り、泣き濡れた頬に押し当てた。

暗闇の中に、次々と櫻の花びらが降ってくる。  
息も出来ないほど、沢山の花びら。

ずっと降って来る花びらを見上げると、空だか地面だかわからなくなる……

それ、やってみたいな。花びらに囲まれてふんわり浮いてる感じになるのね……

遠くに白いコートを着た、長い髪の幼い女の子が立っている。  
美しい雪のような花びらに包まれて。  
その姿を見た途端、胸が一杯になり、涙が溢れた。

……お父さんがいるから。

女の子が言った。

隣に誰かの後姿が見える。

……大丈夫だよ、お母さん。お父さんが手を繋いでくれるよ……。

女の子は微笑んで、隣に立つ少年を見上げた。

……ほら、火傷の跡はもうないんだ。

川崎は私を振りかえってそう言つと、優しく女の子の手を取つた。

私が命をとりとめたのは奇跡だった。

中絶後の手当ての不備から、敗血症にかかったのだ。

もともと身体の免疫機能に問題がある私には、致命傷とも言える病気だった。

死は避けられないと、誰もが思ったという。

「あの病院にそのままいたら、間違いなく最悪の結果になっていた。愛美があそこら出てくれてよかったよ」

結城医師は、その後、私にそう言った。

私はあの産婦人科から昔住んでいたアパートに向かう途中の道で倒れ、救急車で地元の病院に運ばれた。

持っていた川崎の形見の携帯から亮子に知らせが届き、私の身元がわかったおかげで結城医師に連絡が付いた。

そうでなければ、間違いなく死んでいただろう。

私の免疫異常がどういう類のものだか、運ばれた病院ではすぐに調べられない。

結城医師や陸人が駆けつけた時には、私は高熱で意識が混濁していて、ずっとうわごとを言い続けていたという。

それが何だったのか、医師も陸人も私に言わない。

陸人はそれを聞いて泣き続けていたと、後から世話をしてくれた看護師が言った。

その様子をとっても見ていられなかったと。

何が私をこの世に引き止めたのだろう。

なぜ私だけが生きているのか。

彼らは、私を連れて行ってくれなかった。

熱に浮かされていた時のことは、ほとんど覚えていない。けれど、目を閉じると今でも聞こえる言葉がある。誰のものともわからない、穏やかで優しい声。

いつかきつと会えるから。きつといつか。

高熱がようやく引いた朝、私の目に映ったものは、椅子に座り、壁に寄りかかったまま眠っている宏章の姿だった。

ブラインドから漏れる細い明かりが、優しく彼の寝顔を照らしている。

ベッドに横たわったまま、懐かしい宏章の姿を見ていた。

「目が覚めたんだ……」

宏章がふと目を開け、私を見た。

ゆっくりと立ち上がってベッドの横に立つと、私の額に触れる。

「熱が引いてる。よかった……」

ベッドに腰掛け、腕を付いて私の目を覗き込むと、彼はそっと聞いた。

「夢は、見た？」

私は横に小さく首を振る。

宏章に伝えたい事はたくさんあるのに、想いをうまく言葉にでき

ない。

「女の子だったの。連れて来たのよ。あそこには置いておけなかった」

後が続かず、ただ涙を流す私の手を慈しむように取り、宏章は言った。

「ああ。わかるよ。愛美に似た可愛い女の子だった」

「……ごめんなさい。私……」

「愛美のせいじゃない。俺のせいだ。愛美の苦しみに気がついてあげられなくてごめん。俺たちの子どもだ。絶対に忘れないよ」

涙で頷く私に、彼は静かに言った。

「もう心配しなくていい。愛美を怖がらせる奴らは誰もいない。結城先生が、冷静に対処してくれた。」

あの記者は、恐喝容疑で逮捕されたよ。俺の手元にあったあの教師の携帯についた指紋も、証拠のひとつになった。

川崎を殺した男も、昨日の夕方連行された。佐藤さんって女性が、暴力団の報復を恐れずに、全てを証言した」

宏章は真剣な表情で私の目を見つめ、手を握りしめた。

「もう二度と愛美を悲しませない。だから、どうか俺を信じて欲しい。この気持ちは何があっても変わらない。一生、愛美を守るから……」

言葉に尽くせない様々な想いが胸にこみ上げ、溢れる涙となって  
零れ落ちる。

私を抱きしめる宏章の背に、きつく腕を回した。

小さな私達の娘は宏章が届け出て火葬され、薄青い煙となって春の空に帰って行った。

あれから一ヶ月が過ぎた。

途中から転院した結城医師の病院のベッドの上で、私は卒業証書を得て、十五歳の誕生日を迎えた。

病室の枕もとの花瓶には桜が一枝活けてあり、窓から吹き込む柔らかな風に可憐な花を揺らしている。

今年は春の訪れが遅く、ようやく花が少しずつ散り始めたところらしい。

ずっと枕元に置いてある、私の命を救った川崎の携帯を手にとった。

いくつも登録されていない電話番号。

「家族」という所に、亮子のナンバーだけが一つ記されている。

私は、孤独な少年の魂を胸に抱きしめた。

いつか生まれ変わった時には、溢れるほどの愛情が彼を包んでいて欲しい。

彼が望んでいた、暖かな愛。

川崎の死と、彼が残してくれたものは、私達の運命を劇的に変えた。

彼が亮子に預けていたものは、川崎が撮っていた、新民主党の議員と暴力団の癒着を示唆する数多くの写真、盗聴テープ、それに暴力団が揺すっていた新民主党議員と大手建設会社の談合の現場だった。

その証拠物件の主役の議員は、宏章の父をもっとも糾弾していた



代議士で、その後、霧島代議士を落としいれ自由党に大打撃を食らわす計画の全貌が明らかになる。

まるでオセロのような大逆転劇で、汚職に関わった新民党の複数の議員が辞職、問題の代議士は逮捕されるという衝撃的な結末を迎えた。

これらの事件で、世評は一気に新民党批判と自由党擁護に傾いた。新民党議員の工作のターゲットにされた霧島代議士は名誉挽回を成し遂げ、前以上に有権者の支持と同情を集めることになる。

愛人との関係は潔白だったとされ、自殺未遂を図った妻との関係は美談に祭り上げられた。

「どの党だって、どうせやってることは皆同じなんだよ。スケープゴートの影で、甘い汁を吸ってる奴だけがほくそえむ。親父は危うく捨て駒にされるとこだったのさ」

宏章が皮肉に、けれど、すこしほつとした口調でそう言った。

霧島代議士の汚職を示す証拠は、何一つ出てこなかった。

もともと陥れられただけなのかもしれないし、川崎が全て処分したのかもしれない。

今となつては、それを証明するものは何もない。

そして、自由党は今、党をあげて霧島議員を擁護すべき状況にある。

宏章の父が、花束を手にとって病棟の廊下を行きつ戻りつしているところを見た。

まるであの日の宏章のように、手に握り締めた花束の包装紙が破れそうになるほどきつく握り締めて。

どこかで擦れ違ってしまった夫婦が、元に戻っていけるのかどう

かはわからない。

ただ、宏章の父母は、歩み寄るきっかけをもう一度与えられたことだけは確かだ。

私は霧島代議士の世話で、華南学院の関係者の養女になることが決まった。

それを受け入れるのは容易ではなかったことは事実だ。

けれど、陸人は私を施設から出し、幸せにするために、今まで築き上げて来たサッカーを捨てた。

私が命を失いかけた時、兄は激怒して宏章に激しく詰め寄り、二人は警察が介入するほどの乱闘を起こしてしまったのだ。

兄は、宏章が私を妊娠させたのを知っていながら放置したと思い、宏章はあの記者の言葉で、私が陸人との禁じられた関係に苦しんで妊娠を打ち明けられなかったと思い込んでの争いだったことを、ずいぶん後になってから知った。

彼らは警察に何を聞かれても本当の理由を口にせず、自分から手を出したと供述した陸人だけが補導された。

宏章の怪我の方が重傷だったこともあるが、暴力事件の責任を全て負うことを条件に、兄は宏章の父に直接交渉して私の将来を保障させていたのだ。

川崎の残したものは大きな力を持っていたし、代議士はようやく上向きかけた立場を守るのに必死で、私の面倒を見れば全てが治まるなら造作もないと思ったのだろう。

そして、宏章は、陸人がもう姿を現さないことが私を守ることものだと信じていた。

全ては私が入院している間に進められ、私は退院する前日、陸人が慶京高校を退学した事実をようやく伝えられた。

「これが一番いい。愛美には家柄のいいちゃんとした両親と家庭ができる。華南の高等部にも通えるし、大学にだって行ける。もう誰かに脅かされることも傷付けられることもない、普通の生活を送れるんだ。俺のサッカーは、それに比べればたいしたことじゃないんだよ」

兄は私と並んでベンチに座り、静かにそう言った。

一斉に咲き誇った桜が、美しい花の重みに耐え切れなかったかのように、はらはらと花びらを散らせている。

病院の近くにある公園に、私達は来ていた。

満開の桜が、目に見える限り続いている。

去年、陸人と二人で見た時と同じ、胸が痛むほど美しい桜雲。

結城先生に許可をもらったから、あの公園に行ってみないか。そう言われた時に、予感はしていた。

陸人との別れ。

「陸人はこれからどうするの？」

陸人がサッカーを諦めることは、身体を半分引き千切られるのと同じだ。

それでも、陸人の気持ちが揺るがないのはわかっていた。

私は、陸人が掛け替えのないものと引き換えに与えてくれた将来を受け入れなくてはならない。

「一人になって少しゆっくり考えるよ。日本の有力校ではもう無理だけど、サッカーができなくなるわけじゃない。だから、愛美は何も心配なくていいんだ」

私と入れ替わるように施設に戻ることを、陸人は最後まで口に出さなかった。

「これでもう会えない。それが条件の一つなんだ。お前が施設に暮

らしていたことと、俺が兄だつてことは内密にしろと言われてる。俺は蔵木から瀬名にかわるよ。親父を見つけ出して、そうしてもらった。

愛美と俺の人生はここで別れたんだ。もう、昔を思い出しちゃいけない。俺のことも忘れて、新しい人生を幸せに生きるんだよ」

私は潤む目を隠すように頷いた。

辛くとも、涙を見せてはいけないのがわかっていた。

手のひらに静かに降りつもる桜の花びらを、そっと地面に落とす。私は言った。

「一緒に移動動物園に連れて行ってもらったときのこと、覚えてる？」

陸人は少し笑って頷いた。

「ああ。もちろん覚えてるよ」

昔を懐かしむように、陸人は遠くの景色を見ながら言った。

「不思議なもんだよな。思い出して泣きたくなくなるのは、辛かったことでも苦しかったことでもない。ずっと続けばいいと願った、幸せな日の思い出なんだ」

春の強い風が桜の花びらを一齐に巻き上げ、一面に白く優しいかけらを降らせ始めた。

「綺麗……。沢山の花びら……」

陸人は私と一緒に上を見上げながら言った。

「凄いな……。こうしてると、空だか地面だかわからなくなる……」

手を繋いだ幼い兄妹の思い出に、桜はいつまでも美しい花びらを降らせ続けた。

「藤城さん、お疲れ様。時間だからもう上がっていいわよ。今日はお給料日だから、素敵な旦那様にご馳走作ってあげないかね」

顔見知りの事務員が、子ども達と芝生の上で遊ぶ私に声をかけ、につこり笑って通り過ぎて行った。  
そうからかわれると、私が口ごもって赤面するのを知っているのだ。

「愛美先生、お嫁さんだったの？」

最近この施設に入っただばかりの亜里砂が、ままごとの手を休めて私を見上げた。

「違うわ」

私は笑って首を横に振る。

「お腹に赤ちゃん入ってる？」

私の髪にコスモスを編みこもうと一生懸命になっていた真由が、小さな手を止め、心配そうに聞いた。

「うっん。入ってないの」

私は立ち上がり、髪から零れ落ちたピンクの花を拾って真由の耳の後ろにさすと、頭を撫でてそう答えた。

「よかった。だって、愛美先生、赤ちゃんだけ大好きになっちゃったら、真由泣いちゃうもん」

真由が大きな目を潤ませて、私に抱きつく。

「大丈夫よ。心配しないで、真由ちゃん」

私が笑って抱きしめても、真由はまだ不安そうに顔を伏せたままだ。

「愛美先生は、たとえ赤ちゃんが生まれても変わらないよ。私が小さな頃から、ずっと変わっていないもん」

セーラー服に身を包んだショートカットの女の子が、こちらへ歩いてきたところだった。

日に焼けた肌と、聡明な目をした、快活そうな少女だ。

「優花ちゃん、今日は部活休みなの？ 帰り、早かったわね」

「ううん。今日はこれから、陸上競技場でリレーの練習。来月地区の秋期記録会にメンバーで出るから頑張ってるの。愛美姉ちゃんも見に来てくれる？」

優花が照れながらも誇らしそうにそう言ったとたん、まわりを取り囲んだ子どもたちが賑やかに声を上げた。

「ぼくも行くー！」

「ねえ、愛美先生、亜里抄もー」



私は子どもたちに一斉に抱きつかれて笑い声を上げた。

「わかったわ。茉莉先生に聞いてあげるね。みんなで優花お姉ちゃん  
の応援に行こうか」

「わーい！ やったあー！」

「今日は先生、これで帰るね。またあさつて来るから、茉莉先生の  
言うことをちゃんと聞いて、たくさんご飯食べなくちゃだめよ」

「はい。月曜日ね！ 絶対に来てね、愛美先生」

子ども達が喜んでしゃぎ回る中を、私は優花と並んで病院の方  
へ向かって歩き始めた。

「お母さんもね、見に来てくれるって……」

優花は隣に並ぶ私に、さりげなくそう言った。

「ほんとに？ よかったわね、優花ちゃん。お母さんもこんなに足  
の速い娘を持ったら鼻高々よ」

私と変わらないほど背が伸びた優花は、嬉しさを隠しきれずに笑  
顔を見せた。

「あつ。茉莉先生だ。こんにちは、先生」

病院から養護施設に続く渡り廊下の大きな窓から、佐久間が手を  
振っていた。

「愛美ちゃん、優花ちゃん、一緒にお茶をどう？ クッキーも焼いたのよ」

優花が悪戯っぽく笑って言い返す。

「結城先生も欲しがるんじゃないかな」

「いいのよ。まだきつとお仕事なもの。……あら、結城先生」

結城医師が後ろに立っているのを見つけて、佐久間が頬を染めた。こうしていると二人とも若々しく、昔とまったく変わっていないように見える。

「クッキーもお預けか。なにもかもお預けで哀しいよ」

医師はわざと大きくため息をつく、優しい笑顔で佐久間の顔を見、私に向かって言った。

「じいさんが、自分の目の黒いうちに早く身を固めろってうるさくてかなわないのに、なかなか首を縦に振ってくれない頑固者のせいで傷心の毎日だよ。足腰が立たない爺になる前に何とかなるかな。どう思う？ 愛美」

医師の言葉でますます白い肌を赤く染めた佐久間をちらっと見て、私は答えた。

「大丈夫。亮子さんが絶対もうすぐよって、昨日も自信満々に言っていました。結婚式の二次会は、ぜったい亮子さんの小料理屋さんでって、今から張り切ってますよ」

「亮子さんの小料理屋。いいね。聞いただけで腹が減ってくるよ。愛美も先生がいいから、ずいぶん料理の腕が上がったろう?。」

「どうかしら。宏章さんは、昔から何を出してもおいしいって言うてくれるから、自分の料理の腕前が今でもよく分らないんです」

「それは、ご馳走様」

医師が笑った。

それから優香を見て思わせぶりに目配せする。

「そうそう、昨日、匠が亮子さんからの差し入れを持ってきてくれたよ。すっかり大人っぽくなった」

匠の名前を聞いて、今度は優花が真っ赤に頬を染めた。

亮子の長男の匠はもう中学二年になり、優花と同じ学校の陸上部で日々記録を打ち立てているのだ。

「亮子さんに、くれぐれも後押し宜しくと伝えといてくれよ」

医師は情けなさそうな表情で皆を笑わせると、私に言った。

「愛美、明日は入院患者と子どもたちの交流会だ。休みのところを悪いんだが、出勤して手伝ってもらえないかな。アルバイト代を別に出すよ。夏休みなら、暇な伶に手伝ってもらえるんだが、あいつもフランスの大学じゃあ役に立たん」

「ありがとうございます。そうさせていただけと私も助かります。今月はちよつと厳しかったから……」

私は医師に喜んで礼を言い、頭を下げた。

私が新しい父母の元で藤城愛美になってから、六度目の秋を迎えていた。

あの年の秋から、私は華南の高等部に通い始めた。

まるで、何も知らない無垢な少女のように。

藤城の家には二人の姉がいたが、私はどうしても受け入れてもらえないままに高校の三年間を過ごし、華南の大学には行かずに短大で養護の資格を取った。

結城医師が病院に併設した幼い子どもの養護施設で、どうしても

働きたかったのだ。

佐久間はここで働き始めて、もう三年経つ。

IT関連の事業を立ち上げる為に必死に努力している宏章と、二人で小さなアパートに暮らし始めて一年半だ。

絵に描いたように貧しい生活だったが、私は苦にはならなかった。二人のささやかな暮らしが幸せだった。

霧島の家との結びつきを強く願っていた養父母は、宏章が家を出て独立してしまったことに肩を落とし、私が宏章と暮らすために家を出ることをあっさりと許してくれた。

彼がやはり政界に入ると言い出すのを期待してのことだが、宏章の決意が揺るがないのは、私にはわかっていた。

霧島代議士は、いまや内閣の要職についている、押しも押されもせぬ政治家だ。

それでも宏章は父の後を継がず、自分で新たな道を歩むことを選んで、あの大きな家に別れを告げたのだ。

当然、宏章が政界入りすることを今でも強く望んでいる宏章の父は、私と宏章の関係を快く思っていない。

一緒に暮らしているのは、宏章の母が取りなしてくれているおかげだ。

宏章は、奨学生として難関国立大学へ入ると同時に、霧島の家を出た。

学校へ通いながらバイトをし、ベンチャー企業を立ち上げた。今はその可能性を広げようと頑張っている。

宏章は決して諦めない努力家だ。

いつか必ず、自分の目指すものを手にするに違いない。

「紗枝子叔母さんの残した手紙を読んだよ」

もう戻るつもりはないと決意した時、彼は実の母が残した手紙をようやく開けたことを私に告げた。

「小さな頃からずっとうちの親父が好きだったこと。俺を産んで愛しさと自責の念で葛藤したこと。新しくできた自分の家族への愛情との狭間で苦しんでいたことが綴られてた。それから、ずっと仲が良かったうちのお袋を苦しめたことを詫びていたよ」

私を見て、宏章は静かに続けた。

「自分の進む道を迷いなく決めた時、読んで欲しいと封筒に記されていた。紗枝子叔母さんは、迷いを断ち切れなかったために、幸せにしたかった人を不幸にしてしまったと。」

俺は迷わないよ。自分がどうしたいか、誰を幸せにしたいか、はつきりとわかってる」

運命とは、不思議なものだと思う。

幸せが不幸に変わることももちろんあるが、絶望のどん底に突き落とされた時に新しい運命が開けることもある。

陸人は慶京から転校した高校で、彼を心から愛する一生の相手に出会った。

日本の有力校で活躍できなくなった彼は、海外にサッカー選手としての活路を見出し、稀有な才能を見事に花開かせて順調な人生を歩んでいる。

人は忘れることが出来る。

辛い想い出は日々の小さな幸せによって癒され、過去の苦しみは

現在の喜びの前に風化する。

私が過ごしたあの少女時代すら、幻のように思えるときがあるのだ。

ただ、今でも首にかかるクロスが、私の心を鈍く痛ませることを除いては。

「宏章は相変わらず仕事の虫か？　好きな女にプロポーズを断られっぱなしで、俺と同じくくさってないといいが」

結城医師が笑ってそう言いながら、芝生の上に設えた椅子に座って足を組んだ。

秋の日差しに、眩しそうに目を向ける。

「そんなこと。私と宏章さんは、このままでいいんです。一緒にいられるだけで幸せですから」

私は医師にそう答え、爽やかな秋の日曜の午後を楽しそうに過ごす、子ども達と患者の姿に目をやった。

月に数回、病院に長期入院する身寄りのない患者と、施設の子ども達がかうして触れ合う。

誰一人、面会人が訪れない孤独をここで紛らすことで、患者は落ち着きと笑顔を取り戻す。

そして辛い経験を持った子ども達にも、同じ効果をもたらすのだった。

医師はしばらく黙っていたが、私を見ると優しく言った。

「少し昔話をしてもいいかな。大昔の話だよ。俺がまだ十歳くらいのことだ」

私は頷いた。



「宏章の家が、俺の実家のすぐ近くにあることは知っているだろう？」

家の前で遊んでいたとき、綺麗な少女が霧島家の前で立ち止まってじっと見上げてるのを見かけたんだ。俺より五歳くらい年上の、まるで天使みたいに綺麗な髪の長い少女で、ませガキの俺の一目ぼれで初恋の相手だったよ。その女の子が見たくて見たくて、いつまた来るかと窓に張り付いていたものさ」

椅子に背を持たせかけ、医師はそこでしばらく言葉を切った。

「宏章の祖父の愛人の娘だと、近所の人が噂しているのを聞いたよ。その愛人は父親の仕事で日本に来た美しいフランスの女性で、日本人男性と離婚したあと宏章の祖父に知り合ったのだと」

私を見て、医師は静かに言葉を繋いだ。

「その少女は愛美、お前にそっくりだった」

驚いて顔を上げ、医師を見た。

「少女の後を一度だけそつと追ったことがある。しばらく行っただころで、少女は突然立ち止まって振り返り、俺を見て言ったんだ。これ以上あとを追わないで。見られたくない、って。」

彼女が着ていたものは、思い出すといつも粗末な服だった。母親は愛人の援助を一切断っていたんだろうな」

私は何も言うことができず、黙って医師の話に耳を傾けていた。

「たったそれだけの思い出だ。だが、なぜか忘れられずにずっと心

に引つかかっていたんだよ。

あの少女を傷つけてしまった気がした。伶が友達の妹の身体の様子を見てやってくれとお前を連れてきた時、時間が逆行したような不思議な感覚にとらわれた。

お前と宏章がお互いに惹かれ合っているのを知った時にも、運命というものは存在するんじゃないかと考えさせられたよ。計り知れないものがこの世にはあって、どこか深いところで糸を紡ぐ様に繋がっているんじゃないかとね」

医師はそこまで話すと椅子から立ち上がり、私を真摯な表情で見た。

「皆、幸せになるべき人達だった。お前の母親も、宏章の母とその妹も。だからこそ、お前達には幸せになって欲しいと願ってる。

幸せの形は一樣じゃない。二人が愛し合っていてお互いを望んでいるのなら、一緒になることに何の問題がある？」

医師にはやはり全てを見ぬかれていたのだ。

私が宏章との結婚を拒み続けていること。その理由。

私は中絶の後遺症で、子どもを望めない身体だと医者に言われていた。

私が小さな娘の命を奪ってしまった罪なのだと思った。

拭い去ることが出来ない罪。

それを、宏章はまだ知らない。

もうずっと私との間に子どもを望んでいる宏章に、言い出すことができずにいたのだ。

その時、聞きなれた声が私を呼ぶのに気がついた。

「愛美」

宏章だった。

車椅子の女性を後ろから押して、こっちへ向かってくる。

「どうしても男手が足りなくてね。宏章に頼んだんだよ。勉強だ仕事だって部屋に缶詰になってないで、たまには外の空気を吸えってね。」

車いすの女性は重症の肝臓病で、数日前に施設から回ってきた。最後にもう一度外の空気が吸いたいと」

医師は私にそれだけ言うと、宏章の背中を軽く叩いて病院の方へ立ち去って行った。

その女性の顔を見た時、全ての時が止まった気がした。  
立ちすくんだまま、車椅子に座る女性から目をそらすことができない。

宏章を見上げると、彼は頷いて私を見返した。

「蔵木さんとおっしゃるそうだよ」

女性は死期が迫った患者に特有の色をした肌と、もう何も映すことはない、明るい色の瞳を持っていた。

白いものが混じった、艶のない栗色の長い髪。  
ゆっくりと顔を上げると、見えない目で私を見て微笑む。

「エミさんとおっしゃるんですか？」

私は震えながら頷いた。

「はい。藤城愛美と言います」

女性はまるで見えているかのようにじっと私の顔に目を向けていたが、やがてそつと言葉を口にした。

「私がよく知っている女の子の名前と同じ。その子名はフランスの言葉から名づけられたんですよ。Aimee。最愛の人、という意味です」

泣いていることを悟られないように、両手で顔を抑え、嗚咽をこらえる。

宏章は女性の隣にしゃがむと顔を覗見つめ、優しく聞いた。

「この位置でいいですか？ 子ども達の声が聞こえますか？」

女性は頷くと、子ども達が楽しそうに声をあげる方向を遠く見やうた。

宏章は車椅子を固定すると立ち上がり、涙が止まらない私のそば

に來ると、何も言わずに抱きしめてくれた。  
緑の芝生を渡る風が私達を取り囲み、髪を揺らしてそつと離れていく。

女性はずつと子ども達の遊ぶ方向を見ていたが、やがて口を開いた。

「身寄りのない子ども達なのですね？」

「はい。御両親に事情があつて、預けられた子ども達です」

私は女性の言葉に答えた。

宏章がずつと肩を抱いてくれている。

「あなた方は御夫婦ですか？」

女性は顔を上げてそう聞いた。

「今は、まだ。でも、誰よりも大切な、かけがえのない女性です」

宏章が答えた。

女性は頷き、それから言った。

「あなた方がどれ程愛し合っているか、私にもよく見えます。自分の命が終わるころになって、私はようやくこの目に映すべきものを映せるようになりました。　　どうしてこの目が光を失うまで見えなかったのか」

女性の声が震える。

「私は昔、自分が産んだ子ども達を捨てました。毎日思い出すのは、私が身勝手に捨ててしまった小さな子ども達のことです。身体を蝕む病魔の痛みより、自分が愛を与えるべき子ども達を悲しませ、捨ててしまった後悔が私を苦しめるのです。二度と取り返しのつかないことをしてしまつたと」

こらえきれずに流れる涙が、次々と私の頬を伝う。  
女性の頬にも、いくつも涙が零れ落ちた。

「もう、母と名乗ることはできません。でも、許されるなら、命を終える前に、一目子ども達に会いたかつた」

女性は私を見上げ、細い手を差し伸べた。

「藤城さん、私に顔を見せていただけませんか？」

宏章が私を力づけるように頷き、そつと女性の方に押し出した。  
私は震えながらひざまずき、硬く強張つた女性の痩せた手をそつと握つた。

その冷たい手を自分の頬につける。  
私の顔に触れながら、ようやく女性は囁いた。

「ありがとう。藤城さん。もう一つだけお願いしたいことがあります。あなたが首に掛けている十字架を、私に下さい」

驚いて見上げる私に触れたまま、女性は言つた。

「あなたには重過ぎるクロスです。もうすぐこの世を旅立つ私には、ちようどいい連れになるでしょう。一人で旅立つことにも怯えずに済みます」

私は流れる涙を拭わず、痩せ衰えた母の手を握り締めた。

「このクロスは私の一部です。たとえ外しても、ずっと心に残っています。絶対に忘れることはありません」

私はそのまま母の膝に顔を伏せ、嗚咽した。

何があってもこのクロスを外せなかったのは、母との本当の別れを恐れていたせいだ。

クロスだけが、私が母と暮らしていたことを証明してくれる、ただ一つのものだったから。

今、母は私と陸人のために泣き、死は母のすぐ側まで近づいている。

「あなたが外してくれますか？」

母は宏章に言った。

「はい。いつかそうできる日が来ることを願っていました」

宏章は答え、私の首の後ろの金具に触れた。

「外すよ、愛美。いいね？」

頷いた私の首から、宏章はその鎖を外した。

私の業であり、守りでもあった銀のクロスと共に。

宏章の手から渡されたクロスを、私は母の細い首に掛けた。母はクロスに手を触れ、宏章を見上げた。

「どうか、幸せに……。このかたを、幸せにしてあげて下さい。あなたには、きっとそれができる」

「もちろんです。必ず幸せにして、一生守り通します」

宏章が母を見て頷く。

そして、それが母との永遠の別れになった。



「ママ、赤ちゃんはいつ生まえるの？　赤ちゃん、女の子だもん。颯、いっぱい遊んであげる」

産婦人科での定期健診の帰り、もうすぐ三歳になる颯が小さな手で私の手を握り、嬉しくてたまらないようすで飛び跳ねた。

黒目がちの大きな目が、楽しそうに輝いている。

その笑顔を見ると、いつも愛しさで胸が一杯になる。

私も自然に微笑んだ。

子どもはできないだろうと言われていた私が、母の死後、すぐに颯を身ごもり、今またお腹にもう一つの命を宿していることをどう説明したらいいのだろう。

私達は、颯がお腹に宿ったのをきっかけに、籍を入れた。

秋になれば、私と宏章の間には、二人目の子どもが生まれる。

宏章はそれを励みに、軌道に乗って忙しくなった仕事に、日々懸命に取り組んでいた。

夏の強く照りつける日ざしを遮るように、私は脱げかけた颯の帽子をもう一度しっかりかぶせた。

「颯はどうして赤ちゃんが女の子だと思うの？」

「パパ約束したもん。こんどはぜったい、女の子って。ママににてる、かわいいよって、パパ言った」

「そんな約束してたの。まだ内緒にしてたのに、パパったら困ったわね」

「困らないもん。颯、パパ大好きもん」

「ママもパパが大好きよ。颯のことも大好き。ほら、また帽子が脱げちゃったわ」

喜んで私に抱きつく颯を引き寄せ、赤みのある柔らかな髪を撫でる。

その時、横道から、背の高い影が、大通りにすつと姿を現すのが見えた。

行き交う人の間に見えるその男は、冷静なようすで、デニムの後ろポケットに光る何かを差し入れた。

金色の長い髪からのぞく端正な横顔。

黒いタンクトップを着たむき出しの腕には、大きな十字架の刺青があった。

「玖出さん……」

驚いて呟いた。

男は私がいることがわかっていたかのように顔を上げ、真っ直ぐにこつちを見た。

まるで私の半身のように見えるその顔には、まったく感情が見えない。

恐ろしいほど、暗く冷たい目。

玖出はすぐに視線ををそらすと、私に背を向けて雑踏の中に消えて行った。

「誰か！ 救急車を呼べ！」

同じ横道から走り出てきた男が、大声で叫んだ。

「男が刺されてる！ さっきの金髪の男を捕まえる！」

呆然と立ちすくむ私の耳に、遠くからサイレンの音が聞こえる。

「どうしたの？ ママ」

颯が私の手を引っ張った。

「なんでもないのよ……。なんでも……」

彼はクロスを外すことができなかったのだ。

柔らかな魂に、クロスは二度と消えない大きな傷を刻みつけた。

私は崩れるように膝をつく、小さな颯をきつく両腕で抱きしめた。

あれは私のもう一つの人生だ。

「ママ？」

私は目を閉じ、一筋の涙を流した。

傷ついた美しい目をした少年の姿が、陽炎のように揺らいで暗闇の中に消えた。

クロス・了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0395z/>

---

クロス

2011年12月31日19時51分発行